

公募研究シリーズ

42

若者のキャリア形成に おける社会関係の役割

～女子大生の将来展望と重要な他者～

土岐 智賀子

立命館大学
教育開発推進機構 講師

全労済協会

発刊にあたって

本報告誌は、全労済協会公募委託調査研究テーマ「絆の広がる社会づくり」で採用となった、「若者のキャリア形成における社会関係の役割～女子大生の将来展望と重要な他者」の研究成果です。

現在の若者にとって、大学進学は“普通”の選択肢とされていますが、このことは「職業生活と分断された生活」の長期化という側面を持っています。高校生の3/4が普通教育課程に在籍し、大学では多くが人文・社会科学系の一般教養的な科目で構成された専攻に属するなど、大半は将来携わる職業とは関連の少ない環境の中で学ぶからです。

そのような中で、若者が社会へ出る際に、就職活動が景気動向に左右されること、とりわけ2008年のリーマンショックの影響で雇用環境の急激な悪化が社会問題となったことは、まだ記憶に新しいところではないでしょうか。大学進学率の上昇と景気動向に翻弄される大量の大学生の出現は、大学生の職業移行支援研究の意義がますます大きくなっていることを示唆しています。

本研究では、女子大学生を対象にインタビューを行い、彼女たちの大学生という職業キャリア探索期における社会関係の特徴と将来展望、キャリア形成に関する重要な他者との出会いの場について調査しました。そして、若者に対する適切な自立支援と社会的な絆のあり方、ソーシャル・キャピタルの醸成機関としての教育機関の可能性を考察しています。具体的には、インターンシップ制度は、大学生のキャリア形成支援と社会的絆の役割を果たし、若者がメンター（大人）と出会うための有効な仕組みの一つであると期待しています。

また、インターンシップ制度の普及とともに重要なこととして、大人たちが次世代の成長を支援するメンターになる機会をつくることをあげています。そのためには、趣味の活動や社会的活動に多くの人に参加できるような仕組みをあらたに構築していくこと、長時間労働の解消等、産業界、政府や自治体、教育機関、私たち一人ひとりが知恵を絞って、働き方の仕組みを変えていくことも大きな課題となってくると述べています。

本報告誌の若者のキャリア形成における社会関係の役割の研究が、全国の教育関係者や研究者、自治体、企業、若者の親を含む市民、若者自身の一助となれば幸いです。

「公募委託調査研究」は、勤労者の福祉・生活に関する調査研究活動の一環として、当協会が2005年度から実施している事業です。勤労者を取り巻く環境の変化に応じて毎年募集テーマを設定し、幅広い研究者による多様な視点から調査研究を公募・実施することを通じて、広く相互扶助思想の普及を図り、もって勤労者の福祉向上に寄与することを目的としています。

当協会では研究成果を「公募研究シリーズ」として順次公表しています。

(財) 全労済協会

第1章 問題の所在	1
第1節 高等教育進学増加と就職困難	1
第2節 職業キャリア形成の視点からみた大学生活の特徴：職業生活との分断	4
第3節 女性のライフコースの変化	5
第4節 孤高のキャリア形成と、他者との関わりによるキャリア形成	6
第2章 キャリア形成における重要な他者とソーシャル・ネットワーク	7
第1節 重要な他者	7
第2節 ロールモデル、レファレント・パーソン、メンター	8
・ロールモデル（役割モデル）	8
・レファレント・パーソン（準拠人）	9
・メンター	10
小括：キャリア形成における「重要な他者」たち	11
第3節 ソーシャル・ネットワークとコンボイ	13
・ソーシャル・ネットワーク	13
・コンボイ（convoys 道づれ）	13
第4節 日本における若者のキャリア形成とソーシャル・ネットワークに関する研究	15
第5節 現代の若者の「社交」状況と、本研究における課題	16
現代の若者の「社交」の特徴	16
本研究における注目点	16
まとめ：本研究の課題	17
第3章 調査方法・データの概要と調査結果	18
第1節 調査方法・データの概要	18
第2節 調査結果：職業探索期に関わった人々	20
2.1 課題の確認	20
2.2 どのような人たちが相談者として選択されているか	21
相談相手	21
相談相手の組み合わせパターン：家族と学校関係に特化した相談ネットワーク	22
第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①	25
第1節 なんとんでも「母親」	25
第2節 母親の役割	26
第3節 父親の役割	32
第4節 きょうだいの役割	38
第5章 “学校” 関連の重要な人々：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち②	41
第1節 友人：一歩先行く同級生	41
第2節 先輩	42
第3節 教員	42

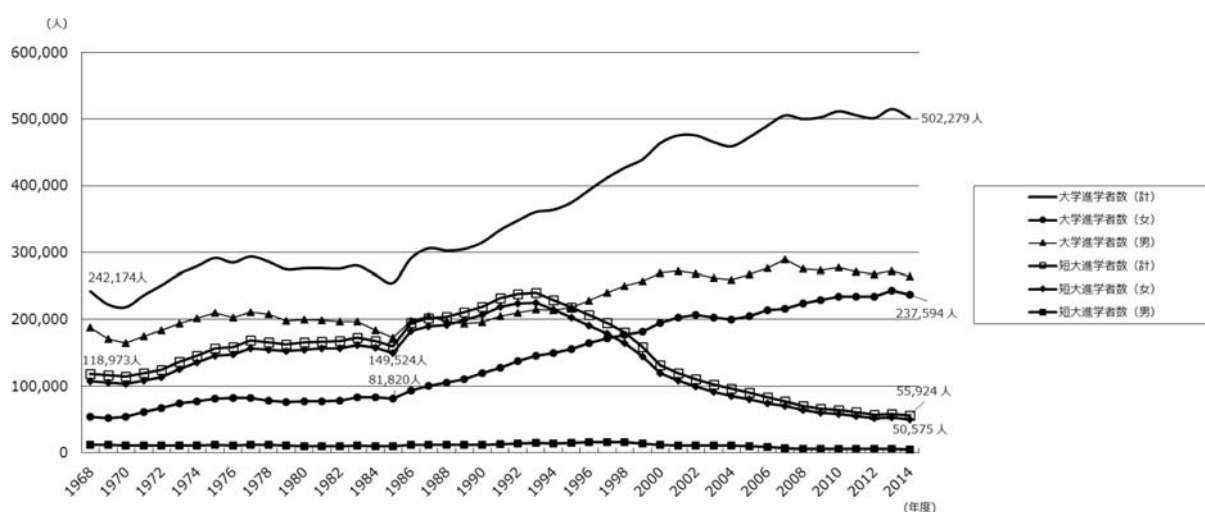
第6章 学校外のメンターたち：アルバイト・インターンシップ・ボランティア活動での出会い ……	47
第1節 アルバイト・インターンシップ先での出会い ……	47
【事例1】 ロールモデル、コーチとしての先輩と店長 ……	47
【事例2】 承認する店長と客 ……	48
【事例3】 同僚・先輩や社長：予期せぬロールモデルたちとの出会い ……	49
【事例4】 店長夫妻に対する憧れから職業の関心へのシフト ……	51
【事例5】 同僚・上司の仕事の仕方：職場の人間関係の重要性への気づき ……	52
【事例6】 カフェのオーナー夫妻からの指導：仕事への向き合い方を学ぶ ……	53
第2節 ボランティア活動での出会い ……	55
第7章 教職員の連携によるキャリア形成支援というモデル ……	57
第1節 手厚い就職支援：内外にわたる教職員の連携 ……	57
第2節 アットホームな学びの場 ……	59
第8章 ネットワーク構造と就職活動	
： 孤独な戦いと多様な応援団のいる戦い ……	62
第1節 社会関係の構造と就職活動の成果 ……	62
第2節 職業探索活動中の他者 ……	63
第9章 大学生のキャリア形成支援と社会的絆の役割	
： 産・官・学・民・家族ペンタゴンの絆の再構築の中でのキャリア形成支援に向けて ……	66
ソーシャル・キャピタルの醸成機関としての大学の可能性 ……	68
教育機関とソーシャル・キャピタル ……	68
メンターになる ……	69
大人がメンターとなれる仕組みとしてのインターンシップ制度 ……	70
かわいいわが子には旅をさせる！ ……	70
【参考文献】 ……	72

第1章 問題の所在

第1節 高等教育進学増加と就職困難

大学に行くこと、それは現在の日本社会においては、若者にとっていたって“普通”の選択肢とされている。団塊の世代が20歳前後であった1968年段階では大学・短期大学への進学者は合わせて36万人ほどだったのに対し、2014年では約56万人に上がっている（図表1）。大学・短期大学への進学は、戦後の高度成長期に大卒者の需要の高まりと高学歴志向、私立大学の新生などを背景として急上昇した後、オイルショックを契機とした不況と、大学進学に関する政策的抑制により一時伸びがとまったものの、1980年代後半からの抑制政策緩和を契機に再び上昇した。進学率でみると1968年では20%に満たなかったものが、1990年代初頭に40%を超え、さらに2005年以降50%を超えている（図表2）。M.トロウの定義¹にしたがえば、現在の日本は大学教育のユニバーサル化時代（大学に行くのが当たり前の時代）にある。

図表1. 大学・短期大学の進学者数の推移



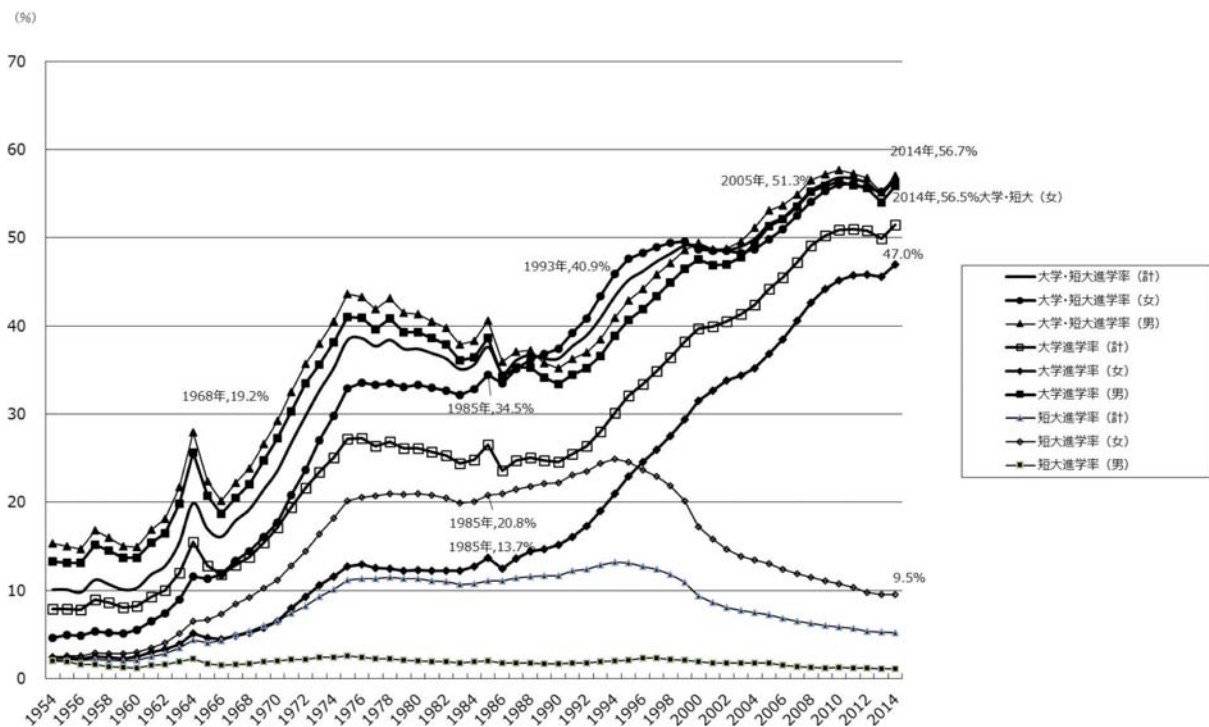
出所：文部省・文部科学省『学校基本調査報告書：初等中等教育機関 専修学校・各種学校編』『卒業後の状況調査 高等学校（全日制・定時制）』学科別大学・短期大学等への進学者数（大学は学部、短大は本科への進学者数）より作成

* 高等学校の卒業後の状況調査における大学・短大進学者数であるため、文部科学省『学校基本調査報告書：高等教育機関編』における入学者数とは異なる。

¹ M.トロウは大学の在籍割合が15%未満をエリート型、15～50%未満をマス型、50%以上をユニバーサル化に類型化し、それと対応した社会における高等教育の目的・役割等を整理した（1961=1976）。

第1章 問題の所在

図表2. 大学・短期大学進学率の推移



出所：文部科学省（2015）文部科学省（2015）『平成26年度学校基本調査 高等教育機関編』年次統計進学率（p.851）

* 進学率は大学学部・短期大学本科入学者数（過年度高卒者等を含む。）を3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数で除した比率である。大学は学部、短大は本科への進学率。

また、女性についてしてみると、短期大学・大学に進学する人の数は男女雇用機会均等法が制定された1985年の段階では、約23万1千人だったものが、2014年には28万8千人に達している（図表1）。約30年間で、5万7千人の増加である。また、進学率で見ると、1985年の34.5%に対し2014年は56.5%にのぼっている（図表2）。

その伸びの背景には大学への進学動向の変化がある。女性の大学進学率は1970年代初頭に10%を超えたものの、その後1994年に20%を上回るまで10%台にとどまっている。雇用機会均等法が制定された1985年の段階では、大学進学率は13.7%に過ぎない。それが、2014年には47.0%に至っており、30年間のうち33%ポイントもの増加がみられる。

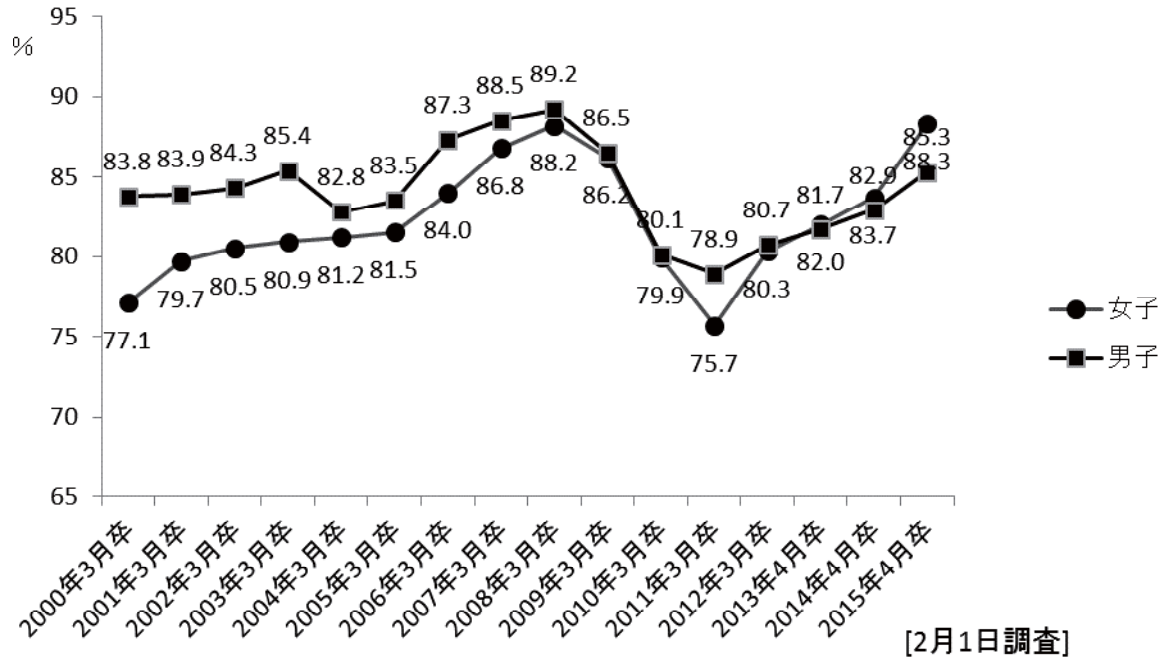
その一方、短期大学の進学率は1969年に10%を突破し、1975年には20%に達した。その後1999年まではほぼ20～24%台を維持し、女性の高校卒業後の進学先としては1995年までは大学を上回っていた。1996年に大学進学への比率が短期大学より上回って以降、短期大学への進学率は減少し、2012年に10%を下回り、2014年で9.2%となっている。

このように男女ともに同年代の半数にもものぼる若者が大学を経て就職するようになったこと、そして、経済状況の停滞のなかで直面した、大卒者の就職困難が引き金となり、大卒者の「学校から職業生活」への移行について関心が高まっている。

2000年以降に限定すると、2008年9月のアメリカの投資信託銀行リーマン・ブラザーズ社の破綻をきっかけに陥った世界的規模の経済危機を背景として、2009年度に大学4年生だった人たちの就職内定率は急激に落ち込んだ。2010年3月卒業生の2月時点での就職内定率は男子80.1%、女子79.9%となり、前年比で男子が5.4%ポイント、女子が4.2%ポイント下がっている（図表3）。

景気の緩やかな上昇とともに、その後、就職内定率は上昇に転じており、男女ともに卒業年の2月時点で80%の前半で推移している。2015年2月の就職内定率では、男子が85.3%で「就職氷河期」と呼ばれた2000年代初頭よりも上回り、女子にいたっては88.3%で、2000年と比較すると10%ポイントも上昇した。

図表3. 男女別大学生の就職内定率（2月1日時点）の推移



出所：厚生労働省・文部科学省「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」より作成

大学新卒者の就職内定率は2010年度に4年生だった人たちの卒業時（2011年3月卒）で底を打ち、以来順調に回復しており今後も好調の維持が期待される。とはいえ、数年にわたって続いた大量の大学新卒者の就職困難という状況を背景にして、大学新卒者の就職動向はマスメディアで頻繁に取り上げられるトピックの一つになっている。就職活動に関する書籍はこれまでも数多く出版されてきたが、近年では、当事者ばかりでなく、親はどのように対処すればよいのかを指南する書籍や情報誌が出されている²。

ここまでみてきたようなデータ、すなわち大学進学者の増加と、景気動向に左右され翻弄される大量の大学生の出現は、大学生の職業移行支援研究の意義がますます大きくなっていることを

² 小島貴子・東海左由留（2004）『子供を就職させる本：親が読む子供のための就職ガイダンス』メディアファクトリー、中村昭典（2009）『親子就活：親の悩み、子どものホンネ』アスキー・メディアワークス、園田雅江・佐藤訓（2010）『ウチの子内定まだなんです：我が子の就活にどう関わるべきか』日本経済新聞出版社、AERA（2011.2）『「親力」で勝つ就活：親が「無知」だと内定できません』朝日新聞出版、園田雅江（2011）『わが子を就活難民にしないため親ができること』主婦の友社、小島貴子（2011）『わが子を「内定迷子」にさせない！：親が伸ばす子どもの就活力』同文館出版、鈴木健介（2011）『就活は子どもに任せるな』中央公論新社、麓幸子（2011）『就活生の親が今、知っておくべきこと』日本経済新聞出版社、常見陽平（2012）『親は知らない就活の鉄則』朝日新聞社、田宮寛之（2012）『親子で勝つ就活：わが子が内定を勝ち取るための80のポイント』東洋経済新報社など。また日本経済新聞社のWEB版として「日経就職ナビ親子版：親子で就活」（<https://job.nikkei.co.jp/parents/>）がある。

第1章 問題の所在

示唆している。

2000年代以降、フリーター、NEET問題を契機にして若年雇用問題が大きな社会問題になったことにより、これまでも中学・高校卒業者（中退者）を主な対象にし、中学・高校から職業への移行に関する様々な研究が行われてきた。そして現在では若年雇用問題、言い換えれば、教育から職業への移行期問題は、大学進学者の増加と、雇用状況の停滞に伴い、社会的支援のあり方を念頭においた「大学卒業から職業生活への移行」研究³へと、対象者および対象の期間を広げる必要性を高めている。

第2節 職業キャリア形成の視点からみた大学生活の特徴：職業生活との分断

ところで、青年期から成人期への移行期間の長期化の要因の一つである大学への進学率の上昇は、日本の現状から見ると、ある特徴的な性質の長期化という様相を帯びたものとなる。それは「職業生活と分断された生活」の長期化という側面である。

日本の高校生の大半は、個々人が将来携わる職業とは関連の少ない環境の中で学んでいる。後期中等教育の在学者を「普通教育」、「プレ職業教育」、「職業教育」の3つの課程で区分してその在籍比率をみた場合、2010年のOECD加盟国の平均は、「普通教育」が54%、「プレ職業教育」が2.7%、「職業教育」が44.0%に対して、日本ではそれぞれ（前から順に）76.5%、0.9%、22.6%であり、普通教育課程の在籍が3/4強にも上っている（OECD 2012, p.332）。

さらに、大学においては、医学のような職業に関連する専門的な資格を取得できる専攻や、理系のような特殊技能の修得を目指した専攻とは異なり、多くの人たちが文系・社会科学系といった、一般教養的な科目で構成された専攻に入学し、卒業していく。

2004年度から2014年度までの10年間の学部学生の専攻分野の構成比をみると、近年割合が減少傾向にあるとはいえ、人文科学と社会科学を専攻した学生が45%を超えている（図表4）。大学生活を経由して職業人としての移行を経験する人々が増えることが、現状では、職業生活と分断された生活を長期間にわたって送る若者が増えていることを意味しているのである。

図表4. 専攻分野別学部学生の比率とその推移

区分	専攻分野の構成比 (%)											
	計	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	医・歯学	薬学	家政	教育	芸術	その他
2004	100.0	16.3	38.4	3.5	17.5	2.8	2.5	1.7	2.3	5.6	2.9	6.6
2009	100.0	15.4	35.3	3.2	16.0	3.0	2.5	2.1	2.6	6.3	2.9	10.5
2010	100.0	15.2	34.9	3.2	15.7	3.0	2.5	2.4	2.7	6.5	2.8	11.2
2011	100.0	15.0	34.2	3.2	15.4	2.9	2.6	2.8	2.7	6.7	2.8	11.7
2012	100.0	14.8	33.7	3.2	15.2	3.0	2.6	2.9	2.7	7.0	2.8	12.2
2013	100.0	14.7	33.1	3.1	15.2	3.0	2.7	2.9	2.8	7.2	2.7	12.6
2014	100.0	14.5	32.7	3.2	15.2	3.0	2.7	3.0	2.8	7.3	2.7	12.9

出所：文部科学省（2015）『平成26年度学校基本調査 高等教育機関編』p.7

³ 1970年代後半から1980年代の学歴主義（出身大学間格差）の議論に代表されるように、職業キャリア研究としては高卒者よりも大卒者を対象にした研究のほうが長い歴史がある（小杉 2010, pp.5-6）。

大学生生活を経由して職業人としての移行を経験する人々が増えることが、現状では、職業生活と分断された生活を長期間にわたって送る若者が増えていることを意味しているのである。

また、勤労学生の割合は2010年のデータで9.2%にしかすぎず（OECD 2012, p.334）⁴、在学中の職業経験は限定されたものになっている。

さらに、そのような動向と大きく関連する制度として、企業が新卒の大学生を採用する際に、専門知識・特殊技能が求められない雇用慣行は、よく知られるところである⁵。従来、新規学卒採用、終身雇用、年功序列処遇等を特徴とするところの「日本的雇用」のもとでは、職業キャリア形成の主体は個人ではなく、企業であったといっても過言ではないだろう。企業の人事部が、中期的な人事計画のもとに人員（新卒者）を採用・配置し、企業内で育成してきた。また企業は、採用後の教育訓練を通じて自社のカラーに染めやすい“無垢の若者”を好んできた。一方の大学生はどうかといえば大学生生活の4年間を、就職し会社人間になる前の最後の長い休暇として謳歌していた。そして新卒者は、就職し、働く中で、勤労態度を身につけ、勤労観・職業観を高めていった。

しかし、現在は、少子高齢化、産業構造の変化、国際競争力の激化など様々な要因が関連するなかで、企業が従来のように若者をじっくり育てていくのではなく、従業員一人ひとりに、より自立的にキャリアを築いていくことを求めるようになったと言われる。就職した人々が個々の将来展望と人生設計を企業に多く依存していたこれまでの仕組みが一気に崩れ去り、キャリアデザインのあるあり方の変更を迫っている。

第3節 女性のライフコースの変化

これまでみてきたように、第二次世界大戦後から高度経済成長を経て今日まで、私たちの生活は大きな変化を経験したが、女性を取り巻く環境、女性たちの生き方も大きく変化している。

とりわけ顕著なものとしてあげられるのは、雇用の多様化—パートタイムやアルバイトのほか、派遣社員としての雇用契約が普及した—といった変化を伴いながら進行している、女性の労働力の増加である。1985年の女性の労働力人口が2367万人であったのに対し、2011年では2632万人で、263万人の増加がみられ、労働力人口全体に占める女性の割合も増えている（厚生労働省2011, p.1）。

その動向を推進する大きなきっかけとなった男女雇用機会均等法が制定されたのが1985年である。男女雇用機会均等法の制定前後から今日というのは、知識産業・情報化社会、グローバル化、少子高齢社会というキーワードで語られる大きな社会構造の変動下にありながら、女性が高学歴化し、労働市場に大量に参入するようになった30年でもある。

では、上記のような状況のなかで、女子学生たちはどのように教育の世界から職業生活への移行を経験しているのだろうか。大学における専攻と職業が直接的に関連しない中で、どのようにして将来展望・キャリア展望を描き、具体的な就職活動を行っているのだろうか。それらを見て

⁴ OECD平均は20.4%。

⁵ 日本経済団体連合会による2012年4月入社者を対象にした調査によれば、選考にあたって特に重視した点（5つ選択）の上位は「コミュニケーション能力」82.6%、「主体性」60.3%、「チャレンジ精神」54.5%、「協調性」49.8%、「誠実性」34.2%、「潜在的可能性（ポテンシャル）」25.9%に対し、「専門性」、「学業成績」「保有資格」はそれぞれ、13.0%、7.6%、0.7%にとどまっている（日本経済団体連合会 2012）。

第1章 問題の所在

いこうというのが本研究の目的である。そして、この課題を検討するにあたり、本研究が目とする点は、他者との関わりである。

第4節 孤高のキャリア形成と、他者との関わりによるキャリア形成

「人脈のなかの履歴」。これは、社会学者浜口恵俊らが1979年に上梓した『日本人にとってキャリアとは』につけられた副題である。日本経済新聞に連載され、後に『私の履歴書』として編纂された資料など各界の著名人の伝記を分析し、日本人の特徴として提示したのが、人脈の中で形成される人々のキャリアである。浜口らは、このようなキャリアのあり方を「^{かんじん}間人型」と名付け、欧米人の「個人型」と対比させた。このとき浜口らの認識において、個人主義で知られる欧米人は、キャリア形成もまた、個々人が自分の意志で切り開いていくものであった（浜口 1979, p.19）。

しかし、「人脈のなかの履歴」は日本独自の特徴ではなく、欧米においてもまた多くみられることが、1970年代後半以降、数々の実証研究から明らかになっている。個人型キャリア形成のイメージが当のアメリカにおいて揺らぎ始めた経緯を、クラムの『メンタリング』（Kram 1988 = 2003）の翻訳者渡辺は、「訳者あとがき」の中で、次のように記している。

（1978年にアメリカで『*The Seasons of a man's life*（邦題：ライフサイクルの心理学）』を出版した）レビンソンたちは職業軍人、専門職、企業管理者からなる中年期の白人男性40人に対して、自らのライフヒストリーを記してもらおうという方法を用いて、詳細な聞き取り調査を行った。その結果、白人男性にとって、未成熟なヤング・アダルトから成熟したミドルへのキャリア発達をスムーズに行うには、メンターに恵まれるか否かが極めて重要であることが、証拠をもって示された。

レビンソンたちの著作の前後には、ジョージ・ヴェイラントのハーバード大学卒業生のライフ・ヒストリーを丹念に追った研究、“*Adaptation to Life*” が出版され、当時誰もが信じていた「成功する人は自力でそれを行う」という神話（self-made man 神話）の持つ虚構性が暴かれたり、ロザベス・カンターの『企業の男と女』（中略）が出版されて、会社の中には栄達・成功を左右し、女性にとって不利に働く因習的な人的ネットワークの（が）あることが明らかにされた（渡辺2003, p.300, 傍点は筆者による）。

このように、人々のキャリアが個人の力によって形成されると一般に信じられてきたアメリカ社会で（すら）、キャリア形成には他者との関わりの影響が強いことが喝破された。一方日本においても、すでに見たように浜口らによって考察された事例や、「メンター」の概念を通して観察された事例、そしてそれ以外の研究において、人々の生涯の中の他者の様々な影響について論じられている。そこで、次章では、本研究の分析に先立ち、これまで個々人の人生の軌跡に影響を及ぼす他者について考察された諸概念について、その概要をみていくことにしよう。

第2章 キャリア形成における重要な他者と ソーシャル・ネットワーク

人々の人生に及ぼす他者の影響については、これまでも様々な言及がなされてきた。私たちがよく耳にする「朱に交われれば赤くなる」ということわざは、人の行為が、関わる人々によって左右されることのたとえである。孔子『韓非子』における「水は方円の器に随う」も同様のことを説いたものである。また、人が何かを成すときの仲間の重要性を思い起こさせることわざに「切磋琢磨」がある。この4文字には、仲間同士が励まし合い、競い合って向上する様子が端的に表現されている。

一方で、社会学、社会心理学、発達心理学、経営組織学、教育学等のアカデミックな領域においても、交友、余暇の過ごし方、家庭生活、仕事、コミュニティでの活動、キャリア発達など、人々の様々な生活の局面に関わる研究において、他者の役割・影響が注目されてきた。以下では、この「他者」について、それぞれの研究領域、あるいは複数の領域にまたがる学際的な研究領域で用いられてきたいくつかの用語について、その概要と本研究での課題をみていく。まずは、「重要な他者」概念の概要からみていくことにしたい。

第1節 重要な他者

教育学、社会心理学、あるいは発達心理学の領域では、乳幼児・児童の発達に影響を及ぼす他者のうち、とりわけ両親・教師・遊び友だちが、その発達に大きな影響をもたらすことから、彼らはしばしば「重要な他者 (significant others)」として論じられている。個人は、他者との相互行為を通じて、社会や属している集団に適合する行為や態度、価値を身につける。これは「社会化」という概念で論じられるプロセスであるが、そのプロセスにおける個人を取り巻く「他者」の中で、最も重要な影響を及ぼす人々が「重要な他者」である (森岡ほか編 1993, p.703)。

「社会化」は、私たち人間にとって、子どものときに限ったプロセスではない。むしろ一生を通して展開していくものである。たとえば代表的な社会化の課題について、精神分析学者のエリクソンは人生を8つの段階 (乳児期、幼児期初期、遊戯期、学童期、青年期、若い成人期、成人期、老年期) に区切り、それぞれの段階 (ステージ) における特徴的な課題を示して見せた (Erikson 1950=1977, 1989)。それは、その段階ごとに個々人にとって社会的に期待された課題であり、その課題を達成することが各段階において適合的な社会化である⁶。

それでは個々の発達段階における社会化にはどのような他者が関係をしているだろうか。社会的な地位が出自によって決まり、居住の移動が少ない伝統的な社会においては、人生の諸段階における社会化に関与する人々が同一人物であることが多いだろう。親と同じ職業に就く子どもは、親が最も身近な職業上の教師であり、地域生活の中での規範的な緒行動については、親や近隣の大人たちが教師である。

一方、職業選択の自由が保証されている現代社会では、親と異なる職業に就く人は多く、伝統

⁶ 厳密に言えば、エリクソンが生きた当時のアメリカ社会において期待された課題である。

第2章 キャリア形成における重要な他者とソーシャル・ネットワーク

社会と比べて居住の移動も多い。それに伴い、職業生活、それ以外の生活全般において、人生の諸段階において関与する他者、教師となるような大人もまた異なっていることが予想される。

このような観点から考えると、それぞれの段階で、様々な重要な他者が個々人の発達に影響を及ぼしていることは容易に想定されるし、そうであれば青年期以降も乳幼児・児童期の研究で見られるような個人の社会化に影響を及ぼす重要な他者の研究の蓄積があつて当然であると思われる。しかし、実際には青年期においては、後でみるような浜口らのキャリア選択における「レファレント・パーソン」の研究（1979）、転機研究の大久保（1989）などの例外を除き、包括的な重要な他者研究は発展していない現状がある。

「重要な他者」研究の発展がみられないのは、前にも触れたように、個々人の成長は自分一人の力で達成していくものという理想との関連が強いことが考えられる。永田（2002）によれば、発達理論において他者の影響が大きく取り上げられない理由には、エリクソン自身は（8段階に区分して説明してみせた）生涯全般にわたる人格の発達において他者との相互的な関わりが果たす役割が大きいことを重視していたものの、エリクソンが提出した「アイデンティティの概念」を実証しようとした後発の研究者たちによって、他者の役割が過小評価されてきたことによるという。そしてその背景には個人主義を標榜するアメリカ社会において、他者からの分離・自律が発達の最優先課題であるとされてきたことがある。このような経緯が、青年期における「重要な他者」研究が、友情関係を除きほとんどみられないということに影響を及ぼしているのだろう。

そこで、本研究では、キャリア研究、ライフコース研究、ソーシャル・ネットワーク研究において発展した概念－「ロールモデル」「レファレント・パーソン」「メンター」「ソーシャル・ネットワーク」「コンボイ」を手がかりにして、若者のキャリア形成における「重要な他者」たちとその関係性をみていくことにする。そのことによって、現代社会で青年期を過ごし、教育から職業生活への移行を目前に控えた女子大学生たちが、どのような他者と関わりながら移行期の社会化課題を解決していこうとしているのか、彼女たちの人生行路に影響を及ぼす重要な他者とはどこで会い、どのような影響をもたらしているのかをみていくことにしよう。

第2節 ロールモデル、レファレント・パーソン、メンター

キャリア形成における重要な他者として最も知られた概念は「ロールモデル」であろう。本節ではこれに加えてキャリア研究における概念である「レファレント・パーソン」と「メンター」をとりあげ、その要点を整理する。そのうえで本研究における課題を述べることにする。

・ロールモデル（役割モデル）

ロールモデルは、私たちの日常生活の中でもしばしば耳にすることがある用語である。アメリカの社会学者ロバート・K・マートンが、1940年代にアメリカ・コロンビア大学で行った医学部の学生の社会化研究の際に用いた概念であり、(Holton 2004)⁷、彼の代表的な書物の一つである『Social Theory and Social Structure（社会理論と社会構造）』では、1949年に刊行された初版の拡大版として出版された1957年版（Merton 1957）において、新たに加えられた準拠集団論（レ

⁷ 研究成果はRobert K. Merton et al. eds. (1957) *The student-physician: introductory studies in the sociology of medical education*, Harvard University Press.としてまとめられている。

ファレンス・グループ)の中で議論をされている。この「ロールモデル」について、『新社会学辞典』でその定義を確認するならば、「人は、父母や医師のような特定の位置にある人物から、自分が同じ位置に就いたときにどのように行動すべきかを学習する。このとき特定の位置にある人物の役割行動は、この人にとって役割モデルである」(「役割モデル」森岡ほか編 1993, p.1434)。

ロールモデルの用語の説明をこのようにしたあとで、執筆者の野々山は、ロールモデルの効力が社会の状況によって異なることを述べている。「社会の安定期には、既存のロールモデルが、ライフサイクル上の課題、すなわち身につけなければならない役割を明確に指し示すことができ、人は予期的社会化⁸を経て各段階の移行を円滑にすすめられるが、社会の変動期には、既存の役割はロールモデルとしての効力にかける(「役割モデル」1993, p.1434、傍点は筆者による)、と。この指摘は、グローバル化、知識・経済社会化、少子高齢化が進む、まさに社会変動期と呼べるこの現代社会を生きる女性のキャリア展望を検討しようとする本研究において、看過できないものであろう。

・レファレント・パーソン (準拠人)

ロールモデルと比較すると「レファレント・パーソン (準拠人)」は一般にはなじみのない用語であろう。第1章でみたように、社会学者の浜口らは、新聞に連載された自伝資料の分析によって、青年期以降の人々のキャリアが、他者の影響に左右されることが少ない自立的なものというよりも(ないわけではないが)、むしろ他者との関わりの中において形成されていることを確認した。浜口らは、これらの他者が当人の履歴を方向づけることから、「レファレント・パーソン (準拠人)」と名付け概念化を試みている。その際、人々の経歴に影響を及ぼす重要な他者たちは、その機能から次の3つに分けられている(浜口編1979, p.31)。

- ①日頃の付き合いの中で絶えず依存し、その人の示唆・配慮斡旋・推挙を全面的に受け入れて自らの進路を定める
- ②生き方や理想に関して当人がその人から感化を受け、その教示を実践・実現しようとして人生を展開する(予言者・スター・反面教師を含む)
- ③上司等、引き立ててくれるスポンサー的役割を担う(物的支援を含む)

浜口らによって整理された人々のキャリア形成に影響を及ぼすこれらの人々のうち、②はロールモデルの概念と重なるところが多い。しかし、浜口らが定義づけをしたレファレント・パーソンには、あのようにはなりたくないという反面教師や、自分の選択をゆだねたり、「お前ならできる」と後押しをしたりする予言者も含まれている。

この予言者について、浜口らは、マートンが「予言の自己成就」と命名したプロセスを想定しており、「予言の自己成就とは、予言者の権威のゆえに、また信頼感のゆえに、さらには予言内容が一笑に付しえない「もしや」の可能性を有するがゆえに、人々がその予言者の予言内容を信じて行動する結果、予言を的中させるというプロセスのことである」(浜口編1979, p.136)と説

⁸ これは、マートンがいうところの「予期的社会化」の機能である。「予期的社会化」とは、「将来参加するであろう社会システムの価値や規範、あるいは将来付与されたり獲得されるであろう地位や役割に関する知識や態度、技能などを学習すること」である。(「予期的社会化」『新社会学辞典』p.1450)

明している。目標達成に向かう人にとって心理的な支援者である。

個々人のキャリアの探索期でもある教育から職業生活への移行期にあつて、これからどのように生きていくかを考え、職業や家庭生活等生き方の選択をする重要な分岐点に立つ女子大学生を分析するうえで、彼女たちが準拠する人々のうち、ロールモデル以外の人々の影響についても、本研究では注意深く見ていくことにしたい。

・メンター

発達心理学を基盤としたキャリア研究においては、成人男性の研究を行ったレビンソン (Levinson et al. 1978=1992) や、会社組織の中における発達支援関係を研究したクラム (Kram 1988=2003) らによって、キャリア発達において、「ヤングアダルトや青年たちが大人の世界や仕事の世界をわたっていく上での術を学ぶのを支援する、より経験を積んだ年長者」(Kram 1988=2003, p.2) であるメンター (mentor) の役割が大きいことが見出されている。

なお、メンターから支援を受ける人は、フランス語由来の「プロテジェ (protégé)」(被保護者) が用いられることもあれば、メンターに対する「メンティー (mentee)」が用いられることもあるが、本研究では、Blackwell社刊のメンタリングのハンドブック (Allen & Eby eds. 2010) でも採用されており、より一般的であると思われるプロテジェを用いることにする。

メンターの概念は、レビンソンら (Levinson et al. 1978=1992) が成人男性の生活経歴を発達心理学の視点から分析した際に注目したのが、学術研究の中での最初とされる。彼らの研究対象となった40代の男性たちの経歴を詳細にみていくと、それぞれのキャリアの転機において大きな影響を与えた年長者の存在、すなわち「メンター」の存在があったというものである⁹。

メンターは、古代ギリシャの文学者ホメロスによる『イリアス』と『オデュッセイア』の登場人物の名「メントール (またはメントル)」に由来する。王オデュッセウスは、トロイの遠征の際に、友であり、高貴な家柄の出である老賢人メントールに息子テレマコスの教育を託した。物語の中で、メントールは王子の良き指導者であり、理解者であり、支援者でもある (久村 1997)。

クラム (Kram 1998=2003) の監訳者渡辺の整理によれば¹⁰、このメントールとテレマコスの師弟関係は、ヨーロッパの文学のモチーフとなってしばしば登場した。そして、17世紀に出版されたフランスの作家フェヌロンの『テレマックスの冒険』以降、「メンター」が人物名から「後見人」「良き指導者」「師」などを意味する普通名詞に変わったのだという。しかし、キャリアにおける「メンター」の役割の大きさを多くの人々に認識させるようになるのは上述したように1978年のレビンソンらの研究書まで待たなければならなかった。レビンソンらは軍人、専門職、企業の管理職らを中年期の男性40人に対してヒアリング調査を実施した。彼らのライフヒストリーの語りから得たデータから明るみになったことの中に、未成熟な若者から中年期へとキャリア発達をスムーズに行うには、「メンターに恵まれるかいながが大変重要である」という知見が含まれていたのである (渡辺 2003, p.209)。

⁹ Levinson et al. (1978) の日本語訳版では、メンターは「良き相談者」という言葉で紹介されている。文庫版が出版された1992年においても (単行本は1980年に刊行)、当時メンターという言葉が一般的な用語ではなかったことがわかる。文庫版で出版され、社会心理学、生涯発達論の基本図書として比較的多くの人々に読まれたものであることから、メンターという用語が用いられていたなら、「メンター」という用語はもっと早く定着していたかもしれない。

¹⁰ クラム (Kram 1988=2003) の「訳者あとがき」より。

そして、この「メンター」の概念をより多くの人々に知らしめたのは、キャシー・クラム (Kram 1988=2003) による『メンタリング』によるところが大きいとされる。クラムは、アメリカのボストンで、会社組織の中でメンターとプロテジェ関係にあった人々 18組にインタビューをし、分析を行った。そこから明らかになったのは、メンタリングの2つの主要な機能、すなわち、組織における昇進につながるような仕事のコツや組織の内部事情を学ぶ「キャリア的機能」と、専門家としてのコンピテンシーやアイデンティティの安定さを高めるような「心理・社会的機能」とに大別される、メンターからプロテジェにもたらさせるキャリア形成支援に関わる影響である。

以下、クラム (Kram 1988=2003, pp.30-49) から2つの機能を確認しておこう。

メンターからプロテジェに提供される「キャリア的機能」の主なものとしては、スポンサーシップ、推薦と可視性、コーチング、保護、やりがいのある仕事の割り当てがある。部下に対する応援、他の人々、特に昇進に影響を持つ人々に対して部下の有能さを知らしめたり引き合わせたりすること、チャンスを与えて将来展望を描きやすくすること、仕事上のコーチをすること、時に失敗をしても守ること、やりがいのある仕事を割り振り、モチベーションをあげることなどである。

「心理・社会的機能」は、プロテジェのコンピテンス（価値・態度を含む能力）や、アイデンティティが確固としたものになったり、専門家としての自負を向上させたりするような精神・心理的なサポートに関わるものである。このサポートにより、プロテジェは、アイデンティティ・社会的に自分が何者であるか、何者であろうとするのかを確立させる助けを得て、ある程度の将来への見通し、確信によって、自分なりのスタイルで生きていく自信を育てていくことができる。メンターのロールモデルとしての機能や、承認し、励まし勇気づけてくれるカウンセラー的な機能、そして仕事を超えて交流をするような友人の機能が、プロテジェがキャリアを作り上げる過程における社会・心理的な成熟へのサポートとなる。

これまでみてきたように、メンターの概念は、浜口らが示したレファレント・パーソンの機能と多くが重なっている。しかし、メンターの概念においては、ロールモデルならびにレファレント・パーソンの概念では明示されていなかった「経験を積んだ年長者・先行者」の役割という観点が明示されているところに特徴があるといえよう。メンターは、経験が浅くキャリア形成途上の人に対して、経験を積んだ年長者・先行者として、直接的に関わり、キャリア形成に関わる重要なものを「与える」存在である。また、メンター研究では、「与える先行者たち」の存在が、その恩恵を受ける経験の浅い人たちにとって人生を左右するほどのインパクトを持っていることを指摘している。

そこで、本研究では、対象となる青年から大人のステージへ移行しようとする女子大生たちが、どのような「与える大人たち」と出会っているのか、また、いないのかを確認することを課題にしたい。

小括：キャリア形成における「重要な他者」たち

ここまで、ロールモデル、レファレント・パーソン、そしてメンターといった若者のキャリア形成に重要な影響をもたらす他者に関する概念の要点をみてきた。図表4は、3つの重要な他者「ロールモデル」「レファレント・パーソン」「メンター」について、それぞれの概念が目する機能と、関与の仕方について整理したものである。

第2章 キャリア形成における重要な他者とソーシャル・ネットワーク

ロールモデルは、目標とする人、憧れの人、参照する人の役割行動が模範となっていることに注目し、ロールモデルと直接的、間接的な関わりがあるかの区別はない。母親がロールモデルとなる場合もあれば、スターと呼ばれる人たちや、歴史上の人物、マンガの登場人物など架空の人物もキャリア形成上の重要なロールモデルになりうる。

個々人のキャリア形成過程で大きな役割を果たした人々に注目したレファレント・パーソン概念には、模範となるような役割行動を示唆する人物だけではなく、反面教師、すなわち、あのようにはしたくない、あのようになりたくない行動を示唆する人物も含まれている。また、「お前ならできる」と予言をする他者も含まれている。配慮斡旋・推挙、機会や経済的支援を含む支援（スポンサーとしての関わり）などを通して個々人のキャリアの展開と関わりがあることに注目しているのは、メンターの機能と重複する点である。関係性は、双方向的な関係がある場合も、そうでない場合もある。

最後にメンターは、時にロールモデルとなり、レファレント・パーソン概念が注目したことと同様な関わり方も、その機能として含んでいるが、クラムの整理でみられるように、心理的な支援として承認することや友情の交換にも注目しているところが、前出の2つの概念とは異なっている。個々人とメンターとの関係性は双方向であり、とりわけ、経験の浅い人物に対して経験が豊富で支援する人物、いわば先行者として与える人物像が想定されていることが特徴的である。

図表5. 重要な他者の機能と関与

重要な他者の種類	機能	どのような関与か
ロールモデル	役割行動の示唆	直接（双方向）／間接（一方向：自己から他者への一方的な参照）
レファレント・パーソン	役割行動の示唆／忌避する役割行動の示唆（反面教師） 配慮斡旋・推挙 スポンサー（機会・経済的支援） 心理的支援（承認・後押し）	直接（双方向）／間接（一方向：自己から他者への一方的な参照）
メンター	役割行動の示唆 配慮斡旋・推挙 スポンサー（機会・経済的支援） 心理的支援（承認・後押し・交友）	直接（双方向）。特に、他者の「与える先行者」としての関わり

これらの概念が析出した、キャリア形成における重要な他者との関わりに関する分析視点をもとに、本研究では、女子大学生が職業ならびに生き方の選択をする際に、どのような点で他者の影響を受け入れているのかを検討する。そしてその人たちとはどこで出会っているのかをみていくことにする。その際に、生き方や理想に関して模範とする人の教示・役割行動を実践・実現しようとするような「ロールモデル（役割モデル）」に留まらず、「レファレント・パーソン」の概念で示された「反面教師」としての参照があることにも注意を払わなければならないことは先に述べたとおりである。さらに、「メンター」概念が浮き彫りにした、自らが「経験を積んだ年長者・先行者」として女子学生たちに関わり、キャリア形成に関わる重要なものを「与える」人々との出会いについて注目することにしたい。

第3節 ソーシャル・ネットワークとコンボイ

若者のキャリア形成における他者の影響に注目する本研究では、キャリア形成に重要な影響を及ぼした人たちと並んで、女子大学生たちが取り結ぶ他者たちとの関係の特徴（ネットワーク構造の特徴）について検討を試みる。そのために、職業キャリア研究において研究の蓄積がある、ネットワーク理論を参照する。さらに、ライフコース研究における「コンボイ」の概念に注目し、個々人の人生において中・長期にわたり個人とつながる人々についても注目をする。さらに収集したデータを図示して検討する際に、「コンボイ」の概念を説明する際に提示された、個人を取り巻く他者の布置図（マッピング）を参照する。

本節では、まず、キャリア形成に関するソーシャル・ネットワーク論について、その分析視点を先行研究とともに概観する。あわせて「コンボイ」の概念について、見ておくことにしたい。

・ソーシャル・ネットワーク

職業キャリア形成に、ソーシャル・ネットワーク（社会的ネットワーク）が重要な要因であることに注意を喚起したのはグラノヴェターの転職研究である。グラノヴェターは交換理論研究から導き出した「弱い紐帯」仮説についてホワイトカラーの男性の転職行動を分析し（Granovetter 1973=2006）、仕事に就くにはコネ（強い紐帯）が効くという“常識”を覆し、良質な就職情報をもたらすには弱い紐帯（きずな）が有効であることを立証したのである（Granovetter 1974=1996）。

ソーシャル・ネットワークとは、浦（1992）の定義に従えば、「ある範囲の中にいる複数の人びとの」関係が全体としてどのような特徴をもっているかを示すもの」（p.24）である。職を得る際だけではなく職業に就いてからもまた、前節で見たメンターのような存在の有無など、すなわち新人のソーシャル・ネットワークのありようが職業キャリア形成に影響を及ぼしている。ソーシャル・ネットワークという観点から人々のキャリアについて検討した先行研究の数々は、Ibarra & Deshpande（2007）が整理して見せたように、メンターのような直接的なものから、弱い紐帯のような間接的なもの、また、就職情報のような手段的なものであったり、ロールモデルのような心理的（表出的）な影響を通して人々のキャリアに影響を及ぼしていることを明らかにしてきた。

また、人々の結びつきと心身の健康の関係に注目したソーシャル・サポート研究においては、ストレスの多い現代社会において、生活上の課題・困難な状況に対する対処や影響の度合いに、他者との結びつきが関連していることが研究されてきた（浦 1992）。

これらの実証研究の数々が明らかにしてきたことは、個々人を取り巻くネットワーク（ソーシャル・ネットワーク）によって、人々のキャリア形成のあり方に大きな相違が生じることを示唆している。

・コンボイ（convoys 道づれ）

これまで個人のキャリアは個人がとりもつ社会関係との関連が深いことをみてきたが、個々人の取り巻く他者との関わりは、地理的移動や社会的移動、またニーズによっても変化することがライフコースの視点を取り入れた研究によって示されている（野尻1977、Ibarra & Deshpande 2007など）。その一方で、「コンボイ」の概念は、個々人を中・長期間にわたって支える他者（た

第2章 キャリア形成における重要な他者とソーシャル・ネットワーク

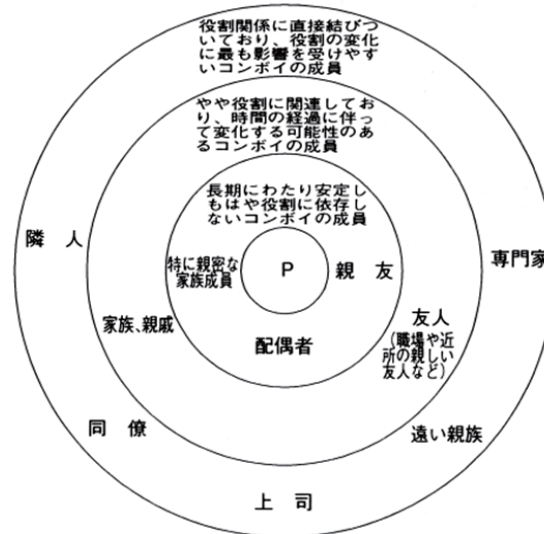
ち)に注目をした概念である。以下では、コンボイの概念と、個人を取り巻く他者の布置図（マッピング）を見ておくことにする。

「コンボイ (convoys 道づれ)」は、ライフコース研究において、人生の中・長期にわたり個人とつながる関係にある人びとについて、護送集団 (コンボイ) をイメージして概念化されたものである (安藤 2003)。

図表5に示されているように、コンボイは個人 (P) を取り巻く家族や友人、親族、同僚、上司、隣人、専門家など様々な人々の層としてイメージすることができる。人はこの層にいる人々たちから、あるときは援助を受け承認を受けたりしながら、ある時は逆に援助を与えたり、というように、サポートの交換を展開している。コンボイはこのようなサポートの交換を通して展開されるソーシャル・ネットワークと言い換えが可能である。ただし、先述したように、ネットワークモデルに、時間的な要因が加味されている概念である (大熊 2001, p.193)。

とりわけプラース (Plath 1980=1985) は、コンボイの中でも、個人 (P) を取り巻く第一の層に属する身近な他者「ある人の人生のある段階を通じてずっとその人とともに旅をしていく親密な人びとの独特な集団」(p.24) の役割に注目をしている。日本語版の訳者たちはコンボイに「道づれ」という語をあてているが、プラースは、人々の人生の道づれの中でも最も身近な人々は、個人に対して「人生の確認のフィードバック」(p.329) を与える役割を担い、個人のキャリアを承認し、個人のアイデンティティの継続性、ならびに選択した結果としてのキャリアの承認を通して精神の安定に寄与していると主張している。

図表6. 「コンボイ」の概念図



出所：カーン・アントヌッチ (1980=1993, p.58)

「コンボイ」の観点からみた本研究での問いは、以下の点にまとめることができよう。高校生までと比べて社交圏が大きく広がると考えられる大学生の社会関係は、どのような布置を示しているのか、とりわけ、個人を取り巻く身近な他者、すなわちコンボイの概念図の第一、第二の層にはどのような人々が布置しているのかというのが1つ目の問いである。また、カーンとアントヌッチの概念図にも見られるように、先行研究によって第一の層の典型として示されていたのは家族成員であったが、現代日本の女子大生にとって家族成員はどのような存在となっているのだろうか。これがコンボイの視点から問われる2つ目の課題である。

第4節 日本における若者のキャリア形成とソーシャル・ネットワークに関する研究

これまで人々の人生に及ぼす他者に関する分析概念をみてきたが、本節では若者の職業キャリア形成を社会関係の視点から分析した日本の研究をみておこう。近年、日本でも雇用状況と若者が有する社会関係（ソーシャル・ネットワーク、またはパーソナル・ネットワーク）との関連について注目した研究が、いくつか行われており、重要な指摘がされている。

無業の若者を対象にした堀（2004）では、無業の若者には家族以外の人とのつきあいがほとんどみられない社会関係の孤立型か、地元の同年齢で構成されている限定型が多いことが見出されており、家族以外の年齢の異なる人との存在が職業移行への支援となりうること、すなわち多様な社会関係が安定雇用に有利であることが示唆されている。

また、大学生の調査では、相談経路（チャンネル）が多いほど、すなわち、親などの保護者、友人、恋人、教職員等様々な人の支援を利用している人ほど就職内定率が高まっていることが見出されている（堀2007）。

また、就業状況とネットワークの特性の関連に注目した石黒（2006）では、世代多様性が正規雇用状況との関連が高い傾向にあること、すなわち、世代の異なる知人の存在を含んでいるという対人関係の特性が、若者の就業に寄与していることを実証的に示したものとなっている。

乾（2010）の高校卒業生の追跡調査からは、家族・地域・学校縁の多様なネットワークを蓄積・駆使し移行過程を歩んでいる事例が報告されている。またその一方で、不安定就労が長期化することによって家族からの承認を得ることができなくなり、家族とは疎遠になった女性たちが、友人ネットワークに精神的に支えられている事例も提示されている。

さらに、内田（2005）の被差別地区出身の若者調査では、地元型の強い絆（ムラネットワーク）が、心理的サポートの資源や就職の世話の資源となっていることを明らかにしている。ただし、ムラネットワークによって得られる仕事はアルバイト等の質の低いもので、不安定な状況に留まらざるをえないというジレンマをかかえていることを析出している。

また、新谷（2007）のストリートダンスをしている若者の調査では、彼らの社会関係の特徴が幼なじみ、先輩・後輩という地縁の閉じた社会関係にあり、彼らが職業達成よりもこの関係の維持を優先するために、情緒安定の表出性の観点からみると、精神的な安定をもたらしている反面で、職業キャリアの観点からすると、無業・フリーターという不利な選択をしてしまうことを見出している。

これらの先行研究が示唆しているのは、若者が仕事に就くこと、いいかえれば、初期キャリアを形成する上で、多様な他者との関係性が有用であることである。また、その一方で、不安定な移行期の精神的な支えとして強いつながりを持つ友人たちの存在もまた大きいことである。

初期職業キャリア形成期は、学校から社会への移行という人生の中でも大きく社交圏の変容が見込まれる時期であるが、その時期を目前に控えた女子大生たちが自らの社会関係をどのように（積極的であれ、そうでないにせよ）選択して取り結んでいるのか、そしてそれが職業探索・就職活動という点でどのような影響をもたらしているのだろうか。これが、日本における若者のキャリア形成とソーシャル・ネットワーク研究を踏まえた本研究でのもう一つの課題である。

第5節 現代の若者の「社交」状況と、本研究における課題

本章では、キャリア形成研究において、個々人のもつ他者との関わり、すなわち社会関係に注目することの有効性を確認した。先行研究が明らかにしてきたことは、他者との関わりは、社会的資源として個々人のキャリア形成に影響を及ぼすということである。したがって、本研究ではこれらの知見を手がかりに、他者との関わりと関わり方の特性に注目しながら、大学から仕事への移行という大きな出来事に直面している現代日本の女子学生の生活世界の分析を試みる。

ところで、職業探索期に至るまでの青少年期の社交はどのような特徴をもっているのだろうか。女子大学生のキャリア形成における他者との関係の分析に進む前に、現代の若者の社交について瞥見しておくことにしよう。

現代の若者の「社交」の特徴

若者をとりまく人間関係を考察した近年の調査・研究からは、友人関係の展開が活発化するとみなされている青年期においても、「親」の存在が際立っている。主要な相談相手として、親が選択されているのである。高校生を対象とした調査においては、「重要なことを話し合った人」として1人目にあがった人物が男子で「同高校の友人」23.6%につづき、母が2位（18.9%）、父が3位（17.3%）、女子では「同高校の友人」33.8%につづき母が30.9%で2位になっている（工藤 2001）。高校生の進路の相談相手に関する調査では、最も多く選ばれているのは男女ともに母親である（片瀬 2008）。

大学生の年齢層を含む18-21歳からの青年を対象とした2000年の内閣府の調査では、悩みの相談相手として男子は「学校の友だち」（46.7%）につづいて「母」（34.9%）があげられ、女子においては「学校の友だち」（41.3%）よりも「母」（56.7%）への相談が多くなっている。22-24歳の年齢層では、男子は「母」（40.1%）、「学校時代の友だち」（31.1%）、「父」（27.8%）に対して、女子では「母」（60.4%）、「学校時代の友だち」（45.8%）、「きょうだい」（24.9%）の順であげられている（内閣府 2001）。

父親よりも母親が重要な相談相手とみなされているのは大学生を対象とした調査からも明らかになっている。日常的なコミュニケーションに関する質問においては、母親とよく話す学生（男女）は64.5%に対し、父親が27.1%という結果を示している（片桐 2009）。

ところで、母親が重要な話し相手とみなされているのは日本に限ったことではない。日本、韓国、アメリカ、スウェーデン、ドイツの18-24歳を対象とした国際調査によると、日本、韓国で「悩みや心配ごとの相談相手」として「近所や学校の友人」につづき（日本：59.5%、韓国：65.1%）、母があげられている（日本：43.6%、韓国：65.1%）。アメリカ、スウェーデン、ドイツにいたっては最上位に母親があげられており（アメリカ：57.9%、スウェーデン：60.3%、ドイツ：63.4%）、日本に限らず若者にとって親、とりわけ母親が重要な相談相手としてみなされていることが明らかになっている（内閣府 2004）。

本研究における注目点

これらの先行研究から示唆されることは、本研究で対象とする女子大生たちが、社会関係において親、とりわけ母親が重要な位置を示していると予想されることである。

子ども期における社会化に関わる重要な他者は複数の人々の存在が想定されるが、現代の日本

社会では子ども期の社会化を母親が独占的に担っているという指摘がある。子どもにとって主要な社会化の機関（agent socialization）は家族であり、そこには多くの場合、父親が含まれ、伝統的な家族においては祖父母やその他の親族も含まれる。しかし、核家族化によって、親族との日常的な生活上の連携が薄まるなかで、家族の中での性別分業の一般化という状況（母親が専業主婦、父親は長時間にわたる職場への拘束）、さらには地域コミュニティとの関わりの希薄化によって、子どもの社会化に関わる母親の役割が大きなものになっているというのである（渡辺2000, p.54）。したがって子ども期に限らず、青年期という時期を過ごしている女子大生にとっても、母親の存在が大きな位置を示していることが予想される。

また、山田（2007）は「リスク社会」とも称されるような、学校に行くことが職を得ることを保証したり、入社すれば生涯安定した収入が見込まれたり、誰でも結婚でき、さらに結婚が永遠のものと思われていたことなどが覆された現代社会で、身近な人への関係性の固執が高まっていることを指摘している。山田の指摘が正しければ、キャリア形成期における人と人とのつながりの様子を見ていく本研究においても、身近な人との関係性が強いことが見いだされると予想される。少子高齢、グローバル化などを特徴とする大きな社会変動・不安定期にある現代社会は、個人にとって人生の確認のフィードバックをする身近な人への期待が、当該の双方の人々にとって高まっている－例えば、子が母に対してフィードバックを求めるだけでなく、母も子どもに対してフィードバックを求めるような－ことが想定されるからである。

「友達親子」（山田 1997）、「仲良し母娘」（中西2008）とも称される母子の緊密なつながりは、教育から職業への移行段階にある青年たちにとって不都合なことはないのだろうか。アイデンティティの形成に重要な要因となる職業選択にとって友達のように仲良し親子であるがゆえに困ったことはないのだろうか。この点も考慮しつつ分析を進めることにしよう。

まとめ：本研究の課題

本研究では、いわゆる「普通」の大学生を対象にし、大学進学率が上昇し、経済不況が長引き、大学から職業生活への移行が容易ではないという状況のなかで、女子学生たちが職業探索の過程でどのような人々と出会い、その人との出会いによってキャリア形成にどのような影響もたらされたのか、またそのような人々との出会いの場はどこなのかを、インタビューをもとにして研究を行う。

キャリアへの他者からの影響については、先行研究で取り上げられたロールモデル、レファレント・パーソン、メンター、そしてコンボイの概念を手がかりに分析を進めていく。その作業をすることによって、女子大学生が職業ならびに生き方の選択をする際に、他者（重要な他者）からどのような影響を受けているのかを検討する。そしてその重要な他者とはどこで出会っているのかをみる。さらに、ソーシャル・ネットワークの視点から個人の取り持つ社会関係の構造を記述し、その構造と重要な他者との出会いやすさは関連があるかについても検討を行うことにしたい。

第3章 調査方法・データの概要と調査結果

第1節 調査方法・データの概要

教育から職業生活という移行期のなかでどのように将来展望を形成し、自らの職業・生活キャリアを形作ろうとしているのか、その際、大学生たちを取り巻く他者はどのような影響をもたらしているのかを探索することを目的とした本研究では、インタビューという定性的手法を用いた。調査は、2011年1月～4月（第1回）と、2011年11月～12月（第2回）の2回に分けて実施した。

対象者は、入学選抜難易度が偏らないように考慮された関西地区のA市内の5大学¹¹において、人文・社会学系の学部に在籍している4年生の女子学生である（図表7）。なお、図表内の専攻の欄では、人文・社会科学系の中でも専門性の高い社会福祉専攻に関しては、「社会福祉」と記載している。また、ID番号は便宜的に割り当てたものである（具体的にはインタビューを実施した順番である）。

第1回目の調査では2011年3月の大学卒業生が対象であり、第2回目の調査では2012年3月の卒業生が対象となっている。したがって、本調査の対象者には2年度にわたる卒業生が含まれていることになる。

対象者の選抜に際し、各大学の教員および兼任講師の方に調査への協力を依頼し、直接対象者への協力を仰いでいただいた。また、対象者のうち1名は対象校の元大学教員で、若者を対象とした自立支援施設を運営しているB氏および職員の方から紹介してもらったもので、2名についてはインタビュー協力者に友人を紹介（スノー・サンプリング）してもらったものである。このような選抜を経て第1回、第2回の調査で各16名、合計32名のデータを収集した。対象者数の大学ごとの内訳はK大学3名¹²、L大学7名、P大学6名、Q大学8名、Z大学8名である。

図表6に示したように、インタビュー時に就職先が決まっていた（見習い含む）人は32名中26名である。一覧表の進路の欄には、就職先について、日本標準産業分類に基づいて分類した上で示している（図表では進路の欄を網掛けで示している）。残りの6名のうち1名は専門学校への進学が決まっており、そのほかに、専門技術業志望でアルバイトをしている人1名、進学を検討しながらアルバイトをしている人2名、未定2名が含まれている¹³。

年齢は他大学から学士編入をした1名が24歳であったのを除き22-23歳であり、また、社会人経験者は含まれていない（受験浪人経験者を含む）。

¹¹ 5大学には、偏差値60前後の国公立校（Z大）、私立校（Q大）、50前後の私立校（P大）、40前後の私立校（K大・L大）が含まれている。

¹² 第2回調査では、第1回目の調査に協力いただいた方が異動されていたK大学は含まれていない。

¹³ 進路未定者のうち1名は翌4月に故郷へ戻り、就職が決まったことを連絡してくださっている。

図表7. インタビュー対象者一覧

ID	本文中 仮名	専攻	進路
1	井上さん	人文・社会科学	複合サービス事業(一般)
2	石戸さん	人文・社会科学	情報通信業(一般)
3	遠野さん	人文・社会科学	飲食店・宿泊業(見習い)
4	館野さん	人文・社会科学	アルバイト(専門技術業志望)
5	久保田さん	人文・社会科学	未定(当時)
8	細江さん	人文・社会科学	製造業(一般)
9	望月さん	人文・社会科学	公務
10	荒川さん	人文・社会科学	製造業(営業)
11	雨宮さん	人文・社会科学	飲食店・宿泊業(一般)
14	本田さん	人文・社会科学	卸売り・小売業(一般・販売)
15	橋口さん	人文・社会科学	教育・学習支援業(専門)
17	西村さん	人文・社会科学	公務
18	加藤さん	人文・社会科学	卸売り・小売業(一般)
19	湊さん	人文・社会科学	卸売り・小売業(一般・販売)
21	清瀬さん	人文・社会科学	情報通信業(専門)
22	寺山さん	人文・社会科学	アルバイト・進学準備
23	田辺さん	人文・社会科学	情報通信業(専門)
24	橋本さん	人文・社会科学	未定(アルバイト)
26	藤原さん	人文・社会科学	アルバイト・インターンシップ/進学準備
27	野口さん	人文・社会科学	飲食店・宿泊業(一般)
29	松井さん	人文・社会科学	医療・福祉(一般)
30	岡田さん	人文・社会科学	進学
31	中村さん	人文・社会科学	医療・福祉(一般)
12	下村さん	社会福祉・社会科学	教育・学習支援業(専門)
6	土田さん	社会福祉	医療・福祉(専門)
7	田村さん	社会福祉	医療・福祉(専門)
13	秋永さん	社会福祉	医療・福祉(専門)
16	鈴木さん	社会福祉	医療・福祉(専門)
20	大谷さん	社会福祉	公務(専門 福祉)
25	香川さん	社会福祉	医療・福祉(専門)
28	住田さん	社会福祉	製造業(一般)
32	美崎さん	社会福祉	公務(専門 福祉)

インタビューでは1対1の半構造化面接法を採用した。半構造化面接法とは事前に大まかな質問事項を決めておいて、話の流れの中で詳細に答えてもらうという手法である。

今回の調査では、高校の最終学年の頃に遡ってもらい大学および学部・専攻の志望動機を尋ねることから始め、その後、話の流れの中で、キャリア展望、就職活動、相談相手(原則5名まで)と影響を受けた人物に関する質問項目を盛り込んで話を聞かせていただいた(図表8)。

相談相手については自由に回答をする「想起法」を用い、就職活動の時期を振り返ってもらい当時相談をした人について5名あげてもらうように依頼をした¹⁴。

1人当たりのインタビュー時間は、概ね1時間ほどである。しかし、1時間半から2時間半に及ぶものもあった。インタビューでは公表にあたり名前や学校名等を伏せ、人物が特定されないことがないように注意することを約束し、テープ録音の承諾を得た。

¹⁴ パーソナル・ネットワークの調査に関しては、平松闊ほか著(2010)『社会的ネットワークのリサーチ・メソッド』ミネルヴァ書房、を参照されたい。

図表8. インタビュー調査の概要

- ・基本事項（専攻、年齢（生年月）、家族構成、家族成員の年齢など）
- ・大学ならびに専攻を決定するまで
- ・大学生活
- ・職業探索行動について
 - 職業について考え始めた時期
 - 就職活動等の行動
- ・相談相手
 - 就職活動中に相談した人について（原則5名）
 - 相談内容
- ・将来展望
 - 5年後と10年後について
- ・現在の自分に対する評価とその理由

第2節 調査結果：職業探索期に関わった人々

2.1 課題の確認

現在では、かつてない割合の若者が、高校卒業後すぐに社会に出ることをせずに、大学に進学するようになってきている。女性の場合はその変化が特に顕著であり、1980年から2010年代の30年間の間に12.3%から45.2%に、3.7倍もの人が大学に進学するようになったのはすでにみたとおりである。

少子高齢社会、知識経済社会と呼ばれ、かつグローバル化の進行に伴う産業構造の大きな変化の渦中にあり、それに適した制度への作り変えを早急の課題として抱える現代の日本社会において、高学歴女性の動向は非常に関心がもたれるところである。

また、産業構造の変化に加えて経済不況を背景にした企業の雇用制度および採用方針の変更や、就学期間の長期化と教育制度のありかたに関連した学習と「働く」こととの乖離は、若者の「教育から職業への移行」の問題（困難）を私たちにつきつけている。

そして本研究の対象者たちは、1987年から1990年の間に誕生し、物心がついたときにはバブル経済が崩壊し、子どもの頃から経済不況とそれに伴う若者のフリーター、ニート問題、就職困難という話題がメディアをにぎわす状況の中で育ってきた人たちである。また、彼女たちが大学生生活を過ごした4年間を見てみると、2008年のリーマンショックを契機とした世界的な経済不況そして、長らく続いた景気停滞という状況の中で、大学新卒者の就職率は厳しいものであった。すでに図表3でみたように大卒者の就職内定率は低迷し、卒業を直前に控えた女子の就職内定率（2月1日の状況）は、2008年88.2%から、2009年86.2%、2010年79.9%、2011年75.7%と年々悪化していた。

本研究では、このように経済不況という厳しい状況の中で、女子学生たちがどのように教育の世界から職業生活への移行を経験しているのか、大学での専攻と職業が直接的に関連しない中で、どのように将来展望・キャリア展望を描き、具体的な就職活動を行っているのかをみていくことが目的である。

分析に先立ち、まず、キャリア形成における他者の役割を確認した。職業生活に入る前の段階の職業探索過程で、人々との出会いが個々のキャリアに影響を与えていることはこれまでも度々示唆されていた。とりわけ、会社という組織の中において研究の蓄積がある「メンター」の分析によって、先輩・上司といった「経験者・先行者」との出会いが経験の浅い個人のキャリア形成に大きな影響を及ぼすことをみてきた。その一方で、この一見「自明」の、他者との出会い、他者との出会いの場、他者の出会いによる影響、という点は前述した浜口らの研究や転職研究の大久保の研究以降、大きな発展がみられない現状にある。また、近年の若者研究は、生きづらさを抱えた若者に焦点をあてたものが少なくない。

そこで、本研究では、フリーターやNEETといった人々に注目するのではなく、いわゆる「普通」の大学生を対象にし、女子学生たちが職業探索の過程でどのような人々と出会い、その人との出会いによってキャリア形成にどのような影響がもたらされたのか、またそのような人々との出会いの場はどこなのかを、インタビューをもとにして研究を行う。

その一方で、家族などの身近な人々とのかかわりがどのようにキャリアに影響を及ぼしているかについても、併せて検討していくことにする。

2.2 どのような人たちが相談者として選択されているか

本項では、就職活動期を中心にして、対象者が職業探索をする時期に関わり、そのキャリアに影響を及ぼした人々について、相談相手に関する質問と生活全般の語りの中からみていくことにする。

まずは、就職活動期間をふりかえてみて、どのような人たちが相談者として選択されているか、そして、選択された人たちが調査協力者たちの社会的関係の中でどのような存在として位置付けられているかを確認しておこう。

相談相手

インタビューの対象者たちが、就職活動中（キャリア探索期間中）に相談をした人としてあげた5名に含まれていた人たちとは、以下の人たちである。

小学から中学、高校、大学時代を含む、学校関係の同級生や部活等の同年代の友人、高校時代を含む部活やサークル活動の先輩、親、きょうだい、おじ、いとこなどの親族、恋人、大学教員、大学の就職課・キャリアセンターの職員、提携校に配属されたハローワークの専門スタッフ、大学外のジョブカフェ・スタッフ、私的な就職塾の就職活動アドバイザーなどのキャリア・アドバイザー、アルバイトやボランティアでの先輩や上司、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の年長者の仲間たち、友人の紹介で知り合った年長者の知人である（図表9）。小・中・高校からの友人、大学の先輩にはすでに職業に就いている人も含まれる。また、大学教員の中には、すでに大学教員の仕事を離れた人も含まれている。

その中で最も多かったのは大学の友人で、32名中26名の人が挙げていた。大学の友人は主に1年生の時のクラスやゼミの仲間、部活動・サークルの仲間と同学年である。中には、複数の大学の共同組織であるサークルで知り合った他の大学で同学年の友人も含まれる。次いで、母親が22名である。その次に多いのが、小学校・中学校・高校のときからの友人が16名である。そして、恋人10名、大学教員9名、父7名、大学のキャリア・スタッフ6名、学校関係の先輩（大学、高校含む）、アルバイト先の先輩・上司、兄が各5名と続いている。

なお、これらの相談者たちは、就職活動の時期を振り返ってもらい当時相談をした人について

第3章 調査方法・データの概要と調査結果

5名あげてもらおうように依頼をした際の回答であり、インタビューの会話の中では、そのほかに、おば、祖母、祖父、小規模の講演会で出会った講師があった。また、同様に、相談者が選択した5名には含まれていなくても母や父、兄、教員、友人、アルバイト先の上司等が、相談相手として語られている場合もあった。

その一方で、「家族」や「両親」というくくりの中で父親・母親の双方をあげているものの、詳細に話を聞いた際には、どちらかの親についてのみ相談相手としてのやり取りが詳細に語られるという場合もあった。

図表9. 相談者たち

相談者	左記の相談者をあげた人の数(32名中)
大学の友人	26
母	22
小・中・高校からの友人	16
恋人	10
大学の教員	9
父	7
学内の就職課・キャリアセンタースタッフ	6
兄	5
高校・大学の部活・サークル等の先輩	5
アルバイトの上司・先輩	5
姉妹	4(内1名が妹)
学外のキャリア関連スタッフ	2
ボランティアで出会った知人(年長者)	2
おじ	1
従姉妹	1
インターンシップの上司・先輩	1
趣味の友人(年長者)	1
SNSの仲間たち(年長者)	1
その他年長の知人	1

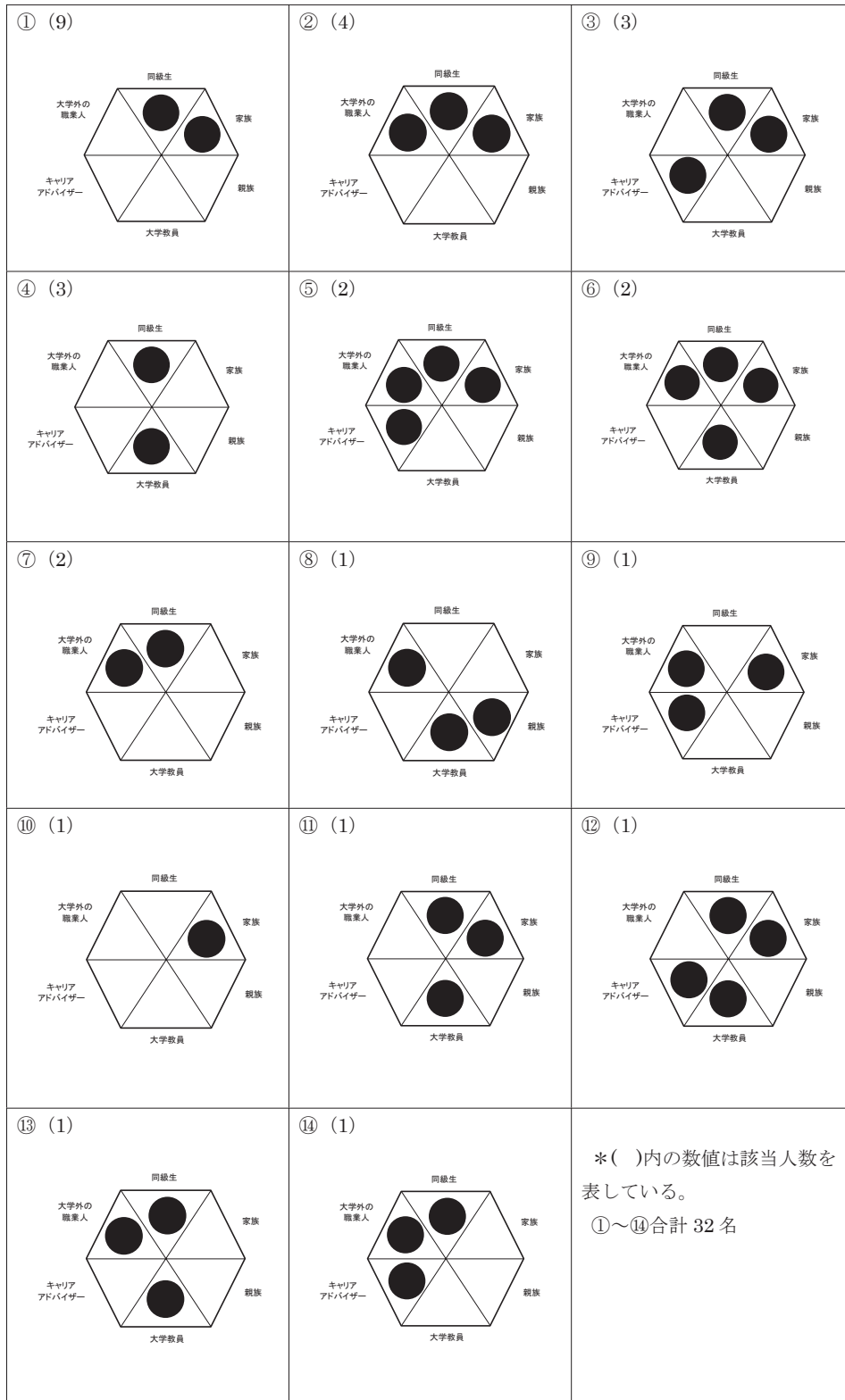
相談相手の組み合わせパターン：家族と学校関係に特化した相談ネットワーク

では、どのような人たちが、職業探索期の女子学生たち個々人の最も身近な相談者として存在していたのか。相談相手として挙げられた人たちのうち、現在またはかつての学校関係の同級生・部活等の同年代の友人を「同級生」、親・きょうだいを「家族」、おば・おじ・従姉妹を「親族」、アルバイトやインターンシップやボランティア関係の同僚・上司等を「大学外の職業人」、大学内外のキャリア関連のアドバイザーやスタッフを「キャリアアドバイザー」としてそれぞれ1つのカテゴリーにまとめ、それに「大学教員」を加えた6つのカテゴリーに分類して、相談相手として挙げられた人々を整理してみたものである。その際、恋人は同年代で学生の場合は「同級生」カテゴリーに、職業人の場合は「大学外の職業人」のカテゴリーに分類した。恋人を職業人として分類した対象者は2名である。なお、恋人がフリーターの人がいたが、話の中で、同年代で、なおかつ対象者と同様に職業探索中と判断されたので「同級生」に分類している。さらに、友達や先輩のうち、すでに職業に就いている人については「大学外の職業人」として再分類を行った。友達・先輩を職業人として分類した対象者は3名である。その一方で、部活動等の先輩であっても学生の場合は「同級生」に分類をしている。

以上のカテゴリーで分類したものを整理し、組み合わせの多いものから少ないものへと並べて示したものが図表10である。相談者の組み合わせとして最も多かったのは、「同級生」と「家族」の組み合わせで、32名中9名がこの組み合わせの相談ネットワークを有していた。それに次

ぐのが「同級生」「家族」「大学外の職業人」の組み合わせが4名である。そして、「同級生」「家族」「キャリアアドバイザー」と、「同級生」「大学教員」の組み合わせが各3名、「同級生」「家族」「キャリアアドバイザー」「大学外の職業人」と、「同級生」「家族」「大学教員」「大学外の職業人」、そして「同級生」と「大学外の職業人」の組み合わせが各2名である。

図表10. 相談ネットワークのパターン



第3章 調査方法・データの概要と調査結果

これらからみえてくるのは、先行研究から予想されたように同年代の友達と家族中心の相談ネットワークである。とりわけ、相談相手としての友人は、自分と同様に大学生が選択されている傾向がみられた。

そして、次いで多いパターンが、「大学教員」や教育機関に属する「キャリアアドバイザー」といった教育制度に関わる人々が含まれたネットワークである。なかでも、9名の対象者の相談ネットワークの中に大学教員が1名以上含まれており、対象者の女子学生たちにとって大学教員が個人的な相談ができる存在となっていた¹⁵。

その一方で、大学外の職業人を含んでいる人たちは32名中14名である。内訳は、アルバイト先での上司・先輩が4名、ボランティア先の知人をあげた人が2名、幼なじみや高校・大学の先輩をあげた人が3名、恋人が2名、趣味の活動で出会った知人、ネットの仲間が1名、その他1名である。アルバイト先が相談相手になるような、キャンパスの外での職業についての人との出会いの場となっている。

教員については、第5章にて、大学外の大人たちについては第6章にて、それぞれ検討することにして、ひとまず、選択された相談相手のうち、相談相手として最も多く取り上げられていた母親を筆頭に家族との関係について次章でみていくことにしよう。

¹⁵ 2007年から2010年にかけて筆者が行ったイタリアの女子大学生・大学院生の調査では対象者の24名中、大学教員を相談相手としてあげたのは2名に留まった。またその2名についてもアルバイトとして教員の秘書業務をしている人と、指導教員をあげた大学院生である。教員をあげていない人たちに教員が相談相手になっていないことを聞いたところ、教員との心理的距離感はかなりあるという声が多く聞かれた。イタリアと日本では、学生と教員の関係性、社会規範が異なると思われる。

第4章 女子大生と家族

：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

第1節 なんといても「母親」

女子大生たちが相談相手として最も多く選択しているのは家族である。家族のなかでも、親が重要な相談相手として選択されており、とりわけ母親が最も身近な存在として認識されていた。32名中22名、約7割が、職業探索期の重要な相談相手として母親を選択していた。

また、親と同居の17名中11名が身近な相談相手として母親をあげているだけでなく、親元を離れている15名のうち11名もが母親をあげていた（図表11）。一緒に住んでいるかどうかにかかわらず、母親が身近な相談相手とみなされているのである。

図表11. 相談ネットワークに母が含まれるかについて

	同居	別居	計
母を含む	11	11	22
母を含まない	6	4	10
計	17	15	32

母親の就業状況については、継続的なフルタイム就業者が6名で、公務員が4名、家業従事が2名含まれる。そのうち1名は早期退職をしたばかりである。また、専門家として自宅あるいは自宅外で活動をしている自由業が2名、無業（専業主婦）の経験の後、パートタイム等が17名（家業の手伝い1名、派遣社員等で仕事をしている人5名を含む）、無業が4名、無業（専業主婦）後パートタイム等かどうか不明が3名である。

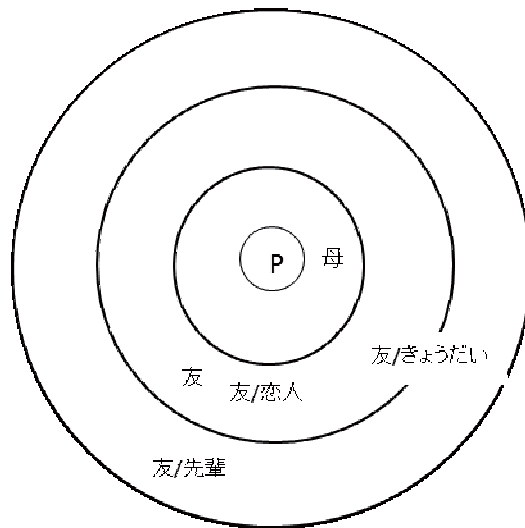
一方、父を身近な相談相手であると回答したのは、離死別の2名を除く30名中7名にとどまっている。父をあげている7名は、相談相手として母もあげている。また、父をあげた7名中6名は親元を離れている人たちであった（図表12）。なお、この中には、相談相手として父をあげたものの他の家族と共に列挙している人も含まれる（したがって特にエピソードは語られていない）。

図表12. 相談ネットワークに父が含まれるかについて

	同居	別居	計
父を含む	1	6	7
父を含まない	15	10	23
計	15	15	30

以上、見たように、概ね5人までの相談相手として選択してもらった人の中に、母親が数多くあげられていた。第2章でみたコンボイの概念図にならって調査対象者の社会関係（ただし、身近な5名に限定）を図で表したのが図表13である。約1/3が図表11のような社会関係で職業探索期を過ごしていたことになる。

図表13. 女子大生の典型的な社会関係（コンボイ）モデル



では、職業探索期において重要な人物であると位置づけられていた母親たちは、女子大生たちにとって実際にどのような「他者」として存在しているのだろうか。

次節では、学校から社会への生活圏の移行を目にした女子大生たちに語られた母親たちについて、インタビューの語りをもとに詳細にみていくことにしよう。

第2節 母親の役割

語りのなかのエピソードや感想を整理すると、女子学生たちにとって母親は、経済的支援者としての役割以外に、次の4点の役割を担ったり期待されたりしていた。

- ①日常生活の情緒的・精神的支援者
- ②特別な時・危機的状況の際の情緒的・精神的支援者
- ③キャリアアドバイザー
- ④ロールモデル、ライフコースのモデル

相談相手として特定してもらったときだけではなく、大学生活や就職活動生活を振り返って話をしたくれたときにも、母親はしばしば登場していた。以下では、上に示した、母親4つの役割について、女子学生たちの語りを交えて詳細にみていくことにする。なお、事例を示す際の名前は全て仮名にしてある。

①日常生活の情緒的・精神的支援者

母親とは仲が良く、母親が日常的な相談相手になっており、思い通りにならないときに愚痴を吐露する相手にもなっている様子を土田さん、荒川さんは次のように語っている（会話の中の[]は、筆者の質問である。また語尾等については若干加工したものもある。以下同様）。

・【お母さんに相談するときは？】

普通に今日こんなことがあって、じゃないですけど、こういう嫌なことがあったとか、こういうことがあったとか。

【お母さんとはいつごろからそんなふうによく話をするようになりましたか？】

割ともう、ずっと小っちゃい時から、そうですね。高校の時ももう、嫌なことがあったら、ばーって。(私は)あまり溜めれない(たちな)ので。言っちゃうタイプなので。はげ口にして、もうわーっというふうに。アドバイスしてくれる時と、ただ、ふんふんと聞いてくれる時とがあるんですけど。【土田さん】

母が日常のおしゃべりの相手になっていたり、辛い局面での精神的な支えになったりしているのは、同居している人(時)ばかりではない。対象者の32名中17名が親元で暮らし、残りの15名は親元から離れて大学の近くのアパート・マンションで生活をしていたが、相談相手として母親をあげていた22名の中には、親元を離れて暮らす11名が含まれていた。

実家は電車で2時間ほど離れたところにあるため、大学の近くで一人暮らしをしている荒川さんは、母親と妹に頻繁に連絡をしている。

・【どんな頻度で連絡をとりあっていますか？】

しょっちゅう。すごいする時と、全くしない時があって、向こうからは絶対に電話はかかってこないんで、こっちからするんですけど。【荒川さん】

荒川さんの証言によれば、母親に頻繁に電話をする背景には電話料金のサービスによるところが大きいという。携帯電話会社の競争激化の中で普及した家族割引サービスのおかげで、割引が適用されなければ控えたであろう親への電話が可能になったのである。日常的な会話の相手として母親が選択されるその理由に、家族のつながりを強化する企業のサービスという社会制度の影響もあるのである。

②特別な時・危機的状況の際の情緒的・精神的支援者

母親は日常的な相談相手だけではなく、特別な時、危機的状況に直面している時に、娘に頼られる存在となっている。娘が大きな決断をしようとした際の強力な味方になってくれたエピソードを雨宮さんは次のように語っている。

・(大学進学に際して)「お父さんは反対するけどお母さんはあんたがしたいようにしたほうがいいと思う」と言って大学進学の後押しをしてくれた。【雨宮さん】

親元から離れて暮らしている下村さんは、悩んだときにだけ、母親に相談をしている。母親からアドバイスを受けることを期待しているわけではなく、むしろ、ほぼ決めている事柄について背中を押してくれることを期待した相談のようである。

・(相談相手について) まあ、お母さんかな。お母さんは、要所要所でお母さん。とりあえず何か悩んだときに、どうしよう、どうしようっていうのはお母さんにだけ言って。でも、絶対、「あんたのことなんだから、私、関係ないし、自分で決めなさい」ってパーン。そう言われた後にそうかってなって、とりあえずやってから決めようみたいな、いつもそんな。なんで、相談してるけど、答えはくれないんです。「答えはちゃんと自分で見つけなさい。」(と)だから、これだけいろいろできてるのかなっていう。それぐらいですかね。【下村さん】

■ 第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

不況期に就職活動を経験した（している）女子大生たちにとって就職活動は、心理的に非常に苦しい経験となっている。日常的な情緒的な支援者である母親が就職活動の時に精神的に大きな支えになったことを話してくれた人が少なくない。

例えば、久保田さんにとって母親とは恋愛のこと等何でも話をする間柄である。母のほうも「お父さんには内緒ね」と言いながら、青春時代の恋の話をしてくれる。そんな母は「辛い」就職活動の際に、あるときは励まし、あるときはそのままの自分を受け止めてくれる精神的な応援者でもある。

久保田さんは、いくつもの説明会に行き、無理やり「いい会社だ」と思い込んだり、「面接頑張ろう」と思い込もうとしている自分自身に、ストレスを感じている時に母親が支えくれたエピソードを語っている。

- ・大学を出たら、一人暮らしでOLをするものだと思っていたんですけど、あんまり就職活動もうまくいかなくて。それで、家から「もう帰っておいで」って言ってもらったり。【久保田さん】

久保田さんに限らず、松井さんや美崎さん、そして土田さんにとって、厳しい就職活動の中にあって、ありのままの自分を認め、なぐさめ、応援してくれる母親は、精神的に安寧を与えてくれる全面的な応援者であることがわかる。

- ・私が、就職活動でぼろっぼろっになっていた時に、「もういいやん、就職しんでも。別になんか資格とか取る道もあるし、他にバイトとかでもいいやん」みたいに言ってくれて。【松井さん】
- ・母はですね、東京に面接に行った帰りにとかに、「終わったらゆっくり遊びにいこうね」とかそういうこと言ってくれたり、いろんな面で、その生活の面でも支えてくれてたので。
[生活や精神的なサポートということですか？]
はい、そうですね。相談、っていう相談ではないですけど、そういう、私の気持ちを受け止めて言葉を返してくれていたので。【美崎さん】
- ・最終的にはあんたに任せるから、あんたの好きなようにやればいいじゃないっていうふうに言ってくれるんで。就職に関しても「ちょっと介護でも（やってみようかな）」っていうふうに言ったら、「やってみて、もう駄目だと思ったら無理して続けなくてもいいから」みたいなことも、「探せばいいんだから次を」って感じで。ちょっと大らかに見ている感じです。【土田さん】

③キャリアアドバイザーとして期待される母親

井上さんらの語りからは、母親が、日常生活や当面の課題、すなわち就職活動を励ましてくれる相手としてだけでなく、就職相談の相手、自分のキャリアの方向性に助言する自分専用のキャリアアドバイザーとしてとして期待されていることがみてとれる。

- ・やっぱり私のこと一番わかっているので。（中略）就職のことはあまり母には、どこどこを受けてるとか具体的なことは言っていなかったんですけど、こういう職種はどうかみたいなこととかを聞いたり。
[お母さんは適切なアドバイスを（してくれたのですか）？]

そうですね。

【お母さんはどういったところからアドバイスして下さるんですか？井上さんの性格がこうだからっということからですか】

そうですね。そういうのは向いてないとか、やっぱり女の人は長く勤められる方がいいんじゃないかとか。【井上さん】

・（就職活動の時は）あまり友達に相談せずに、どちらかといえば一人とか、母とかにしてました。【橋口さん】

・どうしよう、どうしようとお母さんに言っていたら「あんた悩んでるなら、もうやりなさい」ってお母さんに言われて。（母からの後押しをきっかけに公務員等の勉強を始めた）。【住田さん】

・【お母さんへの相談というのはどういう風にされてますか？】

仕事のこととか将来のことってというのは、結構（しています）。真剣に「話聞いて欲しいんだけど」という感じじゃなくて、なんか用事しながらみたいな。なんで、なんとなく聞いてもらって、って感じです。

【具体的にはどんなことを相談しました？】

最初にその、先生からこういう風にしてもいいよって言われた時に、「先生からこういう話をもらったんやけどどう思う？」みたいな感じで聞いたりとか、みんなが就活している時に「私があんまりやる気じゃないんやけど、これって大丈夫かな」みたいなとか、何気ないことを。

【田村さん】

ただし、田村さんらの言説にあるように、自分専用のキャリアアドバイザーは熱心に聞いて自分のためのアドバイスを考えてくれるばかりではないようであるが。

・（就職の相談をしたら）あんまり真剣に聞いてもらえてなかったかもしれないんですけど、「いいじゃん、好きにしたら」みたいな感じで。【田村さん】

・（就職活動先を相談したら）「いいんちゃう」みたいな。

・【大学進学時に：そういうとき悩んだときに誰かに相談しました？】

親に、お母さんに相談しました。「好きなようにせや」「それでいいやん」って。【本田さん】

母親が、日常的な精神的な支援者としてだけでなく、キャリアアドバイザーとして期待されていることをみてきたが、自分専用のキャリアアドバイザーの母親のアドバイスが精神的な安寧や進路探索時に適切なものであるとは限らない。以下の久保田さんの語りからみられるように、その時その時で異なるアドバイスをし、娘が混乱する要因になっているとみられる場合や、娘の気持ちに寄り添って、文字通り親身になって行った母親のアドバイスによって、結果的に職業探索の遠回りをすることになった橋口さんのような事例もある。

・（就職活動に関して）母には、「そんなんじゃだめ、しっかりしなきゃ」と言われることもあれ

第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

ば、「女の子だからのんびりやればいいじゃない」と言われることもある。【久保田さん】

橋口さんは高校時代から教員志望だったが、教育学部が不合格だったため、高校の担任の先生のアドバイスに従い、教員免許をとれる通信学部を併設した大学で当時の自分の成績に見合った学部・専攻を受験し合格に至ったという経験をもっている。入学後に教員への憧れが薄れたこともあり就職活動の時期には民間企業へ応募した。その頃のいきさつを橋口さんは以下のように語っている。

- ・お母さんによく、「あんた何でもとりあえずそこそこできるんちゃう」みたいに、「なにかが秀でているわけじゃないけど、人並みにはどれやってもできるんちゃう」みたいに言われてて。だから「別に先生じゃなくても一般企業でもやっていけることはやっていけると思うで」みたいな感じで。それに（私は）普通にあんまり人前に出て、わあわあ言うのが苦手なタイプなんで、どっちかというとなりの話聞きたいというタイプなんで、「それだったら普通に事務とかしてるほうが楽なんちゃう」みたいな感じも（母に）言われてて。あーなるほどなーって、そっちのほうが合ってるんかなーと（思い進路を一般企業へ変更した）。【橋口さん】

母親のアドバイスに従った橋口さんは、一般企業への就職活動を行い一社から内定を得ている。しかし、内定獲得後も就職活動を行い精神的に疲れる日々を送っているうちに、精神的に疲れるよりも、子どもたちと関わって体力的に疲れているほうが自分には合っていると考え、再び教育関係へ進むことに決め4年生の春に幼児教育機関で教育実習を経験した。その経験により幼児教育に携わりたい気持ちに確信を持ち、内定を断り教員採用試験に向けての勉強を始めた。希望のB市の採用試験には不合格に終わったものの、4月からは期限付き講師として働くことが決まった。

橋口さんは調査当時は次年度のB市の採用試験にむけて勉強を続けていた。自分に点数をつけるとしたら100点満点で何点付けますかという問いに対して、ぎりぎりの及第点の60点を付けた理由を「やっぱり、もっとちゃんと、もっと早くから。先生になりたいなと思ったのが遅かったので、それやったらもっと早くからちゃんとボランティアとかして、気づいとけばよかったなと思います。」と話してくれた。

これまでみてきたように、母親が、娘に対して積極的に娘専用のキャリアアドバイザーとしての役割を担っているとみられる事例が複数ある一方で、専門学校を卒業後すぐに結婚をしたため就職活動を経験しておらず、キャリアアドバイザーとしての役割を担えない母親は、「相談相手になれなくてごめんね」と娘に詫言っていた。また、以下の住田さんのように、会社務めの経験のない母親が、自分以外の他者から積極的にアドバイスをもらうように促した例がある。

- ・ものすごく（しつこく）「どうするの？」と言ってきます。（中略）でも「会社に勤めてないから、自分は。OLさんはどんな生活やとか（経験がない自分は）言ってあげられないから、いろんな人にアドバイスをもらい（なさい）」ってことをすごく言われました。【住田さん】

母親からいろいろな人たちに話を聞いてみるようアドバイスもらった住田さんは、国家資格取得のための実習先や、興味のある講演会の会場で多くの人にアドバイスを求めるようにしたと語っている。そして、その出会いがきっかけとなって進路が変更されている。

④ライフコースモデル、ロールモデル、としての母親

32名中フルタイムで就業しているのは（家業の手伝いを除く）4名であり、そのうち2名が母親のライフコースを見習って母親のように結婚後も仕事を続けたいと回答している。

母親のライフコースを間近にみて、母と同様のライフコースを歩もうとする人がいる一方で、母親が自分と同じライフコースを歩まないようにと娘の幼少時から言い聞かせており、娘も、母の示す母とは異なるライフコースをキャリア展望として抱いている事例があった。

- ・ やっぱり女の人は長く勤められる方がいいんじゃないとか。母は自分が専業主婦で、私には働いてほしいみたいなことを、手に職を持ってた方がいいみたいな、自分は働くという道を選ばなかったとか持てなかったみたいな（ことを言っていました）、母は大学を出てないんですよ。それで、自分はお父さんに頼りっきりみたいな生活しか選べなかったから、もっと選択肢がある方がいいみたいなことを結構子供のころから言われていて。【井上さん】

その一方で、ライフコースのモデルではなく、母親役割に限定したロールモデルとしてみると答えた人たちもいた。

- ・ [こういう人になりたい人はいますか？]

やっぱり母みたいな人にはなりたいたいと思って。いい加減と言えばいい加減といえるかもしれないんですけど、結構、大らかで、なんか、昔は父も結構我が強い人だったんで、「あれしろこれしろ」みたいな感じで、すごいわーわー言う人だったんですけど、それも別に黙って、いつものことだからみたいに何気なくできる人だし、家族の健康管理とか、ちょっと調子が悪いって言っただけでいろいろ面倒みてくれたりとかもするし、自分がしんどくても家族のことはやってくれてるんで、母にはすごく感謝もするし、憧れでもあります。【田村さん】

以下の久保田さんの場合は、母親役割というよりも専業主婦のロールモデルとして母親をみているといったほうが適切であろう。

- ・ [目標にしている人はいますか？]

母です。社交的で、近所づきあいもうまくやってて。エステとか行ったらそこで仲良くなって、で、お菓子作ったりパン作ったりするのが好きなんで、一緒に私と同じくらいの子も連れて。電話したら「（私と同年代の子たちと）一緒に、今ちょっとお菓子作ってるから、ごめんねとか言われて」。そういうふうに社交的で。なんか楽しそうだなと思って。（母は会社の同僚と結婚退職後、専業主婦で子育てがひと段落してからは、老人ホームでパソコンの講師のパートなどもしている）パソコンの資格とかも取って、あと、お菓子とかパンの教室も行ったって、いろいろアクティブな、ジムに行ったりして、なんでもしてますね。

- ・ [社交的な点の他に何かありますか？]

優しい旦那さんをつかまえた点も。ああこれは賢いなと思いました。【久保田さん】

教育から職業生活への移行期にあり、また、これからどのように生きて行くかという課題に直面している多くの女子学生たちにとって、母親が日常的な相談相手でもあり、進路のアドバイ

■ 第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

ザーとしても期待されていることを、女子学生の語りを通してみてきた。

このように、女子大学生たちにとって母親は、日常生活の情緒的・精神的なかかわりを持つ人であり、特別な時、特に就職活動という危機的状況の際の情緒的・精神的支援者として期待されているばかりでなく、職業選択の際のキャリアアドバイザーとしての期待を担っていた。また、ロールモデル、ライフコースのモデルとして認識されている場合もあった。母親は大学から職業生活への移行を直前に控えた女子大生たちのコンボイの中でも最も身近な位置を示していることが多かった。

以上、就職・職業探索活動という成人移行期における最も大きな課題に直面した娘と母親の関係をみてきた。そしてこの時期の母娘の緊密な関係性という特徴を確認したが、これまでみてきた事例とは対照的に、母親には一切相談をしなかったという人の事例をみておくことにしたい。

母親を頼らない人たち

就職活動・職業探索期に身近な相談相手として選択していない人は、32名中10名である。その中の一人である細江さんは、母親に相談をしなかった理由について、母親の希望に応えられそうにないと思い、母から距離をとるようにしていたと語っている。母からの承認が得られそうにならないことを見越しての相談ネットワークの選択である。

- ・(10歳上の兄が芸術活動をするためにフリーターで、4歳上の姉が大学卒業後、大手企業に就職したものの仕事が合わずに体調を壊し1年で退職した後、自然の中で暮らす職業を選択をしているため)お母さんには(就職活動中の業界に対して)「もうちょっとしっかりしたところに就職してほしいと」は、ずっと言われてました。だから、もう何も相談はしませんでした。親には、ずっと言われてたので、もう「大手にして大手にして」としか言われなかったのです。そんなこんな不況の時に大手になんか受かるわけないやんかと思いつつ、何も相談はせずでした。

(と語る細江さんは結局大手企業に就職が内定した。)

これまでみてきたように、教育から職業生活への移行期にあり、これからどのように生きて行くのかという課題に直面している多くの女子学生たちにとって、多くの場合、母親が日常的な相談相手でもあり、進路のアドバイザーとしても期待されていることをみてきた。コンボイの概念でみると、母親は第1、第2層に位置づけられており、20年あまりにわたり、多角的に強いつながりを求められている(あるいはお互いに求め合っている)ことを確認した。その一方で、母親のアドバイスや期待にこたえられそうにないと判断された場合には、距離をとっている事例もみられた。

では、もう一人の親である父親とはどのような関係性にあるのかを、次の節でみていくことにしよう。

第3節 父親の役割

前節では、就職活動・職業探索期において娘が母親との緊密な関係性にあること、コンボイの概念図で示すと母親は長期間にわたって女子大生たちの最も近いところに位置することを確認した。では職業探索期における、もう一方の親である父親の影響はどうだろうか。

母親が、日常生活の情緒的・精神的支援者、特別な時・危機的状況の際の情緒的・精神的支援者、キャリアアドバイザー、ロールモデル、ライフコースのモデルとして様々な場面で頼られる存在であり、キャリア形成に関わっていたのとは対照的に、父親は相談相手として全く登場しない場合が多かった。

その一方で、エントリーシートの添削など具体的な就職活動支援をするキャリアアドバイザーの役割をしている事例や、幼少期から熱心にスポーツの教育支援をして娘の職業キャリアに深く介入している事例があった。

キャリア形成に関する不在

前述したように、母親が32名中22名の女子学生に身近な相談相手として選択されていたのに対して、父を選択したのは離死別の2名を除く30名中6名に留まった。父親との日常的なかわりの様子と、進路相談相手として父親を頼っていないことを、まずは、本田さんらの語りから見てみることにしたい。

・お母さんに言ってたら、お父さんのには、多分聞きたいんですけど、私は直接あんまり言わないんで、お父さんが「何の話やー」みたいな感じで来るんですけど。なんか、マジメな話ができないじゃないじゃないですか、お父さんとやったら。もう、しょうもない、しょうもない会話になるんですよ。嫌いとかじゃないんですけど、全然。なんで、あんまり、そうですね。欲しい答えが返ってこないんで、いつも。【本田さん】

・お父さんは、相談もしなかったんで、お母さんが一方的に言ってきてただけなので、もう何かほんとに話はしなかったです。【細江さん】

・父は興味なさそうなんですよ。で、事後報告です。仲はいいんですけどね。【加藤さん】

・【(会社員の) お父さんは全然登場してないですけど？】

お父さんはなんか、なんとかなるんちゃうっていう人やから、全然。いいように言ったら好きにさせてくれるけど、悪いように言うと全然アドバイスにならん感じで。たまーに、あーいいこと言うやん、みたいな。そういう時があるぐらいで、あとはもう「好きにしーやー」とか、「どうにかなるってー」っていう人やから、あんまりしなかったですね。

【こちらからはしなかったんだ？】

向こうも気い遣ってなんもしゃべりかけへんし。【松井さん】

上記の4人のほかにも、父親は娘の進路の相談相手としては不適格だと認識されている事例があった。

遠野さんの場合は、就職活動で難航する娘に対し、バブル期に就職をした父から「さっさと就職を決めろ！」と言われて、(頭にきて)もう“どかん”となっちゃって「お父さんの時とは違うんだからね」と言ってそれ以降、就職活動について父と話をするのが極力避けられている。

また、井上さんの場合は、大手企業人事部を3年前に定年退職し、現在は旧特殊法人で働く父は、11歳上の兄や、姉の就職活動の時と同様に、娘がコネを使って就職することを嫌い、就職の支援は一切していない。井上さんが就職活動で苦戦している最中もあまり話をしなかったとい

■ 第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

う。そして、井上さんの方からも父にアドバイスを求めることはなかった。

就職活動期を振り返って父親とあまり話をしなかったと語る橋口さんは、父の経歴もあまり知らないと答えている¹⁶。

・[経歴とかについて話をします？]

たまに聞きますけど、でもあんまり聞かない。

[お父さんの方から自分の人生こうだとかないですか？]

父は、あまり、自分から、なんかしゃべらない感じなんで、しゃべらないというか、そこまで自分からあまりばあばあばあしゃべらないんで、聞いたらしゃべるけど、がっつりそういう話は母のほうが多いですね、やっぱり。【橋口さん】

①キャリア・アドバイザーとしての父親

これまでみてきたように、父親が日常的な相談相手や職業キャリアに関する相談相手として選択されていないことが大半を占める中で、目指す職業と大きなくくりで同じ業界で働く父に対して、就職活動期間中に頻繁に電話等でアドバイスを求めたり、状況報告をし、それに対して父から自己ピーアールの書き方をアドバイスがあったり、エントリーシートの添削をしてくれたりした事例が1件あった。

また、母親と比較して父親がキャリア形成の支援者として影が薄い事例が多い中で、以下の事例は、就職活動への直接的なアドバイスとは異なるものの、娘がアルバイトという形の職業体験で悩んでいる時に、娘に寄り添い、職業人・人生の先輩としてアドバイスをしている事例である。

・(アルバイト先の飲食店で怒られて)「使えへん、使えへん」って言われてて。(上司は)職人さんなんで、怒られてて、すごい悩んでて、もう疲れてたんですよ。そういう時に、なんか、ちょっとひきこもりというか、もう何もしたくない、みたいな感じになってて。(父が下宿先に車で迎えにきてくれ)その時は二人でしゃべるみたいな。月に2回とか多い時で。(中略)(父は)「みんな、お前のことを賢いって言ってる」みたいな、「一人暮らしして大学行って」みたいな(ことを言って励ましてくれる)。でも辛くなって、こんな何もしてない私なのに。その時大学も、休んでたんで。もう誰にも会いたくなかったんですよ。そうだったんで、(私は)「違うで。今、こうこうこうで、逃げてるねん」みたいな感じで(父に)言ったら、(父は)「50(歳)までは他人の土俵でいいんやから、(いろいろ)言われたらいいね」みたいな(ことを言ってくれたり)「川の水は上から下にしか流れへんから」みたいな(ことを言ってくれたりした)。「ちゃんと、それも勉強」、みたいな。「そのままでもいいんやで」みたいな。「怒られる時に怒られときなさい」って言われて。で、「はい」って(答えた)。「自分の土俵で戦わなきゃいけない時がくるから、今は負けときなさい」って言われて。あーそうやなーって思って。休憩してていいんやー、負けてていいんやー、逃げてていいんやー。みたいな。そう思った時に、あ、なんか、そろそろやらなあかん、みたいな思って。【野口さん】

¹⁶ 筆者のイタリアにおける調査(脚注15を参照されたい)では、イタリアの女子大生が、母親、父親ともに経歴、すなわち、彼らがどのように生きてきたかの経歴をよく知っていたのとは対照的である。

②ロールモデル、ライバル

父親が娘に対し職業キャリアに関して直接的な助言をすることはなくても、あるいは、娘が父親に助言を求めていなくても、以下でみるように、父親が最も身近な職業人としてのロールモデルやライバルとしてみなされる事例もあった。父のライフスタイルや職業人としての生き方を見倣って生きていきたいと語った西村さんらの事例をみておこう。

「父のライフスタイルがいい」

西村さんは、地元の町役場で公務員として働き近年早期退職をして、同時期に公務員（専門職）を早期退職した母と野菜作りなどをしている父を尊敬している。仕事のほかに地域の行事、ボランティア等の活動をして、町の人たちと広い付き合いをする一方、アウトドアを楽しむ父を尊敬している。3回生の頃から父に公務員を勧められて、父の元の職場である役場の採用試験を受けて、4月から勤務することになった。西村さんは父のようにコミュニティと関わりながら仕事をし、そして母のように結婚・出産後も仕事を続けたいと思っている。

「父の働き方への尊敬の念」

清瀬さんは、仕事・趣味のどちらにも熱心で、まじめな父親をととても尊敬している。

- ・父はネクタイをつけるうちに表情が変化するんです。オンとオフの切り替えの良さと時間厳守なところをすごいと思います。【清瀬さん】

「人生のモデル」

中学校の教員をしている美崎さんの父親も仕事に熱心である。休みの日でも、日々自ら勉強をし、知識を吸収し思考を深めている父親を美崎さんの生き方のモデルとして捉えている。

- ・帰ってくるのも遅いですね。日ごろ頑張って仕事をして一家を支えている姿に、多分、尊敬の気持ちを抱いているんだと思いますね。結構いろいろ知識があるので、「いろんな物事に対してちゃんと興味を持って知識を持てる人になりたいな」と思えたのも、多分、父のおかげですし。

【お父さんは日頃勉強をよくされているんですか？】

父は本とかもすごく好きで、アマゾンでいろいろ買って、お母さんに怒られるんですけど。本ばかりたまっていくんですけど。（父にとって読書は）多分、心の支え、日々やっていく支えという感じだと思います。【美崎さん】

「教員の父のようにになりたい」

教育実習に行って 人間関係が良好でなかったこと、生徒との接し方に戸惑いを覚え、いわゆる「リアリティ・ショック」を体験したことを契機に子どもの頃からの夢であった教員志望が揺らいでいる橋本さんであるが、中学校教員の父のようにになりたいとも思っている。母が勉強をなさいと厳しく言う一方で、「子どもの心がわかる父はガミガミとは言ってこない」、父から指導された友人たちから「いい先生だよ」と聞くたびに、「父みたいな人になりたい」と思い、気持ちが揺れている。

「父を超えたい」

荒川さんは会社員から起業し自営業を営む、尊敬する父をいつか超えたいと思っている。以下の語りからは、荒川さんにとって父親が、人生における身近な先輩、目標となっていることがわかる。

- ・父は、どっちかというと尊敬している面もありますけど、ライバル精神の方が大きいんです。いつか父を超えたいなっていう。お父さんのやってないことをやろう、と思ってパソコンとか勉強した面もあると思います。そこに関しては父より知ってるねんで、という優越感というか。今度もスカイダイビングに行くんですけど、「お父さん、スポーツ好きやけどこれはやってないやろ」とか言ってます。意識しています。そうですね。大きいのがありますね。父より、すごいビジネスマンとしても人生としてもいいものをおくりたい、超えたいっていうのがあります。

【荒川さん】

③キャリア・マネージャーとしての父

上記のように、娘の職業キャリアに関わろうとしない父、ところどころでアドバイスをする父、身近にいて生き方の背中をみせるタイプの父という姿のほかに、本研究の事例のなかには娘の人生行路に積極的に関わる事例が含まれる。野球のイチロー選手の父やレスリングの吉田沙保里選手の父の例のように、トップアスリートとして活躍する人のエピソードとして、幼少期から父親が熱心に指導をしている話は数多くあるが、調査対象者の中にもそのような経験をした人が2名含まれていた。

職業キャリア選択にあたり、両親、特に父の期待に応えようとしつつ、また模索を続ける2つの事例について少し詳しく紹介したい。

事例1では、スポーツを続ける自分の伴走者のよういつも応援してくれた父親に対する配慮から初期職業を選択している様子が、事例2では、親の期待を受け入れながらも少し距離をとって職業探索をしている様子がみられる。

【事例1】

望月さんの事例からは、幼少期からある人生行路を父親に示され続け、時折反発をしながらも父の期待に応えようとしている様子がうかがえる。

望月さんは4人兄弟の末っ子で、兄3人とともに6歳のころから武道を習っている。父は毎日道場の送り迎えをし、自宅でも練習をさせるスパルタ式で娘を育てた。望月さんはケーキ作りなど「女の子らしい」ことをするのが好きだったが、嫌だとは言えない家庭環境で、自分が当然やるべきことだと思い練習を続けたと語る。

毎日練習に明け暮れる望月さんは練習では強いのだが、試合で結果が出せずに高校時代は精神的な挫折を経験する。それでも父の期待を受けて、大学でもこの武道の部活動に参加している。しかし、先輩やスポーツ推薦で入部してきた人たちが試合出場をする機会が多いということもあり、大学でもいい成績を残すことができなかった。

そのような中で、大学入学時には教員になって武道の指導者の道を進むことを父から期待され、自分もそう思っていた教員免許の取得を大学生生活半ばで断念してしまった。このことを伝えたときは父からはかなり怒られた。その一方で父は望月さんの武道の良さを誰よりも理解してくれる人である。試合の様子を電話で伝えても、まるで目の前で見えていたかのように悪いところと

ともに良い点を指摘するほどである。そんな父を、望月さんは心から大切な存在であると思っている。望月さんは部活動を4年の最終試合まで続けている。

大学1年生のときに住んでいるマンションの1階のパン屋さんでアルバイトを始め、それ以来パン屋さんになる夢を持つようになるが、まずは父親の期待に応え、3人の兄たちと同様、武道を生かして公務員（警察等）になる道を選んでいる。望月さん自身その組織で武道の講師になることを考えることもあると語っている。その一方で、ある程度勤めた後に資金を貯めてパン屋を開業する夢も持っている。

【事例2】

藤原さんの事例では、足のけがを契機にスポーツ選手で活躍する人生行路から離れ、職業探索を続ける途中で父母が深くかかわろうとし、それに対応する藤原さんの、いわば「交渉」のなかで初期職業キャリアが形成されつつあることが見て取れる。

藤原さんは、母の影響でスポーツを始めた。2歳の頃から団体競技の少年クラブに入っている兄についていくようにと母に言われたのが藤原さんが5歳くらいの頃である。クラブの中で走りが早いことが認められ、小学校からは陸上のクラブに入った。小学校高学年の頃には地域の陸上クラブ、小学校のクラブ、友人の姉が入っている中学生・高校生が中心のクラブという、3つのクラブに所属し、毎日練習をしていたという。小学校5年生ぐらいの時に全国大会で2位に入賞した時には、父親にもものすごく怒られた。「なんで1番じゃないんだ、なんで1番をぬけなかったんだ」ということで怒られたと語っている。いつもは父親と一緒に励ます母親がこの時ばかりは「この子は競馬の馬ではないんやで」と言って娘をかばったという。

陸上競技を続ける一方で、小学校高学年時には、友人が入ったこれまでは異なる種類のスポーツクラブにも藤原さん自身の希望で入った。すぐに頭角を現し、試合でもいい成績を残した。その競技が大好きでそのまま続けたかったが、中学入学前に親にどちらにするか選択を迫られた。というのも、その競技を選ぶのであれば、校区の中学校が強豪校であり問題がなかったものの、陸上を選ぶ場合には、校区外の公立中学校が強豪校であるため、入学するには住所変更をしなければならなかったからである。親が入学手続きをすでに進めていたこと、監督にもぜひ来てほしいと言われていること、手続きの期限が迫っていることを告げられて、「そこまで話が進んでいるんだったらそこに行った方がいいんだろうな」と思い、本心はもう一方のスポーツを続けたかったが、特に親から明示されてはいないものの、親の期待を汲取る形で陸上を選択した。

中学校での練習は厳しく、疲労骨折をしてふくらはぎが紫色に腫れあがっても休ませてもらえないほどだったという。しかし、中学3年生の時にけがをし、大会に出場できなくなってしまった際に、監督から見捨てられたような印象を持ったことがきっかけになり、藤原さんの陸上への熱がさめてしまった。高校進学後も陸上を続けるものの、それまでよりは身が入らなくなった。部活の練習をあまりしない一方で、友人に誘われてバンドに入り、夜間にライブに出かける生活に対して、両親によく怒られた。高校卒業時に専門学校に行くことを希望したが、両親から「嫌でも働かないといけない時がくるんだから、4年間遊びに行ったらいい」「4年間、人生の中で貴重な時間だから4年間行って、今までできなかったことをしたらいいやん」と大学進学を勧められた。陸上の経験から、やる気がなければ所属しても頑張れない自分を知っていたため「行くならせめて専門学校とか、そのことをするって決めた大学にする」という主張に対して、両親は「専門学校のお金は払わない」「お父さんたちはお前が4年大学に行くお金しか貯めてないから、それ以外のお金は払う気はない」「専門学校なんかあんたが行きたいと思った時に自分で働いて

第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

お金を貯めていきなさい」と4年生大学への進学を強く勧めた。藤原さんは「やっぱりお金を出してくれるのは親だし、それも親孝行なんか」と思い「じゃあ4年生大学に行くしかないのかな」という考えに至り、大学に進学した。後述するように試行錯誤を経て、大学卒業後は専門学校に通う事も視野に入れつつ、自分の夢に向けてゆっくりではあるが歩みを進めている。

以上みてきたように、成人移行期にある娘にとって、父親は、娘にとって人生の長い伴走者たち（コンボイ）の一員ではあるものの、心理的な関係としては母親よりも距離があったり、実際のやりとりは頻度が少ないことが多かった。また、母子の関係性と比較すると、人によって大きく異なる様子がみられた。

第4節 きょうだいの役割

兄：就職活動・職業探索期の「兄役割」

きょうだいのなかでも、姉や妹が日常的な相談相手、あるいは姉妹の話し相手や相談の受け手となって、友人関係に準じたものになっているのに対し、兄が、就職活動中や進路選択に際し、妹の熱心な支援者の役割を担っている事例が数例みられた（姉が自分と同様の職業訓練を経験している場合は、姉が相談者として選択されていた。第6章「アルバイトでの出会い」を参照）。

なお、以下で取り上げた事例はいずれも両親ともに健在で、経済的にも安定しているとみられる家族であり、兄が父母に替わり家長の役割を担っているわけではない。

まずは、遠野さんの事例からみていくことにしたい。遠野さんは、4歳年上ですでに社会人である兄が、妹のことを心配してインターネットから就職関連の情報を集めてアドバイスをしている。

・ 就活の相談は兄です。

[就活の仕方とか？]

そうです。なんだかんだ言って、文句言いつつ、ネットから探してくれて、「ここに合説（合同説明会）あるから言ってこいよ」みたいな感じで（案内を）渡してくれたりとか、あと、どこどこに若年層向けのハローワークがあるからお前ちょっと行って来い」みたいな感じで言うてくれたのも兄でした。文句言いつつ。私も文句言いつつやりましたね。【遠野さん】

一方、館野さんは、大学院・修士課程2年生で自身も就職活動をしている兄が妹の心配をして、3年生の夏ごろ、なかなか就職活動を始めない妹の背中を押している。

・ [就活を始めたきっかけは？]

兄貴に言われたから。「そろそろやっつけ」って。【館野さん】

また久保田さんの場合は、就職活動に苦戦している妹に対し、大手企業に勤務する父からはアドバイスは特にないのに対して、春から役所の職員として働くことに決まっている大学院生の兄が求人情報を探してくれている。

- ・(就職活動に苦戦している妹に対し、父からのアドバイスは特にないのに対して、大学院を修了し役所職員なりたての兄が)「やりたいことをやりなさい」って言ってきてて、でも「こういうのもあるよ」って、たまに求人情報を持ってきてきてて、市役所とかのをもってきてきてて。

【久保田さん】

井上さんの場合も、大手企業の人事担当であった父からのアドバイス等は一切ないのに対して、親身になって就職活動の相談にのってくれたのは兄である。

- ・普段は全然連絡とらないんですけど、東京に住んでいるんで、就職のことでいろいろ、時には志望動機を一緒に考えてくれたり。お兄さんはちょうど就職氷河期の時で、でも、お兄さんは学歴が結構高いんで、あんまり関係なかったらしいんですけど、「最近どんな感じなのか」とか、私が(採用試験に落ちて)全然行く企業がなくなった時にも「考え方を変えたほうがいいんじゃないか」とか、そういう連絡をくれたりとか。

[電話でですか?]

電話もありました。基本的にはメールで。

[お兄ちゃんは心強いサポーターだったんですね]

そうですね、はい。ちょっとプレッシャーだったりもして。

[すぐ過ぎるんだ、お兄さんは?]

そうですね。大手の銀行で。

[それで大変だよ、ってはおっしゃらなかった、金融関係は?]

言いますね。はい。「やっぱり女の人で総合職というと、結構バリバリの人が多いから総合職にこだわらなくてもいいと思う」って言い方はされました。【井上さん】

上記のように、親の補填や補強をするような立ち位置で応援してくれる兄は、女子大生たちにとって職業探索の強力なサポーターとして認識されていた。その一方で、父母と同様な態度で応援があるとき、すなわち兄が父母役割を演じようとするときには、兄の態度に閉口している事例もある。

- ・私のことを兄も監督するんですよ。母と父のいたらない部分を兄としてフォローするみたいな、すごい、するんですけど。今としては受け入れられますけど、反抗期の時とかうっとうしくて、ほんとに帰りたくない家って感じでしたね。【藤原さん】

就職活動・職業探索時のサポーターとしてだけでなく、学生生活の過ごし方や家族への対応・自分に対する配慮から、兄が身近なロールモデルとして認識されている事例も含まれていた。

- ・[こういうふうになりたいなという人は?]

兄ですかね。そんなに仲いいわけじゃないんですけど。東京で仕事をしているんですけど。タイプが全然違うというか。私はバイトが全然続かなかつたし、兄は同じところにずっと4年間バイトをし続けて、上のほうまで行って、教育係をやっていて、人望もあつたりして、なのですごいなと真似できないなっていうふうになって。なれるんだつたら兄みたいになりたいとちょっと

第4章 女子大生と家族：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち①

思うんですけど。自分で全部やっちゃうじゃないんですけど、私は結構親に頼りがちな面があるんですけど、兄はバイト代が結構入ったからもう仕送りいらなくて言ったり、それを俺の分を妹に回してくれてっていうのを、私に言わないで、親に、もう秘密にやってくれたり。私に優しいわけではないんですけど、無愛想だし、あんまり話をするわけではないんですけど、裏の方で結構気を遣ってくれたりして、ちょっと就職で悩んでいた時に、母が「兄ちゃんに電話とかしてみれば」って言ったら、結構仕事で遅かったりするんですけど、メールしたら電話をかけてきてくれたりとかで、すごい心配りと思って。結構なんか、あてつけじゃない優しさというのがすごいできる人だから、そういうふうになれたらなと思います。【土田さん】

以下は兄が妹の大学進学を後押しし、入学費まで工面している例である。

- ・お兄ちゃんは、大学に行きたくないって（父母と）喧嘩した時に、その喧嘩してるっていうのを聞きつけて、（自宅へ）来て、「俺が大学の入学金出したる」って言われたんですよ。もう、私、そんな時、最低なんですけど、「なんで行きたくもない大学の入学金出してもらわなあかんのよ」って言ったんですよ。もう怒ってたんで。そしたらお兄ちゃんが、「もうお前このお金好きに使えや」って言われて、で、「行っただけ行ったらええやん」、みたいな、「楽しいらしいから」みたいな。「俺行きたかったけど行けへんかったから、お前行け」って言われたんですよ。そのお金であの、（私は）車の免許取りに行って「兄貴ありがとう」みたいな感じで（笑い）、（大学には）もう行くしなくなってきたみたいな、感じだったんですけど。【野口さん】

このように事例の中には、長期に人生の伴走者となるコンボイの中でもきょうだい、特に兄が、学校から社会へ移行する女子大生たちの重要な支援者として—語りの中では妹から期待されていないにも関わらず—近くに布置していた事例が数例含まれていた。

幼い弟や妹を前に、やや年長の兄や姉と思しき幼児に対して「お兄ちゃんなんだから」「お姉ちゃんだから」と親や周囲の大人たちが論じているのは巷でよく見られる光景である。周囲のそのような期待の中で成長したことによる、幼少期の頃から身につけた妹を庇護する「兄役割」が、就職活動という困難な課題に直面している妹に対して支援の手を伸ばさせているのかもしれない¹⁷。

一方、本研究のインタビューにおいては姉がそのような支援者として語られることはなく、むしろ、精神的な安寧をもたらす、最も身近な友人のような存在として認識されていた。

¹⁷ イタリアの調査では兄が就職の支援をしている事例はなかった。きょうだい関係が日本と比べて水平的なイタリアだからなのかもしれない（兄弟関係において「兄」「姉」「弟」「妹」といった垂直関係を含む単語は用いられていない。男きょうだいは「fratello」、女きょうだいは「sorella」であり、英語の brother, sister と同様である）。

第5章 “学校” 関連の重要な人々

：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち②

家族以外の身近な交流者や相談者としてあげられたのは、大学の同級生、先輩や教員、または高校からの友人等、“学校” 関連の人々が多かった。進路選択や職業探索に関して影響を及ぼしていた人としても家族に続いて、学校つながりの人々である。

本章では、日常的に共に時間を過ごす友人ではなく、キャリア形成に関わる指南者として認識されていた元同級生と先輩の事例、そして大学教員についてみることにする。

第1節 友人：一步先行く同級生

日常的な話し相手、相談相手として選択されるのは、同年代の同性の友人が最も多いが、就職探索期の支援者としては、すでに職業生活を送っている友人が、大きな役割を示していた。

松井さんの事例では、高校の同級生たちで、それぞれ短大と専門学校に進学し、一足先に就職をした友人が、就職活動中の重要な相談相手になっていた。人生行路の一步先に行く元同級生たちへの相談を通して、仕事の具体的なイメージをつかむだけではなく、元同級生たちのものの見方や生き方が、女子大生の職業探索・就職活動へのモチベーションの向上にもなっていることがうかがえる。

看護の道に進んだ元同級生は、仕事について、松井さんが捉えていたこととは別の面も気づかせてくれる存在である。

- ・ 同い年やけど、やっぱ、学生と社会人ってすごい違うなーって思って。働いている環境にいる人って学生からみたらすごい大人やし、言うことも全然違ってきてて。高校の時とかは同じレベルでしゃべってたのに、働き出してからはもう言う事がすごく大人になってきて。この子らに話を聞いてもらったら、言ってほしいこととかを言ってくれるし、なんか、自分がこの範囲で思っていることでもまた違う範囲のことを言ってくれたりして、新しいことに気づけたりして。

[この人たちには相談をすることが多いんですか？]

友達やけど、尊敬できる部分もいっぱいあるから、相談してますね。

[仕事に対する態度とかですか？]

(看護師として働いている友人について) この子、看護師なんですけど、看護師って、やっぱ、サイクルがいろいろあるじゃないですか 夜勤とか、日勤・夜勤とかあって。看護師ってほんまに患者さんとすごい接するし、ほんまに人の役に立ってるし、なんかそういう面で、私が販売にしようかなーってかかって悩んでた時も、なんか、なんやろ、「販売もいいけど医療もいいよー」みたいな、と言ってくれたのがこの子やって。「医療興味あるんやったらやってみたら(どう)」みたいなという感じやって。医療系の面白いこととかも言ってくれたし、その半面、やっぱデメリット、こういうとこしんどいとかも全部言ってくれて、あーそんなもんやんなーと思ったり。

一方、保育士として働いている友人は、自分と同じように進路選択にあたり悩んだ経験をした

第5章 “学校” 関連の重要な人々：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち②

後で進路を決めた、とても身近な人生の“先輩”であり、そして何より同級生で、ライバルである。

- ・（保育士として働いている友人について）その子は、なんやろ、なんか、この子は高校の時に短大に行くかフリーターになるか悩んで、結局短大行ったんですけど、そういう時どうしたかとか。私が一緒じゃないですか、言うたら。就活で正社員になるためにめっちゃ頑張るか、フリーターとかになるかみたいな、環境は違うけど悩んでいることは大体似てて。そういう時どうしたかって言うてくれたし。保育士って毎日しんどそうやけど、頑張っている話とか聞いたら私も頑張らな一とか思ったりして。

松井さんの証言からは、自分とは異なる職業人としての役割を負っている友人が発する言葉を、熱心に聞き入っている様子も伝わってくる。友人たちのことを自分より大人に感じる一方で、身近な存在であり、追いつけそうな友人だからこそ、触発され、やる気が高まるという面もあるのだろう。

第2節 先輩

元同級生だけではなく、高校時代の先輩や大学時代の先輩もまた、一歩先をゆく職業上のロールモデルとして語られていた。

4月から東京で働くことになった美崎さんにとって、1年前に関西から東京に出て同業種の仕事をしている一学年上の先輩（女性）は、まさに身近なロールモデルとなっている。

- ・東京に住むっていう事を決めたことに、（先輩の存在が）ちょっと影響している人かもしれないですね。面接の夜に向こうで話させてもらって、東京で当日、終わってからですね、「ご飯食べに行きましょう」みたいな感じで。それで、なんか、その方も大阪出身で関西出身なんですけど、大阪出身でも頑張って有意義に仕事をされて、あーなんか、「やっぱ仕事はやればできるんだ」、「東京でもやればできるんだ」ということを知ったんで、そう意味ではすごく影響を受けましたね。

美崎さんの話からも、元同級生から働くことに対する心理的不安の軽減と意欲向上などの影響を受けた松井さんと同様、先輩が「身近で頑張っている他者」として認知されており、触発されていることが伺える。

この2つの事例からは、インタビューをした女子大生たちより一足先に社会人になった身近な存在の友人・知人が、未知のキャリア・ステージを目の前にした女子学生の目標となり、心理的な支えとなっていることがみてとれる。

第3節 教員

教員は修学期間が長期化する中で、若者たちにとって、おそらく最も関わる機会が多い家族以

外の大人であり、職業人であるといえるだろう。それらの職業人と女子大学生はどのように関わっているのだろうか。

前述したように、就職活動・職業探索期に1名以上の大学教員を身近な相談相手として選択していた女子大生は、32名中9名にのぼる。とりわけ福祉を専攻している人たちは、ゼミの先生との関わりが深い傾向がみられた。全ての人たちが福祉の分野に進むというわけではないにせよ、職業レリバンスが大きい専攻であり、社会福祉士等の資格を取る人も多いためだろうと予想される。

ゼミの先生

鈴木さんと田村さんは、それぞれの大学で福祉関連の学部に所属している。二人の語りから、ゼミの先生が、専門的な教育にとどまらず、就職の紹介など就職活動の支援をしたり、また職場の労働環境の話や働き方といった仕事の現場をとりまく情報を与えたり、さらには、日常的な関わりの中で、励ましたりして心理的なサポートもしていることがわかる。

鈴木さんは、福祉施設に勤務することが決まっている。ゼミの先生は、勉強を指導し、困難な状況の時には精神的な支援をし、就職先の紹介もしている。鈴木さんの職業キャリア形成において重要な役割を担った、まさに重要な他者である。

- ・ [自分にとって影響を与えてくれた人とかいますか、マンガのなかでもいいですし。]

誰やろ。んー。影響を与えてくれた人。んー、でも一番ゼミの先生が大きいですかね。

[どういった意味で?]

あー、なんか、これ一番なんか、その今、就職先の、紹介してくれたのはO先生っていう先生なんですけど、その、決め手になってくれた人っていうか、ほんまに壁に当たった時に助言をしてくれたのはゼミの先生で、そうですね。すごい、ゼミの先生かなっていうのがあったり。

【鈴木さん】

田村さんにとって、ゼミの先生は、進路や就職活動に関して相談できる頼れる相手でもある。そのなかには、複数箇所からもらった採用内定に対してはどのようにしたらいいかというような相談も含まれている。

- ・ 先生には仕事のこと（を相談すること）が多くて、障がい者にかかわりたいけど施設じゃなくて地域で暮らすということを考えてるという話をしたり、いくつかそのあとに、これから行く施設以外にいくつか施設から内定通知をもらったんですけど、それをどう対応したらいいかという社会マナー的なことを聞いたりとかしました。【田村さん】

また、信頼のできる教員の言葉は進路選択の際にも影響を及ぼしている。公務員という道を選択した理由として、日常的な何気ない会話の中からも、「選択」のための後押しとして教員の発言が取り入れられたことが語られている。

- ・ K先生は1回生とか2回生とかで授業は受けてたんですけど、ゼミは3回生からで、2年間お世話になって、なんだろーなー、先生の話で、「公務員がいいみたい」なそういう話も聞いたことがあったような気がしますし、あとは、民間よりもですかね。先生の知り合いで、女性の方で、

■ 第5章 “学校” 関連の重要な人々：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち②

すぐに仕事を辞めちゃう方とかがいはいはる（いる）らしくて。なんで辞めたかどうかは私も記憶が定かじゃないんですけど。公務員のことを、そういえば褒めてたな、みたいな記憶が。

[ゼミの中での話ですか？]

そうですね、いろいろ無駄話するじゃないですか。3回生になるとやっぱりそういう話も増えるので、進路に関して。だから、そういう話とか。【田村さん】

さらには、採用試験の不合格という挫折に直面した際には、信頼のおける教員からの慰めや励ましが自分自身の人生行路を前向きに捉える契機になっている。

- ・あとは、まあ、うん、（大学所在地の）A市がだめで、（別地域の）〇〇に受かった時も、ほんと、「面接とか、就職は縁やからね」って言ってくださって、結構励まされたんですよ、それで。A市がだめだったときは、やっぱりショックでああA市から離れなきゃあかんなと思ってすごく嫌だったんですけど、縁がなかったんやな、って思ったら、まあ、それもそれで私の人生なんか、とか思い始めて。そのきっかけというか、考え方のターニングポイントというか。そういうのになったかと思います。【田村さん】

上記の事例では、女子大生の進路に関して事情をよく知っている教員は、民間と公務員の違いなど職種や地位によって異なる労働環境についても経験的に知っており、進路選択の際のキャリア・アドバイザーの機能を担っていた。また、それが特別に設定された進路相談というのではなく、ゼミナールのとき、あるいはその前後の日常的なかかわりの中で行われていた。そのことにより、教員の発言は、キャリア探索に向き合い、時に戸惑う女子学生にたちにとって、信頼できるものとして受け取られ、吟味されていた。浜口らの概念に従えばまさにレファレント・パーソンとなっていた。

一方で、大学の専攻とは異なる進路に進む女子学生が、教員をキャリア形成上の重要な他者と認識している場合が複数例あった。事例の一つは、次章でみるように、職業人として、進路選択に関するより一般的なアドバイスをしていた事例である。もう一つの事例は、以下で見るように、自分が理想とする社会のあり方に関する考え方や、人との関わり方といった生き方、いわゆる「価値観」に関して、教員から大きな影響を受けたことが語られていた事例である。

高校までは大学受験突破を目指した競争をし、そして大学では就職活動という競争を経験し、常に誰かと競い、勝つことを意識し続けてきた田辺さんは、ゼミ選択で出会った大学教員から、多様な他者を受け入れ、認め合うことを学んだことを語ってくれた。少々長いが田辺さんの語りを見てみよう。ここでは、田辺さんが、ゼミの担当教員のF氏に出会う前の自分の考え方・ものとのとらえ方や態度の特徴として語っていると思われるところを一重下線で、F氏の考え方・態度の特徴としてあげているところを破線で示している。

- ・私は結構評価されることとか、人からの評価とかをすごい気に生きてきたんですよ。中学校、高校と進学校に通ってて、勉強（のことも）さっき「すごい嫌いだった」って言ったじゃないですか。途中まではすごい好きだったんですけど、周りがすごいできる子ばかりで途中から諦めちゃって。その時、その学校でできないってレッテルを張られること、順番をつけられて「自分できへん」って言われることなんかをすごい嫌だとか感じる一方で、でも部活とか結果とかあったら「絶対一番取りたい」とか、そういうふう（思う）にすごい嫌な人間だったんです

よ、ホントに。人を頑張ってる子、頑張ってる子とか、その、なんて表現したらいいかわからないんですけど、周りの外部評価とかを気にして生きてきたし、周りの子とかもあの子はどどここの会社に行ってるすごい子とか、どどここの大学に行ったことか自分がコンプレックスを持っている分そうやって人を評価しているところとかあって。

Fさん（ゼミの先生は学生にFさんと呼ぶように言っている）のゼミに入って私、すごいやりたいこととかめっちゃあって、街づくりのこととか。でも実際に顔合わせしてみたら、みんな全然発表の準備とかしてこうへんし、「なんなの、このゼミ」みたいに思ってたけど。でも、Fさんは、そういう子たちの思いも含めてみんなの思いとかを大切にするとか。例えばゼミの準備をやってくるとかやっこないとか、私とかだったら逆に全然自分がやっこなくても、やっこなくてもみんなの前で形だけ表すために中身のないレジュメとか持っていったりするけど、できないこととかもちゃんとみんなと受け止めようってしてくれるっていうか。なんかすごいそういう外部評価というか、すごい難しいんですけど。この子は賞を取ってるとかそういうことじゃなくて、その子の内面のいいところとか全てを認めて受け入れたうえで怒ったり、評価してくれたりするのがすごい。今まで自分が会ってこなかった先生というか。それはM（友人）も同じようなことを言っていて。今、全然うまく言葉に表すことができなくて、消化不良みたいな感じなんですけど。

[私の興味・関心から言うと、Fさんのような熱心な先生と出会ったことによって、影響を受けたことによって何かしら変化があるだろうと、仮説がたてられると思うんですけど、例えば就活という狭い範囲でみると、同じゼミでも田辺さんのようにうまくいく人もいれば、なかなかうまくいかない人もいますよね。それはどうしてなんだろうと思いますか？]

でも、それって、就活が上手くいく、上手くいかないって就活って一種の競争みたいなものに対して、卒にはまった努力をできるかできないかという問題だと思うんですよ、私は。すごく人間的に魅力がある子でも、魅力っていうものを、面接官に受ける形というか面接官に印象が残る形で伝えられた人が多分（選考で）残っているんですよ。だから、例えば今までの私だったら、あの子はどどここの企業に行っているとか、あの子はまだ就活内定もらえてないとか、それぐらいの価値基準で見れなかったけど、Fさんは、ホントに決まってる子とか割といるんですけど、でも、「誰々には誰々のすごい良さがある」っていうことをみんなに常々伝えてくれるから。

結構、就活の話って他のゼミの話とか聞くと、まだ内定もらってないことを言い出しにくいとか、そういう雰囲気とかあるけど、うちのゼミって結構就活中ってFさんがとりあえずゼミの内容っていうのは一旦おいといて、就活はどんなふうに進んでいるって一人一人にちゃんと聞いてくれて、「今、全然決まってるんです」って一人の子が言ったら、「じゃあ、なんで決まってるっていうか、なんでうまくいってないのか、何がしんどいのかちゃんとみんなの前で言ってごらん」、って（Fさんが）言って。みんなできてないところも、自分のダメなところとかも、共有し合ってるから、今もそうやって言えるんやろうなって思うし。Fさん自身がテクニックみたいなものに走って無理に今の就活の競争みたいになってるなかに無理に今適応できないというか、流れに乗れてない子を無理やりはめ込もうというのを絶対してないし、「だめだったらもう1年やっただけいいじゃん」って言うてる。

多分まわりってそうじゃないじゃないですか、やっぱ「決めなあかん」とか、「決まってるしんどい」とか。そういう決めつけをするのが、Fさんは「確かに決まってるのはしんどいことかもしれないけれども、誰々には誰々のすごい良さがちゃんとあるし。みんな、君のダメなと

第5章 “学校” 関連の重要な人々：移行期に頼りにされるコンボイのメンバーたち②

ころもいいところもわかっているよ」、と、みんなに伝えてくれるから、みんな安心感があるやろなって思うし。

私なんか（就活）塾に通って（面接対策をして）、自分が伝えたいこととか自分がこういう風に思っている、こういうふうに来てきたというよりも、思ってきたことが例えば5つあるとしたらこの中で一番面接官に受けるというか、面接官が印象に残るだろうとか、この子を通したいと思うだろうというのを（予想して）優先して言ってきたから、自分の中ではすごい葛藤とかがあって。だから私は自分の気持ちがある意味押し殺して、でも内定が欲しかったから戦略的にやってきたけど。（内定を）もらってない子もそういう風にやったら絶対いけると思うんですよ、でもそれってする必要があるのかなって思ったら必ずしもそうじゃないと思うし、多分Fさんは「そんなこと絶対せんでいい」と言うと思うし。でも、ほんとに自分のゼミの教授をすごいすごいというのもなんかあれですけど、ほんとにめっちゃいい人になって思うんですよ。大好きで、私。

田辺さんの発言からは、ゼミの教員の他者に対する態度が、それまでの自分とは異なる行動や態度の指針、評価として参照されていることがわかる。また、ゼミ選択のための個人面接の後にお礼のメールを送った田辺さんにF先生は、推薦図書や勉強の仕方に関して長文の返信をくれ、それ以降も勉強のことで日常的に相談に乗ってもらっているという。そして、それらのアドバイスが、就職活動で精神的に困難な状況にも支えてくれたと語っている。

- ・ Fさんのメールは保存しているのが5件くらいありますもん。（保存したメールには）就活がしんどい時とかもすごい助けてもらって。改めて電話をすとか改めて話をしてもらおうとかじゃなくても。

就職活動を終えた田辺さんは、インタビュー当時は任意提出の卒業論文の執筆に向けて、被差別地域の子どものための調査をしていた。そのきっかけは、被差別地域を研究のフィールドとしているゼミ先生Fさんの調査に、他のゼミ生とともに、ゼミ活動とは別途に任意の活動として参加をしたことによる。

田辺さんの事例からは、ゼミの教員の考えや行動が、就職活動に直接的な影響を及ぼしてはなくても、生き方や他者との関わり方への態度変容をもたらしたことがみてとれる。

第6章 学校外のメンターたち

：アルバイト・インターンシップ・ボランティア活動での出会い

本研究では、高校の最終学年の頃から振り返ってもらい、大学進学を決めた理由や志望大学・専攻を選んだ理由から、インタビューをした当時までのキャリアに関わる変遷と、他者とのかわりをたずねている。その中で、以下はアルバイト先やインターンシップ先、あるいはボランティアの活動を通じて関わった他者との出会いで、大学卒業後に就きたい職業が決まり将来展望が明確になった事例、働くことについて自分なりの考えが明確になった事例、他者との出会いによって転機を迎えた事例をみていくことにしたい。

以下の事例で登場する女子学生たちにとって重要な他者たちは、いずれもアルバイト、インターンシップ、ボランティアといった、キャンパスから離れた場で、彼女たちが出会った大人たちである。彼女・彼らは、雇い主であったり、先輩・同僚であったりという役割上のなかで、女子学生たちに指導し、あるときは励まし、おしゃべりをし、といった関係性をもち、彼女たちのキャリア探索に影響を及ぼしている。まさに、経験の浅い女子学生たちに先行者として与える人＝メンターとして接していることをみることができよう。

第1節 アルバイト・インターンシップ先での出会い

【事例1】ロールモデル、コーチとしての先輩と店長

高校時の進路選択の時から一貫してサービス業界で働きたいと思っている雨宮さんは、大学1年生の時から大学の先生に紹介してもらったホテルのレストランで働いている。そこで働いていた女性と上司が、雨宮さんの職業人としての目標になっている。以下の語りからは、雨宮さんがアルバイト先の先輩とマネージャーを自覚的にロールモデルとして認識し、彼らがある場面、場面でどのようなふるまいや行動をとるかを観察し、見習おうとしている様子がわかる。

雨宮さんのアルバイト先の女性の先輩は、アルバイトを始めた当初から、仕事のやり方、仕事仲間との付き合い方等を手本にしている人である。先輩が退職してからも雨宮さんは自宅を訪ねて、仕事について相談をしている。

- ・今はもう辞めてて、さっき結婚されたっていう方がすごくほんとにできる人やったんです。仕事もなんですけど、人に対する配慮の仕方がすごくうまい人で、例えば、違う人に「違うやろ」ってすごく厳しく言われて、しゅんとなってる時に、その人が「こういうこともあるし、まあ大丈夫やし、まあ気にせんでええよ」とか。すごいなんかよく見てる人やったんです。ホール内をくまなくというか。その方は社員さんではなく派遣さんだったんですけど、すごく仕事ができるということを買われて常備の派遣の方になっていて、すごいお給料ももらってはったはずです。一番多分もらってはったと思います。社員さんよりも多分もらってはったと思います。すごいできる人やったんです。私こんなふうになりたいなっていうのを最初に、ホテルに入った時に最初に思わせてくれた人でした。こんなふうになんか仕事の面もやし、すべてが完璧、たまに「あ、失敗した」って言ってましたけど、そんな失敗も許せるぐらい。すごいお客様からも慕われてい

第6章 学校外のメンターたち：アルバイト・インターンシップ・ボランティア活動での出会い

て、社員やみんなからも慕われてて。結構ホテル業って、レストランは特になんですけど、キッチンとサービスの方2極化するんです、結構。サービスはサービスで仲良くてキッチンはキッチンで仲良くて、ここつながりがすごく悪かったりするんですけど、すごくそれをうまくつないでいたんですよ。キッチンがあういうことを言っているけどまあそれはそういう意見やし、まああなたたちもこういう意見やろうし、っていうふうに、すごい、つないでいた人だったんで。そういうところを見るとかっこよすぎて。

今もおうちにちょこちょこ遊びに行ったりして、お子さんが二人めが生まれて赤ちゃん見に行ってもいいですかと言って、訪ねてちょこちょこ相談もしている。「今どういう状態なん」って聞かれたら、今こういう状態なんですよねぇ。どう思いますか」みたいな（報告をする）。「ああ、そうか、大変やな」って（いう返答がある）。

また、雨宮さんにとって、アルバイト先のマネージャー（男性）も仕事に関するロールモデルの一人である。目指す職業キャリアが明確な雨宮さんは、上司はどのようにふるまうべきかをマネージャーから学んでいる。

・信頼してたのがマネージャーです。すごい怒られるんです。怒られるんですけど、それでもすごい、ついていきたいって思えるぐらいの人やったんで。今も離れるのがなんかすごい寂しいなって思うぐらい。

やっぱり上の人はこうであるべきなんやろうなっていうぐらい、しっかりされている方で。例えばみんながパニックって（パニックになって）いた時も一人だけ冷静で、指示したり、あとは、どうしたらもう少し円滑に人間関係ができるかとか、考えてないようで、すごく深く考えている方だったんで。

一人一人を見て、この子は人の前では怒ったらあかん（という相手には）、呼び出して、軽くちょっと怒ったりとか、すごいそういう配慮もできる人やったんで。自分が上司になった時にはこんなふうに指導できたらなって思いますね。すごいなんか厳しい人だったんです。ほんとに。今も厳しいんですけど、楽しい人で、お茶目っ気のある人で、怒るときはすごい怒るみたいな（35-6歳くらいの男性）。目標というか、考えが大きい過ぎるな一っていうくらいしっかりされた方なので、すごい触発されています。

事例1が、自分が目指している業界でアルバイトをし、自ら積極的にロールモデルを見つけ出しているのに対して、以下の2つの事例は、アルバイト先での他者との出会いが具体的な職業の興味につながった事例である。

【事例2】承認する店長と客

野口さんは、大学入学後に下宿先と大学の間地点にある居酒屋でアルバイトを始めた。野口さんによれば、働きぶりを評価してくれる店長やお客たちの存在が働く意欲を高めているという。さらに、アルバイト先の店では、専門のコンサルタントによる研修が実施され、業務内容の理解を深めたり、モチベーションをあげる方法を学んだりしている。

野口さんは、店長やお客たちからの応援を受けて、さらに働く際に創意工夫をしている様子を以下のように語ってくれた。

- ・その店長がすごくほめてくれる店長で、なんか、あの一、調子にのってしまったというか、すごくうれしくて、うれしくてほめてくれることが、自分に何かできへんかなーと思って（いろいろ考えて）やってたら、お客さんもすごくほめてくれたりとか。

【どういことをされたらほめてくれたんですか？】

んー、そうですね。私は、やっぱ、できることって限られてるので、やっぱ、サービスとかってアルバイトの分際でできないじゃないですか。なんで、こうお客さんをよく見るようにして、例えば、お魚を売りしている居酒屋なんですけど、焼き魚とかやったら骨とか出すじゃないですか、だから、焼き魚のあとはおしほりを持っていくとか、お醤油とかこぼして拭いてはんの見たら絶対もうすぐに行くとか。汚れてはるんで、気が利くなっていう接客っていうか、そういうふうにあれしたりとか、一言を、まーおしほりが大半なんですけど、こういう寒い時期やったら、別にお茶とか頼んだらおしほり来るじゃないですか、でもそこで一言、「外寒いから手だけでもあったまって言ってください」とかそういうふう一言、なんというかコミュニケーションとるようにしてるんですよ。

そういうふうにお客さんとも話せるようになったら、常連さんが多いんで、話せるようになったらすごいなんか、楽しいなみたいな。で、勉強会とかあってそれがコンサルの方が来てくださって、その、食についてというか、サービス業についての勉強というかそんなとかするんですけど、モチベーションアップの仕方とか。で、わ、すごいなーと思って。なんか、楽しいなみたいなとか、なんか、頑張ろうみたいな、プラスのイメージと言うか、それがまた素敵だなーと思って。

アルバイト先での仕事を通じ、仕事に対する興味・関心が膨らんだ野口さんは、調理学校を卒業し、実習先の割烹での仕事の経験もある姉からも知識を得て居酒屋のサービスの質、仕事の向上を図っている。

- ・（姉は）細かいこととかを教えてください。焼き魚の話をお話してもらったのもお姉ちゃんからやし、なんかそういうの、「焼き魚食べたら骨出るやろー」みたいな。やから、「割烹ってそういう細かいところが大切だから、そういう時おしほりもってたらいいよ」って言われて。あ、そっかーみたいな。で、「おしほりも温かいおしほりがいいよー」みたいな、「魚の油は取りにくいから温かいほうじゃなきゃあかんでー」とか。そういうこととか教えてください。

このアルバイトの経験をもとに、野口さんは全国規模で居酒屋を展開している企業に入社している。全国規模で居酒屋を展開しているその企業は、現在縮小傾向にある第1次産業の振興も視野に入れた経営方針をとっている。家業が第1次産業の商品の卸売業である野口さんは、飲食業界というサービス業だけでなく、第1次産業のどちらも成長して行く経営手法を学びたい、そして父母や兄の役に立ちたい、さらにはゆくゆくは地元にも貢献したいと抱負を語ってくれた。

【事例3】同僚・先輩や社長：予期せぬロールモデルたちとの出会い

次の事例は事例2と同様に、通りすがりの店先で偶然アルバイト募集の張り紙を見てアルバイトを始めたことがきっかけになり、職業探索活動に急展開が見られた事例で、小学校から陸上に打ち込んでいたものの、けがをきっかけに新たなキャリア展望を模索している藤原さんの事例である。

居酒屋でアルバイトを経験した藤原さんは、将来的に店を持ちたい夢の実現に向けて日々の仕

■ 第6章 学校外のメンターたち：アルバイト・インターンシップ・ボランティア活動での出会い

事に取り組んでいる先輩たちや、店を切り盛りし、従業員を見守る社長との関わりの中で、自分が将来やりたいことが見えてきている。

・ちょうど私、高校3年生の（親に）塾に入れられてあたりに勝手にアルバイトをしたんですよ。今もやってるんですけど。居酒屋、個人営業ではある居酒屋、自営業の居酒屋で、勝手に、学校の帰り道に自転車で通ったら募集してたんで、（直接）行って、「バイトさせてください」って言って。

[いつくらいですか？]

高3の10月ですね。勝手に、親にも相談せずに行って。（中略）そこでバイトするようになって、すごいいい人たちばかりで、将来自分たちも店を持ちたいと（思っている）みたいな人たちがいっぱい調理してはって。関西では名前は知れたところなんですけど。ホールスタッフしかアルバイトはしてなくてちゃんと料理は社員さんがしてるんですけど。なんか、すごい、みんながお店をよくしようとしてはるところで。私もそこにに入れてもらって。みんなで、なんか毎日バイト終わってからも普通に1時間2時間ずっとみんなでしゃべって、どうしたらよかったとか。

[フォーマルなミーティングがあるんですか？それともインフォーマルな？]

自発的なんです。すごい楽しくってそれが。すごい、私、そこで自分の転機を迎えたって今になって思うんですけど。そこに行ってへんかったら今どうしてたんだろうってぐらいな。すごい、なんかもうこんな世界があるんだって。バンドしてた時の何倍も思って、みんなにいろんなことを教えてもらって、怒られたりもするし。

[ホールスタッフの人数は大体どれくらいですか？]

ホールスタッフは5人とかだったのかな。でも週6営業でその日は2、3人入るんで1回に。

[しゃべるのは何人くらいですか？]

その2、3人で、まかないを最後に食べるんですけど。

[まかないを食べながら？]

はい、みんながいろいろしゃべって。みんながその居酒屋が好きで、バイト入ってない人も食べにくるみたいな感じの。昨日働いて明日働くのに今日食べにきて、みたいな。

[どんな人たちなんですか？大学生とか、フリーターとか？]

ばらばらですね。フリーターと大学生とですね、社会人はいなかったんですけど。

[キッチンで働いているのが板前さんとそれから？]

板前さんと修業している方で、それぞれみんながいつか自分の店を（始めたい）と思っている人たちが働いてて。社長さんが自分の仲間と店を持ちたいみたいって始めたって聞いてて。

[社長さんは皆さんと時々話をしたりするんですか？]

社長さんはずっと現場にいたい人なんで、ずっと働いてはって、ホールのこともするし。

[男性ですか？]

男性です。まかない食べてしゃべってたら、すーっと現れてちょっと遠くで聞きながら、そんなに怒鳴ったりとか（何か）言いに来る人ではないんですけど、ちょっと遠くで作業しながら多分聞いていて、そのうちの一番ドンというかバイトで偉い人に「何言ってたの？」みたいなことを聞いてるらしいんですね。あまりそれも表ざたにはならないんですけど。すごい店のことで頭がいっぱいな社長さんで。すごいそれが楽しかって。で、結構それも親は反対なんですけど。いつからなんかな、わからないんですけど、私もこんなふうに分も何かを持ちたいと思うようにそこで思ってて、そこで高3の大学に入るか（どうか）悩んでいる時にそういうお店に入って、自分

もいつかこんなお店を持てたらすごい幸せだと思って。すごいタイミングですね。

アルバイト先での店長やそこで働く仲間たちといったロール・モデルに出会った藤原さんは、その後、大学の入学試験を控えどの大学を目標にするか迷っていた時に、カフェ等の飲食業界の起業に向けた全学部対象の講座がある大学を知り、その大学への進学を決めた。そして、進学した大学では、上記の講座を受講し経営学を学び、アルバイトは4年（インタビュー時）まで続け、夏に1週間、地域振興を兼ねたカフェを開くという経験もしている。将来的には自分の店を持ちたいと考えている。

【事例4】店長夫妻に対する憧れから職業の関心へのシフト

第4章の【事例1】でも登場した、幼少期から武道を習い、公務員の道に進んだ野口さんが、将来的に手掛けたいと思っているパン屋という職業とは、偶然の出会いである。野口さんは、地域でも評判の高いパンの美味しさだけではなく、サラリーマン生活を経てパン職人兼オーナーになった店主夫妻の人間性が、パン屋という職業への興味を抱き高めたという話をしてくれた。それゆえ、アルバイトでサンドイッチの製造を担当するときには、早朝4時半に起床し、5時から8時まで仕事をするが、全く苦痛に感じないと語る。

パン屋夫妻の人柄が仕事への興味を膨らませるまさに酵母のような役目を果たし、野口さんにパン屋という職業との出会いをもたらしている。

- ・仕事と思ってるし、嫌々やってるわけではないので自然なこととして行ける。仕事場の環境もすごいと思うし。

【それはどういう感じで？】

店長とか、店長の奥さんとか人間的にすごい人ですよ。すごい人だから、すごいなんか、アットホームな感じで。それがすごく楽しいと思える環境なんですよ。だからすごいなと思って、それにだんだん憧れちゃって。なんで、パン屋さんのお嫁さんになるのが夢って感じだったんですよ、最初は。パン屋さんに嫁ぎたいみたいな、感じの夢があって。ホントすごい憧れてしまっ

【いつぐらいから？】

もう2年生とか3年生とか、先のことを考え始めた時に、めっちゃいいなあって、そう思ってから、いいな、いいな、いいなあって思い始めちゃって。その頃からは、今まではめっちゃ結婚願望あったんですよ、あったんですけど、なくなっちゃって。なんかこんなことしたいな、あんなことしたいなって思い始めたうちの中に、もし相手と一緒にいて、その相手がそういうふうなのをしてる人だと多分なおいんだろうけど、そういう人はまず多分見つからんだろうというのが多分あって、そしたら、まず（父の期待に応じて就職をして）自分でお金をためて、もう1回戻ってパン屋さんに、修行して、って計算してたら、あれ、結婚する時期逃すじゃんって思って、あら、結婚する時期逃すなーみたいなになっちゃって、そしてあらあらって思って、そうなったら、仕事に生きるのかな、私は。そういう人がいたらいいんですけど、そういう仕事が好きになって思えたのが多分そういう雰囲気だし。多分そういう雰囲気がよくなかったら楽しくない、となっちゃってたと思うんですけど。多分どこにいてもそうだと思うんですけど、人によって多分すごい、上に立つとか、人によってすごい、環境によってむっちゃ変わるなって思って。それは多分部活とかも何にしても一緒だと思うんですよ。上に立つ人によ

て、その人だけじゃなくて周りのモチベーションってすごい変わってくるし、逆に言ってしまうばそれで、それが結構大きいと思うんですよ。自分のモチベーションだけでは、多分、部活動にしても何にしてもそうだけど、勉強にしてもそうだけど、その勉強が好きじゃなくてもこの先生が好きだったら楽しくなるってなると思うし、そういう風に思える人に出会えたというのは、すごいいいなと思うし。

[店長はどんな生き方をされてきた人なんですか？]

店長は1回サラリーマンをして、で、パン屋さんで修行して、でパン屋さんをオープンさせたんですよ。奥さんはサンドイッチを作っていて、いつも。奥さんにそれを教えてもらったりとかしてて。

[望月さんはどういったところがモチベーションがあがってくるんだと思いますか？]

多分みんなも言うんですけどモチベーションというのはみんな、すごい上の人とかも言っていたのは、「このバイトをしてたら他のバイトはやっていけないよ」っていうぐらいだったんですよ。なんか店長には人生相談じゃないけど、相談もするし、恋愛の話とか全部知ってるし、店長は。

[おいくつぐらいの人ですか？]

店長は、多分42（才）とかくらいで、多分奥さんもそれくらいだと思うんですけど。恋愛の話は全部するし、この先どうしたいとかいう話もするし、そういう話を全部するんですよ、毎日会って。そういう話をしたりもするし、恋愛で悩んでいる時とかも適切なアドバイスというかもしてくるし。

[勤務時間の中で話すんですか？]

お店がすごい小っちゃいんですよ。お店が小っちゃいから夕方とかになるとお客さんがちらほらになってきたりとか、夕方になった時は店長とレジだけなんですよ、5時過ぎたりとかしたら。なんで、そういう時とかに片づけとかパン並べたりとかしながら、こんなあったんですよ、あんなあったんですよっていう話をしてるから、と、しょうもない話をしながら楽しいという感じなんですけど。

【事例5】同僚・上司の仕事の仕方：職場の人間関係の重要さへの気づき

仕事をするということが人間関係に大きく依存しているということを、細江さんはインターンシップの経験を通して学んだ。大学から紹介された出版会社での2週間のインターンシップは、仕事に対する興味の向上はもたらさなかったが、他の人たちと共に仕事をするということ、仕事自体が、たとえ自分があまり興味を抱かないものであっても、共に働く人たちとの関わりあいによって、苦痛ではないということ学んだと語っている。

- ・そこで、初めての職業体験だったんで、あの成人してからの初めてだったので、感じたことは、やっぱり職場の人間関係が一番大切やなと思いました。

[2週間で？]

2週間で思いました。入って1日目はそうは思わなかったんですけど、2日目3日目となると、出版社って私は合っていないんじゃないかと、2日とか3日で思う事じゃないんですけど、ああ、こんなのが毎日続くと思ったらあんまりやな、と思って。

[どういうところが？]

私、身体を動かしてするのがいいんですけど。（中略）なんかしーんとしてて、文字見たりとか、電話の応対とかもしたんですけど、やっぱり静かな分、聞こえてしまうし、すごい緊張したの

と、なんか、とりあえずしーんとしてて、パソコン打っている音しか聞こえないとか、そういうのがなんか、うーっ（辛い）と思ってしまって。で、お昼休みとかになると結構、みんないろんな話してくれてすごい楽しかったんです。人間関係がすごくよかったですよ。みんな研修とかインターンシップやし、そういう感じにしてくれたと思うんですけど。（中略）なんかちょっとしんどいなと思って、まあ行けたのは、なんか、（男性1人女性5-6人の職場で）その人たちがすごいいい人だったし、お昼休みとかすごい楽しかったの。

【ご飯とか一緒に食べたんだ？】

はい、いまだに学校にも結構いらしゃるとかあることがあって、会ったら「わあ、元気？」って話しかけてくれて、すごいいい人たちでした。（中略）多分、人やなーと思います。仕事どうこうじゃなくて、多分。仕事が向いてないと思って続けられるっていうのは、多分、人やと思ったんで。それで気づきました。

このような経験から就職活動中は、採用窓口となる人事部のスタッフの人柄や社員同士の関係に注目したという。そして、彼女が選択した内定先の企業の印象も、人事部スタッフの人間関係が良好であるとのことである。

【事例6】カフェのオーナー夫妻からの指導：仕事への向き合い方を学ぶ

責任をもって仕事をするということを、秋永さんはアルバイト先のカフェの30代後半のオーナー夫妻から学んだと自己分析をしている。秋永さんはカフェでのアルバイトの前にスーパーでアルバイトをしていた経験があるが、そこでは特に何も言われなかったのに対し、カフェでは、仕事について細かく指導された。それには、大学のサークル活動の先輩たちを良く知る夫妻が、秋永さんが仕事に就いてから責任をもって仕事にあたってほしい、アルバイトでの仕事の経験を、実際の仕事に生かして欲しいとの思いがあったからだと話してくれた。

秋永さんは、夫妻が共に補うような形で、仕事への取り組み方を教えてくれた、そして、時に厳しい指導も職業生活への移行期にある自分にとって重要な経験であると認識している。

- ・ 働くのって大変だなと思ったのは、やっぱりカフェに入ってからで、すごい、その方（オーナーの妻）が気を遣う人、お客さんとかお店のことに対して。やっぱり自分の店というのもあると思うんですけど。「気づきなさいとか、気を遣いなさい」とか、細かいことをいっぱい言われるんですよ。（中略）てきぱき動かれる方なんです。私、すごいのんびりする方なので、まず「行動が遅い」と言われ、「気が利かない」とも言われ、本当にずばずば言われるんです。でも、「やっぱり社会に出てからって本当に大変なことよ」というふうにも言われて。

オーナー夫妻は、以前から顔見知りの秋永さんに対して、仕事に就く前に伝えたい思いがあったようである。仕事に対する思いや、それをなぜ秋永さんに伝えたいと思っているのかを、オーナー夫妻は折に触れ秋永さんに丁寧に説明をしている。そして、秋永さんも、仕事に対して厳しいオーナー夫妻が自分の成長を支援し、見守ってくれている人たちだと認識している。

- ・ [いつからでしたっけ？ 4回生の。]

夏からです。バイトを始めたのは。（中略）私が働いているスーパーでちょっと買い物をしていったりとかしてたので、「（私が）あそこにも駄目だと思ったから」みたいと言われて、

「ここでちょっとしっかりしてほしいなと思って、たまたまバイトさんがみんな急に辞めちゃって、私がスーパーでバイトをしていたのを知ってたし、ボランティアで忙しくしてたのを知ってたけど、ちょっとだけ手伝ってくれる？みたいな感じで。」

[じゃ、〇〇サークルのどなたかのお知り合い？]

そうなんです。〇〇研の先輩がそのカフェで演奏とかをして、そのときに「ライブ見においで」と言われて、「そのカフェのカレーがおいしいから」みたいな感じで行って、そこから知り合って。友達を連れていったりしてしゃべるようになった関係の人なんですけど、その人（オーナーの妻）に本当に言われて、「仕事、できんわ」（と）。もう行きたくないとかいうふうに思ったりとかするんですけど、で、細かいことを言うのはこの人（妻）なんですけど、いつも見守ってくれてるのがオーナーさんで、でも、がつんと言うときは言う人（オーナーさん）で。」

- ・ 年末に、本当に私、ぼーっとしてて、本当に自分でも考えたら何やってたんだろうと思う時間帯とか、その入った日があって、そのときに終わった後、そのオーナー、マスターから「ちょっと話がある」って言われて。「今日の仕事の出来、何点や？」みたいなこととか言われて。「その棚を拭いといて、ちょっと油飛んでるところを拭いといて。」って言われたときに、アルコールを持たされて、小さい布と。私、布に吹きかけてばーっと拭いてたんですけど、きれいにならんと思いつつ見ながら見て、でも、それで終わってたんですよ。しかも、それですごい長い時間をかけて拭いて。「ここしか終わってないんです」って言ったら、「もう2時間たったのにそこだけ？」（と）。いろいろやりながらだったんですけど、「どうやって拭いてたん？」と言われて、「ここにかけてこうやって」って言ったら、「こっちにかけて拭いたらすぐやで」と。「それ、分からなかったら、聞かんと。」というふうになって。その日、お説教とか、がーっと怒るんじゃないくて、「時給を払ってるということとか、やっぱりお店のことを考えて仕事をしてほしい」とか、「何が一番大事かというのを順序立てて考えてほしいし、仕事ってその人にとって何がいいかを考えてすることだよな」という話とか、「お客さんに、まずはやっぱりお客さんが一番で、その後にお店のことで一緒に頑張っていこうというふうに思うことが大事だし、そういうのを話されたときに、はっとして、全然できてないわと思ったりとか。」

すごいそれまで手伝いに来てというふうに言われた感覚で行って、私が望んでそのカフェで働いているわけじゃなくてという感じがたぶんどこかに絶対あって、

（中略）

「仕事を頑張ってるし、時給を上げたいとか、そういう思いになってもらえるような仕事をせんとあかんのじゃないの」というふうに言われたりとか、「仕事が始まったら、普通にわーっと仕事をしてても、絶対お給料はもらえるし、そういう人っていっぱいいるんだよね」という話もして、「でも、そうはなってほしくなくて」というふうに言われて、「ちゃんと目的を持って」とか、私が福祉の方に行くというのを知ってるから、「福祉の仕事やったら、利用者さんが何を求めとるかとか、そういうことにしっかり向き合っていくかんといかんし」とか。その方、もともと営業をされてた方で、1回、病気で仕事を辞められて、そういうのを経験したけど、やっぱりばりばりの営業マンでやっているとときに大きなプロジェクトを任されたときとかもあって、「そういうときにちゃんとコミュニケーション、人と取って、何が大切かといったら、2人で何かを売ろうと思ったときに、どういうふうに相手を作ったか、こういう思いがあって作られたものというのを広めていかんといかんというので、やっぱりすごい密にちゃんと話し合ったりとか、考えなさい」とも言われて。」

第1節 アルバイト・インターンシップ先での出会い

(中略)「アルバイトも仕事も、アルバイトだからいいやじゃなくて、1つの仕事としてここでは働いてほしいし、また社会に出てからというのはまた違うだろうけど、絶対ためになるから」というふうには言われてたし、その時やっぱりしっかりしようというふうに思ったかな。仕事に対して真剣にならんとというふうには思ったきっかけとか、やっぱりそれからは、言われることも分かる。もし2人で同時に入ることがあるなら、その人がこれをやっているなら自分は何ができるかを考えたりとか、お客さんがどうしてほしいとか、そのお店を上手に回すには、席も案内するのも1人のお客さんだったらカウンターとか、そういうのを考えたりとか、全然今もできてないけど、そうするように自分も努力しようというふうに思えるようになったとか。

オーナー夫妻に直接インタビューをしていないため、推測の域を出るものではないが、アルバイト先のオーナー夫妻が秋永さんに対して単なるアルバイトの学生として接しているのではなく、経験の浅い若者を育てようと思いをもち関わりをもっている、まさにメンターとして振舞っている事例であるといえよう。

そして、「てきぱき動く人」と秋永さんに評価されているように、実際に行動をして見本を示すことと、具体的な役割を繰り返し説明し、またその背景にある思いについても丁寧にそれを説明することによって、秋永さんの信頼を得、言葉の真意が伝わり、秋永さんの仕事全般に対するより深い気づきにつながっているとみることができるだろう。

第2節 ボランティア活動での出会い

大学時代の中盤以降は、就職活動を中心にしながら、思いついたことをいろいろ挑戦しようと思った下村さんは、ボランティア先の児童館で食育教育をしている年配の女性に出会った。大学生になって一人暮らしをしている下村さんの食生活は偏っていて、体調もすぐれなかったが、彼女との出会いによって体調も改善してきている。

地域児童館でのボランティア活動を通して公務員をめざし、公務員試験を突破した下村さんは、就職後、仕事以外でも食育教育等、地域活動にも力を入れていきたいと考えている。その将来展望の形成には、ボランティア先で出会ったこの食育教育をしている年配の女性の生き方がお手本となっている。

これまでみてきたように、アルバイトや、インターンシップ、ボランティア先で、インタビューをした女子大生たちの何人かは、自分の職業を選択する際の指標を見つけたり、将来展望を形成するヒントを得ていた。その際に重要なポイントとなるのが、そこで彼女たちと関わった大人たちの存在である。

「大人たち」は、仕事や活動を通して、仕事のやり方を教えてくれるばかりか、あるときは女子大生たちを承認し、あるときは、生き方の見本を見せるロールモデルになっていた。そこでの「大人たち」は、第2章で見たところの「メンター」の役割を担って、女子大生たちの成長を支援していたのである。

一方で、このような大人たちとの出会いはアルバイトや、インターンシップ、ボランティア先に限定されていたのが特筆すべき点であろう。32サンプルという少ない事例で一般化することはもちろんできないが、この32サンプルという限定つきで確認されたことは以下の点である。「教

■ 第6章 学校外のメンターたち：アルバイト・インターンシップ・ボランティア活動での出会い

育」と「職業生活」が分断された生活圏に生きている現代の若者たちを対象に調査した本研究において、大学、アルバイト、インターンシップ、ボランティア以外の生活圏で彼女たちの生き方に影響をもたらす「与える大人たち」とのかかわりは見ることはできなかった。

第7章 教職員の連携による

キャリア形成支援というモデル

本研究の調査対象者にはL大学の学生が7名含まれる。その中には、町の診療所、中小・大手企業に就職が内定した人、さらに専門学校への進学を決めた人が含まれるが、全ての人が「大学に満足」している。

L大学A学部は、大学の前身となる女学校の歴史は100年を超え、また古くからある短期大学では関西地域で比較的名の知れたところだが、インタビュー協力者たちの在籍する学部は創設からわずかで、知名度は低く、入学難易度も高くない。調査協力者においても大学進学時に進学情報誌等で初めて知った、担任や進学指導の先生から進められるまで存在を知らなかったという人が大半を占めた。

L大学について満足度を高めている理由としてすべての人が先生との距離が近くアットホームな雰囲気であることを挙げている。一学年の定員数が90名という小規模大学である。

以下では、L大学の人たちの語りから、どのようなことがキャリア形成支援に有効であるのかを検討していく。

第1節 手厚い就職支援：内外にわたる教職員の連携

学生全員が就職課のスタッフ山形さん（仮名、先生と呼ぶ人もいる）に世話になっており、インタビューをした全員から彼女の名前が出てきた。女子学生たちの証言によれば、山形さんは学生の名前をほぼ全員憶えており、志望業種等も把握しているという（熱い指導に少々恐れられてもいるようでもある）。

- ・ 山形さんは一人一人の名前も顔もちゃんと覚えていて、どういう子かというのをわかったうえで、エントリーシートとか自己紹介文とかにもすごい作成に手伝ってくれたので、山形さんはもうホント神様みたいです。山形さんが「こんな会社があるんやけど、こういうところがすごい合ってると思って探してきたんやけどどう？」とか。結構そういうこともしてくれました。
- ・ 山形さんは、就活で一番お世話になった人ですね。ただなんかすごくお世話になり過ぎて、落ちたとか言えなくて、ここがだめだったんですっていうのがすごく苦になるくらい。ここはいけましたっていうとすごく喜んでくれはったりして。すごくいい人なんですけど、怒るときは怒らる人なんですよ。でも私はそんなに怒られたことがなくて、まわりは結構みんなすごい「こんなんあかん」とか、「なんで来れへんの」とか（と怒られていて）、私は全然怒られたことがなくて、私にはすごくお姉さんの的というか。

山形さんのアドバイスについて、個別対応だけではなく、全体説明会でのアドバイスも女子学生たちに受け入れられているところが、信頼の厚さを物語っている。

第7章 教職員の連携によるキャリア形成支援というモデル

- ・就活担当の人がいらっしゃるんですけど。個別に面接とか相談には行ってないんですけど。山形先生は「学内の全体就職セミナーで1月には10個は予約しとけ」って何度も言ってはって。(先生が) 10っていうなら、15はしとこうと思って (企業説明会の予約を入れた)。
- ・山形先生はその道のプロやから、自分がほんまにどうしたらいいかわからん時だけ行くという感じだったんですけど。まあ、怖かったし、できるだけ行きたくなかったんですけど、たまに行かないと「あの人がどうなってるの?」と周りから言われるし。

以下の語りからみえてくることは、就職支援を専門職の山形先生だけが行うのではなく、とゼミの教員が連携をして行っていることである。就職活動がうまくいかず就職をあきらめて、福祉関連の資格取得を目指そうと考えていた中村さんに対して、山形さんから個別に就職の紹介をし、さらには、ゼミの指導教員とともに相談・支援にのっている。

- ・(就職活動がうまくいかず就職をあきらめてまず、福祉の資格取得を目指そうと考えていた時に) えーと、山形さんから「求人があるから学校おいで」という連絡が来たんですけど

[直接?]

メールできました。で、ちょっと怖かったんですよ、山形さんは怖いんですよ、今は怖くないですけど、当時は怖かって。決まってないし、怖かったんですけど、自分の中でも資格(を取ろう)って大体決まっていたんで、(メールを)送ったんです。正直に、「資格を取ろうと思ってるんで就職をやめようと思っています」というのを言ったら、次のゼミの時にN先生から「ちょっと話そう」みたいな、になって、「山形さんと3人で話そう」みたいな感じで。もう怖くて怖くて、今まで世話してあげたのになんなんって言われる感じやと思ってたんですよ。

けど別にそんなこともなく、「客員教授の先生が知り合いのいる病院に求人として一つあるからどう」みたいな感じで言うてくれて。でもめっちゃ悩んだんですよ、自分の中ではもう決まってるし。

[どういう仕事だったんですか?]

事務です。どうしようかなって思って、N先生から「普通の会社を受けるよりは受かりやすい、一応紹介でもあるので、コネまではいかないですけど、一応紹介やからそんなに今までよりは受かりやすいよ」と言われて、で、悩んで「親と相談します」と言ったら家に帰って親と相談して。

その後自宅に戻って両親に相談をした中村さんは、資格試験受験のための勉強(進学)を諦め、先生たちから勧めのあった採用試験を受けることに決めた。その決断の後押しになったのが、ゼミの担当教員のアドバイスだと回答をしている。

- ・で、結論は受けてみよう。これもなにかの縁かもしれないし、確実に受かるってことも絶対ないので、まあ受かったらがんばったらいし、落ちたら落ちたでもう資格をとれっていうことなんじゃないかっていうのを思って、受けようとなって山形さんとN先生に連絡して。

[なんか決め手はあったんですか最後の決断をするときに?]

N先生のアドバイスですね。(福祉の仕事は)3-40(歳)でもできるっていう。で、受けて、そこで内定をもらいました。

一端資格試験への挑戦をあきらめた中村さんだったが、採用が決まった後に、中村さんが勤務することになった病院では、事務と利用者との対応も含む業務の2種類があることと、本人が望めば勤務をしながら福祉職の資格も取れることがわかり、大変喜んでいと語ってくれた。

上記の事例では、女子大生にもたらされた就職情報が、L大学の専任教員ではなく、客員教授が持ち込んでくれたものという点も興味深い。客員教員とL大学との関係性については不明であるが、L大学と客員教員との関係が非常によいことが推察される。

さらに、以下の事例からは、大学内の教職員の連携のよさも伝わってくる。

岡田さんの両親が学園祭で来校した時に、上述の山形さんとは別のスタッフが名刺を差し出し「娘さんに困ったことがあったら訪ねてくるよう伝えてください」と両親に話したことを、岡田さんは大学への信頼が高まった、心に残ったエピソードとして語っている。当時、進路の決まっていなかった岡田さんのことを心配してのことによるのだそうだ。職員の行動からは、大学教職員間が情報を共有し、連携をし、学生の支援をして行っていこうとする様子がみてとれる。さらに、そのことが、当該職員と特段親しい関係とはみられない学生にも、その思いが伝わり、職員そして大学全体に対する信頼感を向上させていることが印象的である。

第2節 アットホームな学びの場

雨宮さんはゼミの先生との距離の近さに満足をしている。語りの中からは、教員が、困難な就職活動を乗り切るためのサポーターの一員、コンボイの一員として認識されていることがよみとれる。

- ・ゼミの今の先生も、励みと言うか、心配性の先生なんでいろいろ相談はしたりして。男性で今60(歳)、この間還暦になったんで、先生も会うたびに「ちょっと部屋来い、話聞いたる」って、「今どうやねん」って言われて。「今は研修に行ってます」って言ったら「そうか、あの会社はなっ」て。すごい、なんか、硬い先生なんですけど、人情味があるというか、人間味があるというか。

荒川さんも教員との距離が近いことに満足している。2年までのゼミの担当の先生とは先生が大学を辞めた以降もメール等で連絡をとっている。たまに艶笑話的な内容の時もあるが、ある業界の最前線で働く先生の話は、時に、社会の見方も変えてくれるほど非常におもしろいので、注意深く聞いているのだという。企業研究や業界研究する際に先生の話が役立っている。「男女の関係とかでもマーケティングと一緒に」「結局、男女の関係でもニーズがあって、タイミングとかいろいろなんで、結局、男女の関係と一緒になんだよ」という話が印象的だと語ってくれた。

荒川さんは、この元教員以外にも元ゼミの先生たちとの関係も良好である。ある教員からは古い原稿のデータ入力業務を依頼してもらい、インタビュー当時「バイト代たくさんくださるんで」たまってお金で卒業旅行を計画中とのことだった。

また、先に登場した、学祭で両親に自ら名刺を渡して困ったときには連絡をするようにと話した職員の逸話を語ってくれた岡田さんは、教職員と学生が少人数の家庭的な雰囲気の中で社会性を学べたことに大変満足している。岡田さんは、比較的自由奔放に過ごしてきて協調性がないま

第7章 教職員の連携によるキャリア形成支援というモデル

ま大学に入学してきたと自己分析をしているのだが、大学で出会った友人や教職員が愛情を持って叱ってくれたことで、協調性のある自分へと変容したと話してくれた。そして、それが特別なプログラムが設けられているからではなく、小規模で、構成員の顔と名前が一致しており、面倒見がよい家庭的な環境であるからこそ可能になっていると分析をしている。

・ 結構、まあ考え直してみれば大学入ってから成長したこと、吸収したことがすごいいっぱいあるんですよ。あの、高校までは常識とかも全然だめで、未熟なところがすごい多かったんですけど。

L大学って小ちゃい学校じゃないですか。普通の大学はて大きくて結構放任で、自己管理でやってねっていう感じですけど、L大学はすごい面倒見もいいし、結構叱ってくれるんですよ。だめだよみたいな。幼稚園みたいな話なんですけど、そんなん言うの。でもなんか、それとか学校でしか学べないじゃないですか。そういう意味ではL大学にしてよかったというのものもあるし、大学行っというて本当によかったというのもあったし、本当に自分が成長したのを実感してたんで。周りの友達からも。

本当に自分勝手だったし、すごい自己中（心的で）で、なんか、わけわからんところで怒りだしてたんで。結構言われるんですよ。普通そこで怒るかみたいなのところで、すぐぶつってきたりとかもあったんですけど、協調性がないところがあったんですけど、でも周りともある程度合わせられるようになってきたと思うんで。

[L大学はどのようなプログラムがあるんですか？協調性を育てることができたりとか？]

プログラムと言うより、アットホームさというか、生徒と先生の距離がすごい近い感じがあるんですよ。なんで、それに先生もいい先生が結構多くて。他の大学のことをあんまり知らないで、比べられないんですけど。生徒のことを思って叱るときも多かったですし。

[それがわかるんだ？]

そうですね、他の先生とかからも「あの先生はホントに生徒思いだから」みたいな話とかも聞かれますよ。それで、「普通はそういうの言ってくれないよ」みたいな感じとか聞くと、愛情を感じるというか、熱心してくれてるんだと感じて。

先生のほかに友だちの影響とかも強かったんですけど、すごい言う子で。一番仲がいい子が、二人くらいいるんですけど、その二人はホントに常識とかもちゃんとあるというか、姉御肌のな「そういうの、あかんで」とかそういう感じで、叱り癖があるというか、説教が好きと言うか。

[どういう時に？]

遅刻魔なんですよ、私。平気で友達を40分待たしたりとか1時間待たしたりとか、ドタキャンとかも多いし。

[それをしてたわけ、高校くらいまでは？]

そうですね。なんだったかな。なんかそういうのとか、結構いろんなところを叱られてるんで。あんまりこれっていうのがわかんないんですけど。それちょっと公の場で出たらあかんぞっていうようなところで、叱るんですよ。その友達が。それで、でもすごく仲いいし。

[それで友達やめようかなとかはしない？]

ええ、そうですね。なんか、聞こうかなみたいな、教えてもらっとるかな、と言う感じで。高校までそのいろんな癖がもうついちゃってたんですよ、悪い癖が。それで直すのにちょっと時間がかかってたんですけど。でもその友達の影響で、自分を見直して。大学入ってからこそという感じがあるんで、そういうのとか。自分で大学で吸収したこと。正直授業とかはそんなにあれな

んですけど、友達と先生の影響は強かったですね。

(大学入学前に当初は専門学校への入学を希望し、親のアドバイスで大学に進学したが、大学卒業後に専門学校へ進学することになったことに対して) お母さんから「やっぱり専門学校って言うけど、大学行ったの後悔してる？」みたいに聞かれても「全然後悔してないというか、吸収したこととか、大学で得たものは大きいから」というのは話しましたし。

[すごい素敵ですね自分が成長したのを実感できるというのは。]

そうさせてくれた、っていうのもあるんですけど、大学での環境が。

これらの言説からみえてくるのは、教職員による学生に対する対面的な手厚いサポート、教職員の連携、さらに、大学外の人たちとの連携による、学生支援の効果である。教職員と学生双方が、顔と名前が一致している、いわゆる「顔の見えるサポート」がなされていることである。組織的に意図された支援のあり方や働きかけであっても、そうではなく、教職員個々の意思による働きかけであるとみられるものであっても、親以外の大人との関わりが、若者が社会とのつながりをつける強力な後押しとなっている様子がみてとれる。

第8章 ネットワーク構造と就職活動

：孤独な戦いと多様な応援団のいる戦い

本研究の課題は、職業キャリア形成上の初期段階にあたる職業探索期において、女子大学生たちの重要な他者はどのような人であり、どこで出会っているかという点とあわせてもう1点、女子大生たちの社会関係のあり方がどのように職業探索に影響を及ぼしているかということを見ていくことにある。

インタビューに協力してくれた女子大学生たちは、2010年度と2011年度に大学4年生だった人たちで、いずれも1993年から2005年の就職氷河期に続き到来した「新就職氷河期」とも言われるような厳しい状況の中で就職活動を行った人たちである。インタビューの中でも、ほとんどの人たちが就職活動を大変だったと振り返っていた。なかなか思い通りにいかない中で、社会関係の違いは、その活動の成果に影響を及ぼしているのだろうか。第2章で確認したように堀（2004）や石黒（2006）の研究からは、個人が有する社会関係、いわゆるネットワークの多様性に職業探索活動を後押しする効果があることが示唆されていた。本章では個々の有するネットワーク構造の特性と就職活動の様子について、まずその関連を検討し、次に2つの事例を取り上げ検討していくことにしよう。

第1節 社会関係の構造と就職活動の成果

対象者32名のうち、4月以降の就職先の決定者が26名で、専門学校への進学を決めていた人1名を加えると卒業後にアルバイト以外の進路が決定していた人は27名であった。そのほかに、アルバイトをしながら家族や親族の応援のもと専門技術者への道を追求する人が1名いた。一方で、4月以降も当面アルバイトをしながらキャリア探索を続ける予定の人が4名、また、社員採用の候補生ではあるものの調査当時（2月）、すでにアルバイトとして就労し、4月以降も試用期間として就労予定の人が1名いた。なお、進路未定でキャリア探索を続けると回答した4名の所属大学は偏差値の高い私立大学に在籍していた人が2名、中程度の私立大学に在籍していた人が2名である（脚注11を参照のこと）。

本研究では、第3章で示したように、5人までの相談相手をたずね、就職活動中の女子大生の社会関係を調べた。そしてキャリア探索における社会関係の影響を検討することが本研究の課題であった。結論から述べると、5名に限定した相談経路（チャンネル）の数や種類（図表10を参照のこと）と就職活動の成果との間に直接的な関連はみられなかった。具体的には、就職活動中の社会関係が「家族のみ」、および「同級生（同年代で学生の恋人を含む）と家族」と答えた人が10名あるが、この10名のうち4月以降の進路が決定していない人は第3章の図表10における①「友人と家族」と答えた中の1名のみであり、そのほかの人たちは進路が決定していた。

また、進路未定者4名の社会関係の内訳は①「同級生」「家族」、②「同級生」「家族」「大学外の職業人」、⑬「同級生」「大学教員」「大学外の職業人」、⑦「同級生」「大学外の職業人」であり、進路未定者がとりわけ孤立しているわけではないことがみてとれる。

第2節 職業探索活動中の他者

社会関係の特徴と就職活動の成果の関連は特定できない一方で、社会関係の違いは職業探索の様子に違いをもたらしていた。本節では、職業探索の段階にある女子大生を取り巻く他者をどのように自らの就職活動に動員していたのかに注目をし、相談相手に「兄と同学年の友人たち」を挙げていた遠野さんと、相談相手としては「母と大学内外のキャリアアドバイザーとインターシップやボランティア先で知り合った人たち」を挙げていた下村さんの事例をとりあげてみていくことにする。

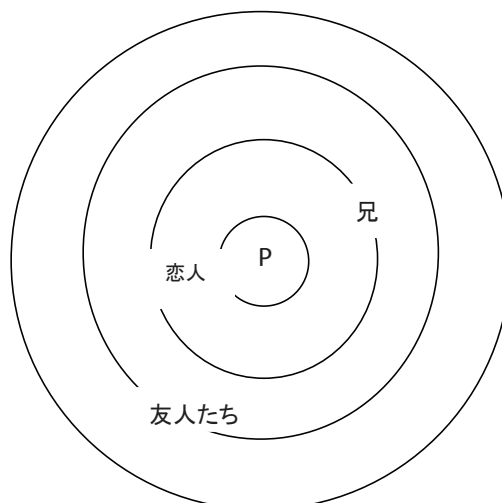
【事例1】家族と同質的な友人ネットワークと職業探索活動

遠野さんは、インタビュー中も終始笑顔を絶やさず、はきはきと受け答えをする女性である。インタビュー当時（2月）は、就職希望の飲食業界の試用期間中で、アルバイトの待遇で働き始めていたが、試用期間の終了後もまだどうなるかわからないという状況であった。

遠野さんは中学の頃に父に勧められ吹奏楽部に入部し、以来吹奏楽に関わってきた。高校時代は全国大会出場を目指す指導者のもと、厳しい練習に明け暮れた。大学は、卒業後の仕事は全く考えず興味・関心と重なる専攻がある大学を選択した。アルバイトもしてみたいと思い、吹奏楽から離れることも考えたが、自身が大学時代にアルバイトに明け暮れたことを後悔している父の強い勧めがあり、大学でも吹奏楽部に入部した。3年生から4年生の秋までは吹奏楽部の部長を務めた。他の大学との合同発表会にも進んで参加し、他の大学生との交流も広げた。就職活動は3年生の秋から就職活動を開始した人が多いなか、部活動に熱心に取り組んでいたこともあり、本格的に開始したのは3年生の2月になってからである。3年生の秋に新部長から旧部長へプレゼントを渡すという部の慣わしのために、百貨店に行った際に親切に対応してくれた店員を見て、接客業をしようと決めた。

就職活動中は部活動の仲間や部活動の仲間でもある恋人と励まし合い情報交換をした。また、社交的な遠野さんは就職活動中の合同説明会で出会った人とも交流をして励ましあったと語ってくれた。合同説明会やネットで探した情報を頼りに就職活動を続けた。就職活動がなかなか思い通りにいかない中で兄がハローワークでの支援の情報を持ってきてくれることもあった。就職活動が長引き精神的につらいこともあったが、合同説明会で出会った飲食業界での社員候補生となった。

図表14. 遠野さんの相談ネットワーク



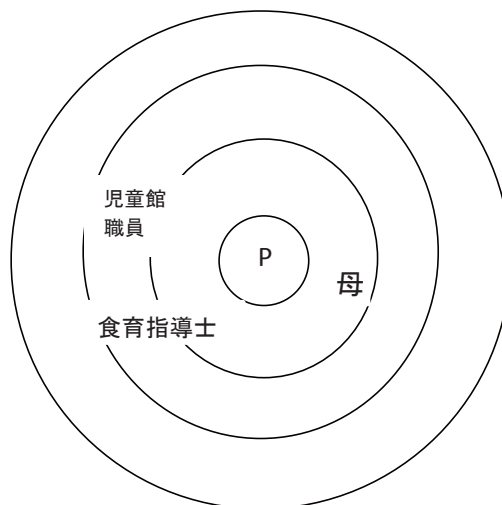
【事例2】多様な応援団のいる職業探索活動

下村さんは、4月からA市で保育士の専門職員（公務員）として働くことが決まっている。下村さんの出身地はA市ではなく、大学入学時に親元を離れた。大学は住みたい町にあることと国公立であること、福祉と社会について社会学や経済学の視点から全般的に広く学べる社会学系の専攻という理由で選択している。大学低学年の頃は大学の授業とサークル活動とアルバイトに熱中した。3年生の進学を前に福祉職の専門資格を取らないことを決断し、しばらくそれにかわり熱中できることを探した後に図書館で見つけた児童館のボランティアに登録した。ゼミ活動に積極的に参加するかたわら、周囲が就職活動を始めた3年生の秋に「しなきゃいけないような感じ」で就職活動を始め、銀行からブライダル業界まで半ば手当たり次第に活動を行った。12月頃に児童館の職員の人と児童館の仕事の魅力について話す機会があり、児童館職員の道をめざす気持ちが芽生えた。

1月にはNPO団体が運営をしている別の児童館でのインターンシップにも登録をした。インターンシップ先の児童館では、そこで活動する職員だけではなく、食育指導士の年配の女性と出会いがあった。食育指導を受けたことにより、下村さんの体調は劇的といえるほど改善した。児童館の職員の夢がふくらみそのためには保育士の資格が有利であること、公務員試験を受験しなければならないことを知り悩んでいる際に「悩んでいるならやりなさい」と母親が背中を押したのは3年生の2月であった。国家資格である保育士の試験が8月、そして秋の公務員試験という2つの試験と、インターンシップ、授業と卒業論文の執筆で毎日多忙を極めたが、必要なときにはいろいろな人に相談し、また情報を得ながら乗り切った。

下村さんは、通常はあまり自分のことを他者に相談をしないものの、就職活動が開始するとジョブカフェに出向き相談をしたり、仕事の内容や待遇についてボランティアやインターンシップ先のスタッフに尋ねたという。また「場面場面によって全然違うんですよ。」と語るように話題によって相談相手を変えている。そして、相談しても決まって「あんたのことなんだから、私、関係ないし、自分で決めなさい」と応え自分の決断を促す母親に相談している。

図表15. 下村さんの相談ネットワーク
ジョブカフェスタッフ



この2つの事例からは、就職活動という人生における大きな課題に対する他者への働きかけ、いいかえれば課題に直面した際の他者の動員の仕方の違いがみえてくる。遠野さんが頼りにした

のは、同年代の友人たちと家族である。一方の下村さんは職業探索上で自ら働きかけ出会った大人たちであったり、キャリア探索を助ける専門家である。これらの人脈から遠野さんが入手できた情報は、就職説明会に関するものにとどまっていたのに対して、下村さんの人脈からは待遇や働き方等職業に関する具体的な情報が入手できていた。そのうえで信頼を寄せている母親から励ましの支援を受けていた。

キャリア探索の仕方は個々により異なり、正解はないものではある。しかし、職業上の情報の流れを見たときに、自分と同じ段階にいる同年代の人を中心に社会関係を有している人と、自身が関心のある分野ですでに活動をしている人や専門家をその社会関係の中に取り込める人では、活動の展開に有利・不利の違いが出てくることのあるのではないだろうか。

第9章 大学生のキャリア形成支援と社会的絆の役割

：産・官・学・民・家族ペンタゴンの絆の再構築 の中でのキャリア形成支援に向けて

本研究では、A市の女子大学生を対象にして、初期職業キャリア形成の重要要素と言える職業キャリア展望と職業探索活動に対する社会関係の関わりを検討してきた。

本研究の調査対象者のほとんどが昭和63年（1988年）と平成元年（1989年）生まれである。したがって、1986年（昭和61年）の男女雇用機会均等法の施行後に誕生し、小学校入学の頃には、女性が短期大学よりも大学に進学するようになった中で成長した人々というわけである。このように、彼女たちは、大卒女性の労働者としての活躍が法的根拠をもって期待される社会の中で成長を遂げた一方、幼少期にはすでにバブル経済が崩壊し、不景気のまっただなかで成長した世代である。言い換えれば、社会で活躍することを期待されていると言われながら成長し、その一方で学校から社会に出て行く際に、社会で活躍をする場を見つけることが容易なことではないことを見聞きしながら成長した世代でもある。本研究がこのような社会的状況の中における高学歴女性の職業移行研究であることを改めて記しておきたい。

第2の就職氷河期と言われるほど就職状況が厳しい中で、インタビューに応じてくれた女子学生たちには「不採用通知を何通も受け取り、嫌になって一度は就活を止めました」という人が少なくなかった。そのような状況のなかで、しかも身近に職業的なロールモデルが乏しいという中で、女子学生たちがどのようにして教育から職業生活への移行に関わる展望を抱き、就職活動のモチベーションを続行させたのかを他者との関わりに注目してみた。

本研究の知見としてまずあげられるのは、就職活動中に家族への相談や家族からの助言が最も多くみられたこと、言い換えるならば家族の資源が最も多く動員されていたことである。中でも女子大学生が最も信頼を寄せていたのは母親であった。母親が女子学生のそばに寄り添い、日常的な話し相手になり、また困ったときの相談相手でもあり、決断の後押しをする他者であり、そしてどんな結果であっても承認をしてくれる全面的なかかわりをもつ重要な他者、浜口らの言葉で言い換えると日常生活から職業探索に至るまで全面的なレファレント・パーソンとして存在していた。

それに対して相談相手としての父親の存在は薄いものであった。その一方で、父の背中を職業人としてのロールモデル、あるいは目標、ライバルというようにみなしていた人も多かった。身近な同性のロールモデルが不在という環境の中で、父親が職業人のロールモデルとして参照される対象となっていたのだろう。

また父母の支援を補うような形できょうだい、とりわけ兄が就職活動を助けていた。キャリア支援ということが社会的に大々的に言われる一方で、個々人の就職活動は、非常に個別に、そして家族に頼れる人は家族を動員して行われているというのがインタビューを通して強く印象に残ったことである。

今後の研究の課題として、キャリア形成に大きな影響をおよぼす家族成員個々の役割はどのようなものかについてさらに調査、検討の余地があるだろう。母親が同居別居を問わず相談相手とみなされていたことが多かったことに対し、父親を相談相手や参照する人と位置づけていたのは親元を離れた人に多くみられたのはなぜなのか。親元を離れて初めて親の有難さに気づくという

ことは巷でよく言われることであるが、相談相手やキャリアに関する参照者としての父親と子ども、そしてその物理的距離の影響については今後さらに検討する必要があるだろう。またキャリア形成にかかわるきょうだいの役割についても同様に次の検討課題としたい¹⁷。

その一方で、L大学では大学全体の関係者が連携して就職支援が行われているのをみた。その就職支援は就職活動の仕方や斡旋に留まらず生活指導にも及んでいた。20歳前後の女子学生には反発をかうことも考えられる少々厳しい就職指導や、「しつけ」とも呼べるような細やかな生活指導が、学生には自分たちの成長を支援する有難いこととして認識されていた。その背景には、関係者の連携があった。指導をしない関係者がその真意を学生に伝えることによって教職員全体への信頼度を高め、そのことが個々の教職員が発信するアドバイス等への信頼度の高まりとなって、学生の耳にその真意が届いているように見受けられる場面もあった。

L大学の事例は、個々の教職員の教育やキャリア形成・就職支援の熱意もさることながら、関係者同士の「絆」が良好な場をもたらしていること、そのことによって良質な社会的資本が蓄積され、また社会的資本が適切に動員される事例であるといえよう。

女子学生たちが将来展望を描いたり、職業選択に関する決断を下したりするきっかけについて語ってくれたことに関する検討からは、職業選択が仕事に内在する面白さが決め手になったというよりは、その仕事に関わる人々によって「仕事の面白さ」「仕事を通した手ごたえ」「仕事の責任」が発信され、興味が喚起されていることをみた。より良い仕事の質を目指したり、人を大切にしたり、生き生きと働いている・活動しているというその態度や行動が、仕事の世界でまだ「半人前」の大学生のモチベーションをあげていることをみた。またそれを適切なタイミングで言葉にして発信する他者——家族、上司、一足先に社会人として活躍している友人・先輩——の存在が大きかった。

上記のように本研究において、女子大学生の生活圏で出会う大人たち、身近な先輩たち、自分より一足先に社会に出て働いている友人の存在が重要であることが再認識される一方で、生活圏の中で出会う人たちが限られていたことを強調しておきたい。それらの重要な大人たちと出会うのは、今回の調査対象ではほぼ、大学とアルバイト先に限られていた。働く人の生活圏と教育を受けている人の生活圏との乖離が甚だしいのだろう。

これまで検討してきたことから示唆されることは、これら両者の関係性の断絶をつなぎ合わせることで、若者のキャリア形成支援になりうるということである。その関係性を生み出す場、制

¹⁷ ライフコース研究グループによるパネル調査を用いた総合的な調査—親・本人の社会経済的状況、教育キャリア、将来展望ならびに生活満足度、人間関係、重要な他者やそれらの就職前と後におけるその変容等—によって若者の生活世界の理解を志向した研究（正岡ほか 1997、西野2008）があるが、いずれもキャリア探索・就職活動における親子関係の影響についての関心はほとんどみられない。

大学生のキャリア探索と親子関係に注目したものとしては、最終学年の大学生ならびにその親を対象にし、進路選択における両親の影響を考察した三宅・遠藤（2005）、上村（2005）、根元ほか（2005）がある。これらの研究からは就職活動期の子どもと親のコミュニケーションの頻度が高く関係が良好であること、とりわけ母親とよく話をしてることが確認されている。さらに三宅・遠藤の研究においては、親の就労・職業意識と子どもの進路意識には影響関係は見出されないこと、上村および根元らの研究においては、子どもが職種・仕事内容を重視するのに対し、親は会社の内容（安定性、成長性等）を重視する等、就職観の親子間の意識の相違が明らかにされている。

大学から職業生活移行に関する研究には上述したようなものがあるが、フリーター、ニート等“問題”をかかえた若者の研究に比して、問題をかかえていない大学生のキャリア探索過程への研究は多くなく、また相談相手として親が選択される割合が高いにもかかわらず、上村（前掲書）、根元ほか（前掲書）が指摘するようにキャリア形成における親子関係や親の影響に関する詳細な調査・研究は十分がすすんでいるとは言い難い状況にある。

度を構築していくことが、我々若者たちの先行者たちが取り組まねばならないことではないだろうか。

ソーシャル・キャピタルの醸成機関としての大学の可能性

L大学の事例からは移行期支援における社会的資源、それを創出する社会関係、いわゆるソーシャル・キャピタルの力の大きさを再確認した。そこで、以下では稲葉（2007）を参照して、ソーシャル・キャピタルと教育機関の関係についておさらいをしておきたい。

教育機関とソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルという概念を最初に提言したとされるアメリカ、ウェストバージニア州の教育長であったリダ・ハニファンは1916年の米国政治学科年鑑に掲載された論文で以下のように述べている。

（ソーシャル・キャピタルとは）不動産、個人の資産、現金などの有形なものを最も有用にするもの、すなわち社会単位を構成する個人や家庭間の社会的な交流、善意、仲間意識、同情などであり、田舎のコミュニティでは、ほとんどの場合、必然的にその中心が学校である（中略）もし、住民が隣人と接触すればソーシャル・キャピタルの蓄積となり、それは彼の社会的なニーズを直ちに満たし、コミュニティ全体の生活を大きく改善するのに十分な社会的潜在力を持つかもしれない。（中略）コミュニティ・ソーシャル・キャピタルの蓄積となり、それは彼の社会的ニーズを直ちに満たし、コミュニティ全体の生活を大きく改善するのに十分な社会的潜在力を持つかもしれない。（中略）コミュニティ・ソーシャル・キャピタルの蓄積は公の祝い事、ピクニックやそのほかの多様なコミュニティの集まりで培われる。ある特定のコミュニティの人々がお互いに知り合いになり、催し物、社会的交流、個人的な娯楽などで時々集まる習慣が形成されれば、適切な指導者によって、このソーシャル・キャピタルはコミュニティの幸福（well-being）の全般的向上に容易に向けられるかもしれない。」（稲葉 2007, p.153、傍点は筆者による）。

ハニファンが指摘するように「学校」は、今後もより一層ソーシャル・キャピタルを醸成する社会的な機関として期待することができるだろう。2000年の調査¹⁸による全米2万4千人強のデータによれば、教育程度が高いほど、信頼、市民・グループ・宗教等の各種活動への参加の度合い、友人ネットワークの多様性などが高いという結果が出ており、「教育」がもたらすソーシャル・キャピタル蓄積の効果は高いと言える（稲葉 2007, p.101）。

ただし、日本の研究によれば、最終学歴が高卒までの比率が高い県ほど、大卒の比率が高い都道府県よりソーシャル・キャピタルが高い結果を示している（稲葉2007, pp.108-110）。これは、長期間労働等によって、大卒労働者の仕事以外の活動への参加や他者との関わりの機会が狭められていることがその背景にあると考えられる。

これらの課題の解決、すなわち若者と、大学外の人々、地域コミュニティ、さらにはグローバル化とICT化の進行する現代社会においては地理的な限定をも越えたコミュニティとのブリッジをかける仕組みづくりが多くを預かる大学関係者の喫緊の課題なのではないだろうか。

¹⁸ <http://www/cfsv.org/communitysurvey>

その「教育」がどのようにしてソーシャル・キャピタルを醸成するかについては、世界銀行が示した以下の4つの経路が参考になるだろう。

- ① 学生・生徒が教育の場を通じて信頼・規範・ネットワークの規範などソーシャル・キャピタルの基本を理解し、かつ、それを培う参加や気持ちを持ちつ持たれつというソーシャル・キャピタルの技術を学ぶことによってソーシャル・キャピタルを醸成する。
- ② 学校がコミュニティ活動の場を提供することによって、ソーシャル・キャピタルを醸成する。
- ③ 市民活動に関する教育を通じて、学生・生徒が自分たちの社会にどのように責任を持って参加をするかを学び、その結果、ソーシャル・キャピタルが醸成される。
- ④ 公立学校の場合は、社会経済的な背景を異にする子弟と一緒に学ぶことによって、社会全体の一体感を促進し市民意識を強固にする（稲葉 2007, pp.101-102）。

教育機関はソーシャル・キャピタルを育む場・拠点になり、その一方で、地域コミュニティ、地域を越えたコミュニティ、産業界、行政とのブリッジになりうるのである。

長期化する学校生活と職業生活の分断を埋めるために、ある時は若者の自立を支え、またある時は、若者が目標とするような背中をみせるような、家族以外の大人たちとの出会いを生み出す社会関係・社会制度づくりが必要とされている。そして、本研究から導き出されるインプリケーションとして考えられることは、包括的な移行期支援機関としての大学の機能の拡充であろう。多くの若者が学校から職業生活の移行期に大学という場を通過していく現在、大学が大学内外の市民と連携した移行期支援を、カリキュラム編成やその他の企画、教職員の意識改革等を通して推し進めていくことがますます重要になってこよう。

また高学歴化に伴う修学期間の長期化と親子関係の緊密化によって閉鎖的で同質的になりがちな社会関係を、若者自身が意識的に広げていくこと、具体的にはロールモデルやメンターを探すことの有用さと、合わせて、大人から若者に対する歩み寄り、すなわち若年者に対するメンターになることの重要性を指摘し、浸透させていくことも、多くの若者を預かるようになった大学関係者の使命の一つといえるのではないだろうか。

メンターになる

半数以上の若者が大学経由で社会に巣立つようになった現在、かつてないほど大学への期待が高まっている。しかし、本研究でみてきたように、若者たちはアルバイト先やインターンシップ先で出会った大人たちから多くのことを吸収していた。そこでは具体的な業務・仕事にとどまらず、価値あることや生き方や人との関わり方を学んでいた。

また、一歩先に社会に出た先輩たちの姿は、女子学生たちにとって身近な目標や指針になっていた。さらに、苦しいときに励まし、承認してくれる大人たちは、彼女たちが夢に向かって前進しようとする大きな支え、力になっていた。メンターの存在は学校から職業移行という移行の途上にあり、自らの人生を切り拓こうとしている若者にとって非常に大きな意味を持っているのである。

その一方でメンター研究によれば、恩恵を受けるのは支援を受けるプロテジェだけにあるのではないことが明らかになっている。プロテジェの支援をすることは、メンターとなった人の自己肯定感を強める働きがあり、メンターの人にとっても心理的な恩恵があるのである（Kram 1988 = 2003）。

このようなことを考えたときに、大学等の教育機関を越えたさまざまな空間・場において従来以上に大人たちが若者との接点を持ち、メンターとなれる「仕組みを作る」ことが必要となつてこよう。

大人がメンターとなれる仕組みとしてのインターンシップ制度

現在インターンシップ制度が一定の広まりを見せているが、この制度は若者がメンターと出会い、そして大人がメンターとなるための有効な仕組みの一つとなろう。

インターンシップ制度は日本においては橋本内閣時代の1997年1月に、産学連携による人材育成の一つとしてその推進が謳われ、同年9月には文部省、労働省および通商産業省の三省により発表された『インターンシップ導入研究会』の報告を踏まえて、以降、大学を含む教育機関において実施されるようになってきている（田中 2013）。

学生がインターンシップを修了してからの効果について、関東地域インターンシップ推進協議会の調査報告を再度整理した田中（2013）によれば、「実社会の一部に触れ、貴重な社会体験：気づき」「自分を見直す良い機会：自己理解」「就職先のヒントを得る：進路に関する情報」「自分の意識の変化：自己形成」「実務が分かり、職業意識が湧いてきた：職業観醸成」「会社のイメージが分かってきた：他者理解」（p.240）とあり、インターンシップ制度が若者のキャリア形成を支援する大きな力となることが期待される。本研究の知見をふまえると、これらの効果にインターンシップ先で出会った、与える「大人」との出会いの影響が大きいことが十分予想できる。

インターンシップ生の仕事の質の保証、また大学生以外の若者、女性、高齢者などの仕事の機会を縮小させる懸念もあり、これらの課題も同時に克服していかなければならないにせよ、手軽にアクセスできる飲食業・サービス業のアルバイトだけではなく、個々人の学習領域に関連した業種における経験をつめる制度としてインターンシップ制度の普及の推進が期待される。それにもかかわらず大学生のインターンシップの経験は2013年度の時点でまだ2割にとどいていない（日本学生支援機構2015）。この制度の普及にあたり、大学生を受け入れる民間企業やNPO等の産業界、制度上の整備を行う行政と大学、そして私たち個人個人が制度を理解し協力してよりよい制度にしていかなければならない。

また、大人たちが次の世代の発展を支援するメンターになる機会をつくるためには、インターンシップ制度にとどまらず、趣味の活動や社会的活動に多くの人に参加できるような仕組みを考え、あらたに構築していく必要がある。そのためには長時間労働の解消等、産業界、政府や自治体、教育機関、そして私たち一人一人が知恵を絞って、私たちの働き方の仕組みを変えていくことも大きな課題となつてこよう。

かわいいわが子には旅をさせる！

苦しいときに家族の支えが若者の大きな力になることは本研究でも確認できた。「家族」のありがたさ、尊さは、未曾有の被害をもたらした東日本大震災の経験を経て、これまで以上に私たちが身にしみて感じるようになったことでもあろう。

しかし、本研究で目撃したもう一つの点は、若者のキャリア形成・キャリア展望に関わる親以外の大人の力、友人の力である。親元を離れて友人たちと新しい社会関係を結び成長した事例、決断の後押しやこれまでの価値観に影響をもたらした教員との出会い、仕事への興味を芽生えさせたり人生設計に影響を与えたアルバイトやボランティア先での大人たちとの出会い。それらは

古くからみられる若者が成長して行く上で貴重な出会いであり、社会関係である。本研究では、親からの後押しで親以外の人と関わるようにし、生き方に刺激を受ける大人との出会いをした事例も目撃した。

「かわいい子には旅をさせる」

成人移行期の支援を考える上で、家族の大切さを知る私たちは、また、先人たちの知恵も拝借する必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 新谷周平 (2007) 「ストリートダンスと地元つながり：若者はなぜストリートにいるのか」『若者の労働と生活世界：彼らはどんな現実を生きているのか』大月書店、pp.221-252.
- 安藤由美 (2003) 『現代社会におけるライフコース』放送大学.
- 石黒格 (2006) 「県内若者の就労にパーソナル・ネットワークの多様性が与える影響」『人文社会論叢』社会科学編第16号 (弘前大学)、pp.1-15.
- 稲葉陽二 (2007) 『ソーシャル・キャピタル：「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題』生産性出版.
- 乾彰夫 (2010) 『“学校から仕事へ”の変容と若者たち：個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店.
- 上村和申 (2005) 「大学生の就職活動における両親に関する一考察」『政治学研究論集』第21巻 (明治大学)、pp.35-54.
- 内田龍史 (2005) 「強い紐帯の弱さと強さ：フリーターと部落のネットワーク」『排除される若者たち—フリーターと不平等の再生産』部落解放・人権研究所、pp.178-199.
- 浦光博 (1992) 『支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社.
- 大久保孝治 (1989) 「生活史における転機の研究：『私の転機』(朝日新聞連載)を素材として」『社会学年誌』30号 (早稲田大学社会学会)、pp.155-171.
- 大熊保彦 (2001) 「コンボイ」齋藤耕二・本田時雄編『ライフコースの心理学』金子書房、pp.193-200.
- 片桐新自 (2009) 『不安定社会の中の若者たち：大学生調査から見るこの20年』世界思想社.
- 片瀬一男 (2008) 「どのような相談ネットワークが進路選択を促進するのか：その広がり多様性」海野道郎・片瀬一編『失われた時代の高校生意識』有斐閣、pp.143-165.
- 工藤康則 (2001) 「高校生の相談ネットワーク：準拠人、準拠集団、社会化」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学：進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、pp.159-182.
- 小杉礼子 (2010) 『若者と初期キャリア：「非典型」からの出発のために』勁草書房.
- 厚生労働省 (2011) 『平成23年版 働く女性の実情』<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/>
- 田中宣秀 (2013) 「インターンシップの期待すべき効果と望ましい枠組みのあり方：導入時の育成目標「高い就業意識」から「エンプロイヤビリティ」の醸成へ」樋口義雄・財務省財務総合政策研究所編『若年者の雇用問題を考える：就職支援・政策対応はべきか』日本経済評論社、pp.233-260.
- 内閣府 (2001) 『第2回調査青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』財務省印刷局.
- (2004) 『世界の青年との比較から見た日本の青年：第7回世界青年意識調査報告書』国立印刷局.
- 中西泰子 (2008) 「現代の親子関係とはいかなるものか：仲良し母娘とその社会的背景」南田勝也・辻泉編『文化社会学の視座—のめりこむメディア文化とそこにある日常の文化—』ミネルヴァ書房、pp.194-215.
- 永田彰子 (2002) 「関係性からみた生涯発達」岡本祐子編『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房、pp.121-147.
- 西野理子 (2001) 「職業との出会い」大久保孝治編『変容する人生：ライフコースにおける出会

- いと別れ』コロナ社、pp.77-97.
- 野尻依子 (1977) 「家族ネットワーク・家族周期・社会変動」 森岡清美編 『現代家族のライフサイクル』 培風館、pp.126-147.
- 根本孝・牛尾奈緒美・永野仁・木谷光宏 (2005) 「大学生の就職行動に関する調査研究」 『明治大学社会科学研究所紀要』 第44巻第1号 (63集)、pp.89-153.
- 浜口恵俊編 (1979) 『日本人にとってキャリアとは：人脈のなかの履歴』 日本経済新聞社.
- 久村恵子 (1997) 「メンタリングの概念と効果に関する考察：文献レビューを通じて」 『経営行動科学』 11巻2号、pp.81-100.
- 堀有喜依 (2004) 「無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題」 『日本労働研究雑誌』 No.533、pp.38-48.
- － (2007) 「大学の就職・キャリア形成支援の現状と課題」 小杉礼子編 『大学生の就職とキャリア』 勁草書房、pp.51-75.
- 日本学生支援機構 (2015) 「平成24年度、25年度大学等におけるインターンシップの実施状況に関する調査報告」 (http://www.jasso.go.jp/career/internship_chousa.html)
- 日本経済団体連合会 (2012) 「新卒採用 (2012年4月入社対象) に関するアンケート調査結果の概要」 (https://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058_gaiyo.pdf)
- 正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・西野理子編 (1997) 『大学卒業、それから』 早稲田大学人間総合研究センター.
- 三宅義和・遠藤竜馬 (2005) 「進路選択における両親の影響—非選抜型大学の保護者の進路意識調査を通じて—」 居神浩ほか 『大卒フリーター問題を考える』 ミネルヴァ書房、pp.175-211.
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編 (1993) 『新社会学辞典』 有斐閣.
- 文部省・文部科学省 『学校基本調査報告書：初等中等教育機関 専修学校・各種学校編』 文部科学省 (2015) 『平成26年度学校基本調査報告書 高等教育機関編』
- 山田昌弘 (1997) 「友達親子が語られる背景」 『季刊 子ども学』 Vol.14, 福武書店、pp.16-21.
- 山田真茂留 (2007) 「孤人化する社会と親密性の罫：今日的な関係性の諸問題」 『Do! ソシオロジー：現代日本を社会学で診る』 有斐閣、pp.23-48.
- 労働政策研究・研修機構 (2008) 『学校段階の若者のキャリア形成支援とキャリア発達との連携に向けて』.
- 渡辺秀樹 (2000) 「発達社会学から見た親子関係」 藤崎宏子編 『親と子：交錯するライフコース』 ミネルヴァ書房、pp.42-58.
- Allen, Tammy D. and Lillian T. Eby (Eds.) (2010) *The Blackwell handbook of mentoring : a multiple perspectives approach*, Wiley-Blackwell.
- Erikson, Erik H. (1950) *Childhood and society*. (仁科弥生訳 (1977, 1989) 『幼児期と社会1・2』 みすず書房.)
- Granovetter, Mark (1973) "The Strength of Weak Tie", in *American Journal of Sociology*, Vol.78, pp.1360-1380. (大岡栄美訳 (2006) 「弱い紐帯の強さ」 野沢慎司編・監訳 『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』 勁草書房、pp.123-154.)
- － (1974) *Getting a Job : a study of contacts and careers*, Harvard University Press. (1995, 2nd edition 渡辺深訳 (1998) 『転職—ネットワークとキャリアの研究』 ミネルヴァ書房.)
- Holton, Gerald (2004) "ROBERT K. MERTON" (biographical memoirs) in : *PROCEEDINGS OF THE AMERICAN PHILOSOPHICAL SOCIETY*, vol. 148, No. 4, pp.506-517.

■ 参考文献

- Ibarra, Herminia and Prashant H. Deshpande (2007) "Networks and Developmental Networks in the New Career Content", in Hugh, Gunz and Peiperl Maury (Eds.) *Handbook of career studies*, Sage Pub.
- Kahn, Robert L. and Toni C. Antonucci (1980) "Convoys over the life course", in Baltes, Paul B. and Orville G. Brim Jr. (Eds.), *Life Span Development and Behavior*, Vol.3, pp.253-286, Academic Press. R.L.カーン・T.C.アントヌッチ (1993) 「生涯にわたる「コンボイ」」東洋・柏木恵子・高橋恵子編・監訳『生涯発達の心理学 第2巻 気質・自己・パーソナリティ』新曜社、pp.30-70.
- Kram, Kathy E. (1988) *Mentoring at Work : Developmental Relationships*, in *Organizational Life*, University of America. (渡辺直登・伊藤知子訳 (2003) 『メンタリング—会社の中の発達支援関係—』白桃書房.)
- Levinson, Daniel J. et.al. (1978) *The seasons of a man's life*. Knopf. (南博訳 (1992) 『ライフサイクルの心理学』上・下、講談社学術文庫.)
- Merton, Robert K. (1957) *Social Theory and Social Structure*. (Enlarged Edition) (森東吾 ほか訳 (1969) 『社会理論と機能分析』青木書店.)
- OECD (2012) *Education at a Glance 2012*, OECD.
- Plath, David W. (1980) *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, the Leland Stanford Junior University. (井上俊・杉野目康子訳 (1985) 『日本人の生き方』岩波書店.)
- Trow, Martin A. (1961) "Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education" (=1976「高等教育の構造変動」天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』東京大学出版会.)

〈執筆略歴〉

土岐 智賀子（どき ちかこ）

立命館大学教育開発推進機構講師

1992年駒澤大学人文科学研究科社会学専攻 修士課程修了、明星大学職員を経て2012年立命館大学大学院社会学研究科 応用社会学専攻博士後期課程修了、博士（社会学 立命館大学）。2013年より現職。

【専門】

社会学（キャリア・ライフコース研究、イタリアの高等教育・若者政策）

【主な論文・著書等】

- ◇「フレキシビリティの浸透を通じて浮かびあがる地域間格差：イタリア」福原宏幸・中村健吾編『21世紀のヨーロッパ福祉レジーム：アクティベーション改革の多様性と日本』糺の森書房 2012年
- ◇「青年期（キャリア探索期）におけるネットワーク分析の意義」『立命館大学人文科学研究科紀要』96号 2011年
- ◇「イタリアの若者の社会的状況：増える高学歴者と家族・教育・雇用制度の特徴」『立命館国際地域研究』33号 2011年

若者のキャリア形成における社会関係の役割
～女子大生の将来展望と重要な他者～

2015年8月

発行 ■ 一般財団法人全国勤労者福祉・共済振興協会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-11-17
ラウンドクロス新宿5階
TEL: 03 - 5333 - 5126
FAX: 03 - 5351 - 0421

印刷 ■ 太平印刷株式会社

全労済協会「公募研究シリーズ」既刊報告誌

(所属・役職は発行当時です。)

- ④① 『職場の絆と企業人の意識転換による生活習慣改善とうつ病発症予防の試み』 2015年7月
東京大学大学院教育学研究科教授(健康教育学分野) 佐々木 司(研究代表者)
- 本研究は、社会全体で問題となっているうつ病について、企業の「常識・文化」を転換することで、勤労者相互の理解と協力による生活習慣改善を進め、うつ病予防を促進することを目的としている。具体的には、日常生活での適切な運動、睡眠、休憩・休息などの習慣が抑うつ症状と有意に関連することを明らかにした上で、企業・勤労者への健康教育による生活習慣改善とうつ病予防効果を検証した。
- ④② 『ソーシャルビジネスによる震災復興モデルの創造～志の連鎖に基づく協同社会の提案～』 2015年6月
宮城大学事業構想学部教授(副学部長) 風見 正三
- 本研究は、東日本大震災で顕在化した東北地方における社会課題(生活環境の整備、地域産業・雇用の創出)を解決するための「震災復興モデルの実証研究」である。
行政主導の震災復興事業だけでは地域の持続的な発展は難しく、これまでの研究に裏付けられた、地域主体の「ソーシャルビジネス」・「コミュニティビジネス」の視点から、真の豊かさを実現するための地域経済循環モデルの具現化を提示するとともに提言している。
- ③⑨ 『絆の広がる社会づくり：地域連携型高齢者ケアを目指した多職種連携のための協議会活動を促進する要素と求められる施策』 2015年4月
特定非営利活動法人日本医療政策機構研究員 窪田 和巳(研究代表者)
- 東日本大震災の被災地の保健医療システム復興に向け、「石巻医療圏健康・生活復興協議会」が構築した「多職種連携モデル」に注目し、関係者へのインタビュー調査から実態を把握し活動を促進する要素を明らかにした。その上で、多職種連携によって地域住民の生活を支えるための3つの施策を提言している。
- ③⑧ 『大震災後に長期集団避難生活を送る成人の社会的絆の再構築と精神的健康に関する研究』 2015年3月
東京医療保健大学教授 廣島 麻揚(研究代表者)
- 東日本大震災により避難生活を余儀なくされている人々の精神的な健康状態について、保健学の観点からアンケートを用いた実態把握を行っている。その上で、避難生活者の精神健康度の向上に向けて、心身ともに健康的な生活が送れるよう住民向けのプログラム解決が必要であると提言している。
- ③⑦ 『雇用形態の多様化時代における企業外部労働力の包摂に関する研究』 2014年10月
静岡大学人文社会科学部法学科准教授 本庄 淳志
- 労働者の雇用形態が多様化し、労働者派遣に代表される雇用のアウトソーシングが進む中で、同一職場内での別企業の労働者をいかに法的にも包摂し、労働条件の適正化を図っていくのか、労働者派遣制度の沿革や派遣法の改訂の課題、そして個別法、集団法の裁判令を踏まえて分析する。
- ③⑥ 『「おしゃべりパーティ」によるコミュニティの再建』 2014年9月
就実大学経営学部講師 加賀美 太記(研究代表者)
- 日本型生協の特徴であった「班」活動が、社会環境の変化から後退していく中で、班に変わる新しいコミュニティの可能性として注目されているのが、「おしゃべりパーティ」である。本研究はパーティ実施生協の訪問調査や組合員へのアンケート調査などに基づき、パーティの課題と展望を明らかにする。

- ③⑤ 『再生可能エネルギーと地域社会における絆づくりに関する比較研究』 2014年3月
法政大学 人間環境学部教授 西城戸 誠
- 東日本大震災以降、エネルギー確保の重要性や需給の逼迫などに急速に関心が寄せられている。本研究では、「市民出資型再生可能エネルギー事業」が地域に対してどのような波及効果を及ぼしているのか、地域主導型の内発性を重視した「コミュニティー・パワー」の事業展開に着目した。多様な国内事例を取り上げ、事業をとりまく課題や方策を提言する。
- ③④ 『2011年東日本大震災下の中小企業再生と雇用問題
～広い社会的支援と阪神淡路大震災との比較の視点から～』 2014年1月
研究代表者：岩手大学人文社会科学部教授 田口 典男
- 東日本大震災の被災地の復興には、壊滅的な被害を受けた地元中小企業の再生と雇用問題が最優先の課題である。本研究では、復旧過程で浮かび上がった産業構造上の問題、今後の復興を担う地域の若者の就労の課題、企業再建のための幅広い支援活動等を調査した。また、阪神淡路大震災の復興取り組みとの比較により、本震災の特徴と課題を提言する。
- ③③ 『住民自治を基盤とする地域医療システムと自治体病院の再編
～北海道釧路市の救急医療システムの改革と市立釧路総合病院の経営再建～』 2013年11月
北海道医療大学看護福祉学部専任講師 櫻井 潤
- 近年、医療をめぐる問題として、夜間救急における医師不足や病床不足による受入不能の問題等がたびたび報道され、誰もが当事者になりうる状況にある。本研究では、釧路市の救急医療システム改革と市立釧路総合病院の再建に向けた取り組みを検証し、地元組織の主導性と住民自治に基づく公民協働が鍵となる持続可能性な地域医療システムについて提言する。
- ③② 『地域防災における相互扶助のあり方に関する研究』 2013年10月
徳島大学環境防災研究センター特任准教授 照本 清峰
- 今後発生することが予測されている東海・東南海・南海大地震では、家屋建造物の損壊により多くの被害が生じるとともに、津波の来襲によって甚大な被害にあうとされている。本研究では、津波被災地域における防災まちづくり活動と学校の防災教育活動の連携による相互扶助モデルの構築がどのような役割を果たすのか、地域防災力を高めるための計画・方法を示す。
- ③① 『放射能公害に伴う避難生活における紐帯の維持・再生に関する研究
～福島県飯館村住民を事例として～』 2013年9月
日本大学生物資源科学部研究員 浦上 健司、日本大学生物資源科学部教授 糸長 浩司
- 未曾有の災害となった2011年3月11日の東日本大震災。その中でも人的な事故となった原子力発電所の水素爆発による事故は、福島県飯館村を含む近隣住民の生活を一変させた。本研究では、放射能降下によって避難を余儀なくされた飯館村住民の、避難時から現在までの行動とその思いを調査し、非常時の紐帯の維持・再生に関して、さらには国の対応・政策について提言する。
- ③① 『協力して生産性を上げる職場作りのためのアクションチェックリストの開発』 2013年6月
北里大学医学部公衆衛生学准教授 和田 耕治
- 近年、職場における労働者のメンタルヘルスは、企業にとっても労働者自身にとっても大きな課題となっている。有効的な対策としては平時から職場の雰囲気・体制の確保を重視したポピュレーションアプローチが重要である。本研究により作成されたアクションチェックリストを使用することによる職場改善策、さらにはメンタルヘルス疾患の一次予防について展望する。
- ②⑨ 『退職後勤労者の家族および近隣との「つながり」と高齢期の健康状態に関する調査研究』 2013年5月
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科講師 清野 薫子
- 勤労者が退職して高齢期となり、在宅での医療や介護などのケアを必要とする際には、様々な人々に支えられ交流を持つことが、その予後や健康水準に大きな影響を及ぼす。本研究は高齢者の家族や近隣とのきずなやつながりの実態を調査し、医療・介護ニーズ、生活ニーズとの関連を明らかにすることにより、超高齢化時代の地域社会づくりを展望する。

全劳济协会